
安芸の柁、春近し【架空戦国記】

三郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安芸の柊、春近し【架空戦国記】

【Nコード】

N8104P

【作者名】

三郎

【あらすじ】

「お前をいじめる奴は、全員ぶつとばしてやるよ」英雄を祖父に持つ青年・千若経友は、寂しげに沈む幼馴染を背負いながらそう誓った。女でありながら、武将「毛利元就」として家督を継ぐことになった内気な美少女・松寿姫を守るため、経友は陰謀渦巻く乱世の間を自慢の弓で切り裂いていく。正史とはほんのり違った、恋あり、友情あり、バトルありの熱血青春戦国活劇が今始まる

この物語はフィクションです。史実と異なる部分も多分に出てき

ます。どうかご了承ください。また、当作品の改稿作品を Arcadia 様にて連載中です。ご理解ください。

登場人物紹介

> i 1 7 5 7 9 — 2 2 8 3 <

【主人公】

> i 1 6 6 1 2 — 2 2 8 3 <

せんわかつねとも
千若経友

安芸の国人領主、吉川の三男坊。祖父に憧れ、武芸を磨く毎日を送っている真つ直ぐな青年。

毛利家の松寿姫とは幼馴染であり、放っておくことができない。

> i 1 6 6 1 3 — 2 2 8 3 <

松寿姫

安芸の国人領主、毛利家の長女。

性格は内気で心優しい。経友のことを憎からず想っている。

兄の死を契機に、乱世の過酷な運命に巻き込まれることになった。

3

【吉川家の人々】

> i 1 6 8 5 9 — 2 2 8 3 <

きっかわつねもち
吉川経基

通称、基爺。応仁の乱で活躍した英雄。飄々とした性格で、いつも周囲をからかっては楽しんでいる。

> i 1 7 0 2 2 — 2 2 8 3 <

たま
玖

経友の妹。あまり感情を表に出さない。

基爺をして、「吉川家で一番の才能がある」と言わしめるほど武芸に秀でている。

【毛利家の人々】

志道しじ広良ひろよし

毛利家の宿老。通称、志道の爺。

相合あいあ元綱もとつな

松寿の腹違いの弟。通称、四郎。

文武両道に長けている才能ある青年。毛利家の家督を狙っている。

【尼子家の人々】

尼子あまこ経久つねひさ

出雲の覇者。通称、又四郎。

中国地方の覇権を狙い、毛利家へ謀略を仕掛ける。

尼子あまこ久幸ひさゆき

経久の弟。通称、野洲やす。

新宮党と呼ばれる精鋭部隊を率いる無骨な性格をした武将で、槍の達人。

お話の舞台

> i 1 6 5 0 7 — 2 2 8 3 <

猿掛の松寿

水のせせらぐ音がする。小川の流れは、少年の肌に程よく冷たかった。

「きゃッ」

か細い悲鳴が不意に上がる。幼い頃より聞き慣れた声に、少年は思わず苦笑いした。

「何やってんだよ」

振り返ると、盛大に転んで着物を盛大に濡らしてしまった少女が、顔を赤く腫らしている。

おおかた川の流れに足を取られてしまったのであろう。なぜなら彼女は非常にどんくさいのだ。

少年は水音をばしゃばしゃと立てて、さも面倒くさそうに駆け寄った。

瀬に身を半ばほどずめた彼女は、はたから見ても面白いくらいに消沈している。その証拠に、いつもはふわりと浮き上がるような黒髪が、しゅんと元気を失くしていた。

この泣き顔も、既に見慣れたものである。

出会ってからもう何年になるかは覚えていないが、彼女ときたら始終こんな調子であった。

気づけば誰かにいじめられている。

もう、十を超えたと言う時分に、五つにも満たない幼子にいじめられていたのを発見した時には、ともするとこいつは独りでいても自分で自分をいじめてしまうのではなからうか、と思ったものだ。

「だつてえ……」

いつもなら透き通るように輝いている瞳が、今はどんよりと陰っている。

それを見て、少年は困ったように口を尖らせた。彼はこの伏し目がちに悲しみを湛える仕草がたまらなく苦手であった。

「ほら」

「……千ちゃん？」

「おぶつてやるから。山口の公方様はそうでもないけど、周防の御屋形様は遅刻に厳しいぞ」

と、赤くなっているであろう顔を見せまいと、背を向けて彼女に語りかける。

彼女の焦りが背中越しに感じ取れるが、知ったことではない。

何に焦っているかは分からないが、自分とてたまらなく恥ずかしいのだから、早くしてもらいたいものだ。少年は全身を襲うむずがゆさに身じろぎした。

と、背中にひんやりとした感触が預けられる。

意外な程に彼女の肌は柔らかかった。そう頭で認識した瞬間に、少年の胸が早鐘を打ち始める。

「ごめんね、千ちゃん」

彼女を背負い、やおら瀬から立ち上がる。

「久しぶりなんだろ？ 兄貴と会うのも。だったら、遅刻なんて締まらないじゃないか」

背中にかかる息遣いで、彼女が同意してくれたのだと悟る。

柘ついでの香りが鼻をついた。

彼女特有の匂いなのだが、少年はどうにも得意になれない。このツンとしていて甘い香りを感じるたびに、彼の胸はちくりと痛む。

「でも、兄様……私のこと忘れていたらどうしよう」

「なら、猿掛に戻るか？」

「お城は嫌。あすこはもう誰もいないもん」
力いっぱいかぶりを振ってくる。

彼女の両親は既にこの世を去っていた。仔細を存じているわけではなかったが、おおよその顛末は予想できる。

今の時世は、他者を虐げ、隣人を欺き、主を追い落とす無常がはびこっている。

戦が常となる時代。いわば戦国の時代とさえよう。

その渦中であつて、人一人が成し遂げられるなどあまりにも少ない。

そう、いくら彼女一族が安芸有数の領主 毛利の一族であつたとしてもだ。

「だったら……千ちゃんの来ている山口の方が良いよ」

毛利家は昨年先代を失い、混乱の真つ只中にある。吉田郡山の兄や腹心在家中の掌握に奔走しており、この非力な少女の心を慰める暇などないのだろう。

猿掛に、彼女の味方は一人もいなかったのだ。

彼女の悲痛な声色に、猿掛での生活を想起される。

心をしめつけられるような心地がした。

「そんな陰気臭い声出すなよ。こつちまで気が滅入ってくるだろ」
「だ、だだだつてえ……」

わざとらしく毒づいた少年に、思いの外狼狽する少女。

照れ臭そうに少年は、ぼそりと呟いた。

「お前をいじめる奴は、全員ぶつとばしてやるよ」

「ふえ……？」

素つ頓狂な声が背中越しに聞こえてくる。少年は顔を真っ赤にしながら、先ほどの呟きをかき消すように声を張り上げた。

「俺は鬼ともまな板とも恐れられた爺の孫だぜ。悪党は皆ぶつとばしてやるつて言つてんだ！」

大声が、長門の高い青空に吸い込まれるように昇っていく。

水しぶきが、彼を鼓舞するように力強く舞い上がった。

少年の盛大な啖呵に、彼女はびくつと硬直し、

「いつも思うけど、まな板って怖いのかな」

当然の如く、話の腰を折ってくれた。

「馬鹿、いい加減空気つてもんを理解しろッ」

「う、ううごめん……。でも……」

口から泡を飛ばす少年に、彼女は平謝りで頭を下げる。何度か背中を彼女の頭が叩いてきた後に、聞こえた言葉は、

「ありがとう」

涙交じりではあったが、嬉しそうでもあり、他の何がしかの感情が紛れているようでもあり　つまりは、彼の心を高揚させる類のものであった。

少年は照れ臭そうに頬を掻く。

「全く、お前は……松寿は何時になっても変わりやしねえ」

あまりにも弱々しくて到底放っておけるものではない。だから構う。

構ってやれば無邪気に喜ぶ。そして、彼女が喜ぶと少年の心が踊る。

そう、何時だって松寿は少年の心を縦横無尽に振り回してばかりだった。

出会ってからもう何年になるかは覚えていないが、彼女と自分ときたら始終こんな調子であったのだ。

> i 1 6 6 1 1 — 2 2 8 3 <

懐中の髪留め

一、

潮の香りが鼻腔をくすぐる。

瀬戸内海に面したこの湊みなとでは、今日もあちらこちらで店たなを出した商人たちが齒切れの良い声を飛ばしていた。

道端には様々な海産物が並べられ、安芸中から集まった人々がそれを吟味している。

元より湊の多い瀬戸内ではさほど珍しい光景ではないのだが、ここには特別人が集まっていた。

「まだか……」

縁台に座っていた青年は苛立たしげに舌打ちした。

竹筒に入った飯を乱暴に掻きこみながら、じつと海向こうに視線を送る。

「遅えなあ」

伸びきった前髪を指でいじくり、暇をもてあます。

もう、とうに元服して初陣も終えているのだから髪を剃っても良い頃合だが、どうにも踏ん切りがつかない。

父には心得不足と良く罵られているのだが、猿掛の姫君に髪を褒められてこの方、中々切ろうという気が起きなかった。

再び海向こうを見据える。

海中に大鳥居が立っている場所など、日ノ本ひろしと言えどもここ以外にはないと祖父に聞いた覚えがある。

鳥居の先には、こんもりとした丘のような小島が浮かんでいた。

安芸の宮島である。

厳島とも呼ばれるこの地は、瀬戸内においては、讃岐の金毘羅と双壁をなす人々の信仰を集める聖地とされていた。

天を衝く弥山みやまに、今日も雲はかかっている。

「船が来るけ、手前ら準備せえッ」

湊に詰めている水夫を叱咤する鬨の声に辺りが騒がしくなる。

船が来た。

舳先^{へんさき}が悠々と波を切り進み、この湊へと段々近づいてくる。立派な水押^{みよし}と大きな船体。あれはまさしく二形船^{ふたなりぶね}の証である。

「来た！」

二形船の到着を確認すると、青年はぽんと膝を打った。待ちわびていたとばかりに顔を綻ばせ、船着きに向けて身を乗り出す。

既に船着きには人だかりができており、水夫たちがもたらす荷に興味を寄せていた。

「ちよつと！ ちよつと、どいてくれ」

青年が人ごみを肩で押し分け、先へ先へと突き進んでいく。

視界が開け、小舟に乗り込んだ下津井の水夫たちが、一抱えほどもある荷をせつせと降ろしている光景が目飛び込んできた。

「あら吉川の坊ちゃん、鯛でも買いにきたんですか？」

「金吾さんか。違うよ」

横から声をかけてきたのは、馴染みの商人であった。

青年は振り返りもせず、降ろされた荷を凝視する。目当てのもの、まだ降ろされていないようだ。

「はあ、鯉ですか。なら坊ちゃん、近いうちに戦でもあるんかいの」「俺を食い気と結び付けて考えるのはやめてくれ。それと、俺は干^{せん}若^{わか}経^{つね}友^{とも}つて名がある。いい加減に、坊ちゃんはやめろ」

いい加減にしろとばかりに、隣金吾を睨み付けた。突然のことに金吾は驚いたように目をぱちくりさせると、やがてさも愉快そうに破顔した。

「何言つちよるんじゃ。確かになりこそ立派になりましたが、坊ちゃん坊ちゃんじゃないですか」

にやにやと経友の体軀を上から下へとじろじろ眺めてくる。その様子に経友は無然とした表情で、露骨に眉をしかめた。

とはいえ、このようなことに一々かかずらってはいられない。気を取り直して再び荷に視線を戻した。

「何をお探しなんで？」

「ん、ちよつとな」

興味深そうに問いかけてくる金吾に生返事を返す。

降ろされた荷の種類は、数え切れぬほど多岐にわたっていた。

ここ宮島は、信仰の拠点であると同時に交易品の一大集積地としての特性も兼ね備える。瀬戸内海で採れた魚に、九国の工芸品。そして、はるばる唐国から渡ってきた珍品の数々。九国の博多や、伊勢などと比べても遜色がないというのが、安芸の人々の誇りとなっていた。

大量の荷箱が各商家によって運ばれていく。

そのような中で人々の注目は、厳島家の紋が入った荷箱に注がれた。

荷箱には各地から献上された神社への供物が詰まっている。

人々の眼が明るく輝いた。箱が開けられ、露店に並べられようとしている。これから、あの大量の宝物が湊に集う人々に払い下げられるのだ。

青年は、その中から目当てのものを探り当てると、並べられる前に我先にと飛びついた。

「あつた！ それをくれッ」

「お、おいアンタ。困るよ、こういったことはちゃんと手続きを踏んで」

「他の奴に買われたらどうするんだよ！ 土下座でも何でもするか
らこれを買わせてくれッ」

「ちよ、ちよつと坊ちゃん。いい加減にしてくださいッ」

荷を運ぶ水夫に食らいつく経友を、金吾が慌てて引き剥がす。普段は笑みを絶やさない金吾が珍しく怒りをあらわにしていた。その剣幕に気圧されるように、経友は目を白黒させて後ずさる。

「困りますよ、坊ちゃん。商いには商いの作法があるけ、そんなやり方じゃあたしらがやっていけない！」

「……そうなのか」

「はあ……それで、目当てはあの唐物ですか」

金吾は呆れたようにため息をつく、舶来の珍品を指差した。

「そう、あの絹の髪留めが欲しい！」

息巻く経友を、金吾が困ったように手で制する。

「でも、あれ相当の和ねたん市がしますよ。あのような値打ち物、一体どうするんですか」

金吾がくだんの髪留めを一瞥した。経友もつられて視線を移す。

べつ甲の骨に、絹で千重咲ちかさききの椿をかたちどった飾りが付けられている。一目見ても、大陸の技術の粋が込められていることが容易に分かった。

経友が逡巡するように低くうめく。

「確かに。だけど、あれくらいでないと、機嫌が治りそうにない」

「機嫌……？ ああ、毛利の。そういえば、最近見かけませんかあ」

金吾の呟きに、経友が表情を暗くする。

「兄貴が死んで、あいつも忙しいからな。多治比の猿掛から吉田郡山に移るにしたって、大した手間だろう」

「あの興おきもと元様がねえ。まだお若いのお勞しい」

「まあな」

言って、北の吉田郡山へ思いをはせる。

永正年間、大陸との貿易利権をめぐる繰り広げられた周防の大内氏と畿内の細川氏の対立は、この瀬戸内に思わぬ混乱の種を持ち込むことになった。出雲の大大名たる尼子氏の台頭である。

尼子氏は表向きは畿内の細川氏討伐を謳っていたものの、その実密かに細川氏と繋がることで勢力拡大を図り、瞬く間に中国地方を席卷していった。

示し合わせたように反大内の姿勢を見せ始めた佐東の分郡守護である武田氏も、もしやすると尼子と繋がっているのかもしれない。

兎にも角にも安芸の情勢は相も変わらずに緊迫していた。

西国の覇者の座を巡って大内氏と尼子氏が激突する中、安芸の国人領主たちはどちらかへの従属を強いられていたのだ。

並みの器では到底耐え切れるものではない。

松寿の兄である毛利興元はそのような厳しい情勢下で、見事な名君振りを発揮していたように思う。大内を良く支えながらも、近隣の国人たちの心を一つにまとめあげた。

宍戸氏などの武闘派に悩まされるなど、時折文弱な面を垣間見せることもあつたが、その輝きが色褪せることは決してない。

恐らく、彼に天寿さえ備わっていれば、この国の史書にだって名を残したに違いあるまい。だからこそ 残された松寿の今後が俤ばれるのだ。

「葬儀はもう終えたのですか？」

「いや、まだまだ。喪主を松寿と四郎殿のどちらが務めるかで、家中が割れているらしい」

経友は苦みばしつた顔で頭を抱えた。

相合四郎元綱は、松寿の腹違いの弟にあたる。興元や松寿とは全く違った類の人となりをしており、性格は苛烈で上昇志向の非常に強い若者である。彼のその武辺は安芸の国中に知れ渡っており、経友の実家でも、「安芸に今義経あり」と何度も元綱のことは話題に上っていた。

いくら松寿が年長者であるといつても、彼女は女で、元綱は男だ。家督自体は順当にいつて元綱が継ぐことになるのだらうと予想できる。

だが、妻の子が家督を継ぐことになれば、間違いなく毛利家中の力関係が崩れる。

正室の子である興元に付き従っていた家臣たちは、今頃危機感を募らせていることだらう。

この問題は一朝一夕で片のつくものではなかった。

「まあ、そんなことはどうでもいい。問題は実の兄が死んでしまつて、松寿自身がすっかり参ってしまったらいいってことだ」

「なるほどねえ」

「だから、俺はあの髪留めが欲しい。あれくらい立派な出来なら、

きつと喜んでくれるだろう。なあ、金吾さん。俺が談判して駄目だというなら、あんたが代わりにやってくれないか？」

その言葉に金吾が苦笑いを浮かべる。

「先立つものがなくちゃ始まらない。おあしは、いくらまで出せるので？」

「良馬一頭くらいならくれてやれる」

躊躇いもせずに言い放つ経友を、金吾は珍しいものでも見るように見つめ、やはり表情を崩した。

「いやはや、坊ちゃんは惚れた女に尽くす男じゃなあ」

「ほ、ほ……惚れッ？ 馬鹿を言うなッ！ あいつがふさぎこんだままだと夢見が悪いだけだ。余計な詮索はやめろッ」

「はいはい、とりあえず合点承知にございます。坊ちゃんはここで待っていてつかあさい。取り急ぎ調達してきますよ」

と、自信ありげに片目をつぶる金吾。経友は一瞬面白くなさそうな表情をしたが、すぐに安堵の息をついた。いずれにせよ、これで目的の唐物は手中に収めることができそうだ。

「まあ、助かったよ。商いことはどうにも俺には難し過ぎる」と、笑顔で礼を言う。

「あれを貰ったら、あいつどんな顔するかな」

脳裏に浮かぶ幼馴染の泣き顔が喜色に塗り替えられていく。

経友は松寿に贈り物を渡す場面を思い浮かべ、一人成功を確信しつつほくそえんだ。

吉川家の三男たる千若経友と、毛利家の長女である松寿姫は、いわゆる幼馴染の間柄であった。

もう何年になるかは覚えていないが、物心つく前より頻繁に顔をあわせていたそうだから、相当昔からの付き合いであることは間違いない。

一番古い記憶は、山口に住んでいた頃のものであった。

西国の覇者である大内家は、近に住まう有力国人の子息たちを山口に引き取り、彼らに京風の手厚い教育を施した。

山口へと送られた経友と松寿は、才能に溢れた子供たちに囲まれながら、年少の数年間を共に過ごしている。

二人はすぐに打ち解け、四六時中共に遊ぶようになった。

同郷であることや、年の頃が近かったせいもあるう。

だが、そこに大人たちの政治的思惑が大きく関わっていたことも否定できない。

『お二人が仲良きことは、両家にとっても大変喜ばしいことでありましょう』

何時だったか、毛利家の家老が朗らかな笑みを浮かべながら、そんなことを言っていたのを覚えている。

吉川の武勇は安芸国内だけに留まらず、西国どころか日ノ本中に知れ渡っていた。

その大体が先代の武功に因るものだ。

もう五十年以上も前になるだろうか。都で大きな戦があった。

足利將軍家をはじめとする中央有力者たちの跡目争いに端を發したこの戦は、幕府の有力大名家を二分する大乱へと發展した。

延べ十萬を優に超える軍勢が京都で激突したのだ。

そのような大戦を経験したことない経友には、戦の全貌を思い描くことなどできなかつたが、榮華を極めた都が灰燼に歸したということから、その様相たるや凄まじいものであつたに違いない。

経友の祖父に当たる先代吉川経基は、管領（將軍の補佐役）である細川家が率いる官軍に属し、その武勇を存分に發揮した。

劣勢に友軍が逃げ惑う中、味方の屍を踏み越えて敵の侵攻を食い止める姿は、敵味方両軍の諸將から持て囃されたそうだ。

そして彼の勇姿は、今でも人々の語り草になっている。

そんな先代の活躍もあつてか、吉川家の安芸における立ち位置は非常に恵まれたものであつた。

一方の毛利家は、安芸の国人領主たちを取りまとめる代表者のような存在である。

経友と松寿。二人の関係が良好であることは、両家にとっても望ましいものであったのだ。

「もつとも、やましいことなど何もなく……あいつは手のかかる妹のようなものなんだよな」

と、大人たちの下世話な配慮を思い出しながら、馬上の経友はつんと口を尖らせた。

宮島で手に入れた髪留めを懐に仕舞い込み、疾風が土を巻くように馬を走らせる。

視界の隅を、景色がぐんぐんと駆け抜けていく。まるで自身の逸る気持ちが表れているようだ。

経友の両眼は目的地である吉田の地をしっかりと見据えている。更にその先には浮かび上がるは松寿の姿。

想像の中の彼女は、少しやつれているように思えた。

「気落ちし過ぎてなきやいいけど」

山口にいた頃は毎日のように一緒に遊んでいた彼女であったが、安芸に帰ってからこの方、ほとんど顔を合わせる機会がなかった。

既に二人とも成人しており、軽率な行動が許される年齢をとうに過ぎているのだ。

今回のことであっても、それは例外ではない。

毛利家当主である興元の早世。

本来ならば、当主の不幸には家を代表して弔意を示さなければならぬ。

正式な弔問は長兄か次兄のいずれかが派遣される予定であり、その前に安易な訪問をするなどもつてのほかだと言える。

であるから、経友が松寿の元へと駆けつけたいと両親に相談した時、彼らには当然の如く渋い顔をされた。

平常ならば、こうして彼らの反対を押し切って松寿の元へ向かうなど考えられなかっただろう。

居ても立つてもらえなくなつた　というのが正直なところであつた。

何せ松寿の毛利家中における立ち位置は非常に危うい。

意見の二分した毛利家中で、片翼の御輿である彼女は、今も相合元綱を次代当主へと推薦する家人たちから執拗な嫌がらせを受けているはずである。

当主としての資質……。大内につくか尼子につくかといった外交方針の行く末……。

彼女を攻撃する材料は山ほど存在する。

経友は、肉親を失つた上に政治的抗争の矢面に立つ羽目になつた彼女の胸中を慮つて、心痛に唇をきゅつと強く噛み締めた。

「この髪留めが慰めになつてくれりゃ良いんだが……」
懐に手を当て、ささやかな目論見の成功を祈る。

そここうしている内に、潮の香りが大分薄れてきた。

周囲の景色が移ろつていき、潮気に強い黒松の林に代わつて、櫓ならの木が目立ち始める。

「っと、ようやく佐東に着いたか」

経友はやや緊張感を孕んだ声色で、一人呟いた。

安芸の国佐東郡。

湊のあつた佐西郡に隣接するこの地域は、安芸国内でも比類なき家勢を誇る武田家が治めている。

街道沿いに郡山を目指した場合、必ずこの佐東を通ることは避けられないだろう。

「行きは上手い具合に見つからずに抜けることができたが……」
視線を地面に落として、しばし熟考する。

この地を治める武田家と、経友の属する吉川家は数年前から小競り合いを繰り返していた。

もし、経友の姿を武田家の人間に見咎められれば、ただでは済まないだろう。

迂回すべきか、直進すべきか。

二者択一を迫られた経友は、

「まあ、考えたところで仕方がない。なるようになるか」

一寸の躊躇いの後、そのまま直進することを選んだ。

損得勘定よりも、一刻も早く松寿の元へと駆けつけたいという気持が勝ったのだ。

「熊谷、香川、山県……せめて、面倒な奴に見つかりませんように」
心中で武田家の諸將を指折り数え挙げながら、経友は何事もなく通り過ぎれるよう切に願った。

二、

「そこ行く若造。しばし待ていッ！」

懐に髪留めを仕舞い込み、疾風が土を巻くように馬を走らせる経友を野太い声が呼び止めた。

「やはり、吉川の小僧か。貴様誰の許しを得て、この佐東の地を我が物顔で走っている」

経友の表情がうんざりしたように歪む。

吉田郡山への道中、この声だけは聞きたくないと思いついていた声の一つが耳に届いたからである。そう、坂の上から経友を呼び止める馬上の武者は見知った顔であった。

「……何だ、重房しげふさか」

馬首を返して、声の主をねめつける。

男は神経質そうな顔に似合わぬ大きな体格に、色鮮やかな赤い射籠手を身につけていた。

「何だとは何だ、この野郎ッ！」

経友の反応に、男は顔を真っ赤にして怒鳴り散らしてくる。

この男の名前は山県重房。

武田家の重鎮である山県重秋やまがたしげあきの息子であり、明日の武田家を背負って立つ若手筆頭の一人である。

重房と経友は、まだ両家の関係が悪くなる前に山口で知り合ってから、何度も戦場で顔を合わせていた。

いわば腐れ縁と言っても差し支えのない間柄である。

「狩りの途中か」

「おうともよ。狙いは貴様だ。クソガキめ」

八尺を超える大弓を構えて狙う先は、紛うことなく経友の喉元であつた。

「小僧、小僧と……お前だつて似たようなもんじゃないか」

「阿呆。我が山県家は、守護様の被官。周防のごうつくばりの腰巾着とは格と言うものが違うのだ」

呆れた口調で返す経友の態度など気づいていない様子で、重房は鼻を高くして胸を張った。

「はあ……そうか」

経友はため息をつくつと、馬の腹を軽く蹴つて歩みを促した。

これ以上は関わつていられないと判断したのだ。

だが、歩みを進めようとしたその瞬間、重房から放たれた矢が馬の足元に深く突き刺さる。

「動くな、阿呆がッ！」

苦楽をともした名馬でなければ、今の射撃で恐怖に立ち竦んでしまったことだろう。

経友は、青鹿毛を揺らして主人の判断を待つ愛馬に感謝の念を送りつつ、事を荒立てぬように言葉を選びながら静かに口を開いた。

「見逃せ、重房。俺は見ての通り戦に来たわけじゃあない。ただの通りすがりなんだ。武士が戦場以外で功を立てたところで意味はないだろう」

経友の言葉に、重房は荒々しく鼻を鳴らして唾を飛ばした。

「何を馬鹿なことを……こそそと領内を嗅ぎまわるネズミを捨て置く奴がいると思つていいのか」

憎々しげにこちらを睨み付ける彼の態度には、塵ほども取り付くしまがない。

「お前なあ……」

経友は嘆息しつつ、自分の不運を深く呪つた。

これが経験を重ねた壮年の武将相手だったのならば、まだ交渉の余地もあったかもしれない。

しかし、重房は経友と三つと違わない年齢である。

重房の瞳の奥底でめらめらと燃えている感情は、少しも揺らぎを見せることがなかった。

元々、昔から何かと競争の種を持ち込んでくる男であった。

剣の腕を競おうと持ちかけてきては喧嘩になり、馬術を競おうと言えば取っ組み合いになり……今ではそれが命の取り合いにまで激化している。

先例を踏襲するならば、今回も小競り合いになるのだろう。

経友は半ば絶望的な気持ちで肩を落とした。

「ネズミ、ネズミと……お前、ネズミ苦手だっただろ」

「馬鹿野郎、それは言うなッ！」

不意にでた言葉に、重房が豪腕を振り回して、まるで火がついたように怒り狂う。

どうやら、触れてはいけない部分であったらしい。

経友は痛くなってきた頭を抱えつつ、それでもなんとか話の切り替えはできないものかと糸口を探った。

「馬鹿はお前だ。考えもなしに戦を起こす奴があるか」

と、強い口調で言い放つ。

山口に居た頃ならばまだしも、今はれっきとした敵同士である。

戦場以外で個々人が勝手に争うことの意味を重房だって弁えているだろう。

自分と相手だけの問題ではない。経友はそう強く目で訴えかけた。

だが、重房にこちらの意図は伝わらなかったようだ。猛獣の笑みを浮かべて再び矢をつがえると、ぎりぎり弦を引いてこちらに狙いを定める。

「なに、狩りの獲物と間違えられて、吉川のガキが討ち取られるだけだ。あわよくば、孫煩悩の爺が悲嘆にくれて昇天でもしてくれれば御の字だな」

その形相はまさに野獣のそれであった。

常人ならば震え上がりそうな殺気を一身に受けながら、

「やはり、打物うちもの振るうも止むなしか」

経友は諦めたように肩を落とすと、

「仕方ないな……」

絞り出すように言葉を紡ぎ、深く息を吐いた。

この山県重房は武田家中においても有数の荒武者だ。生半可な覚悟で太刀打ちできる相手ではない。

立ち合うならば、それ相応の覚悟をもって臨まねばならないのだ。下腹に力を込める。全身の血が冷たくなっていくのを感じ、周囲の風景がにわかに色褪せ始める。

これ以後、ここは血煙の舞う戦場となる。この場で色持つ者は自分と眼前の敵だけだ。

覚悟が決まった。

「お前の我俣聞き入れてやろう。千若経友推して参るぞッ！」

叫んで、馬の腹を力いっぱい蹴り飛ばす。馬は主の意を汲むと、大きくいななき蒼いつむじ風と化した。

「おう、来いよ千若ッ！」

構える敵に目掛けて、経友は一直線に坂を駆け上がっていく。瞬く間に縮まっていく敵との距離。

重房の矢をつがえる手に力が込められた。

強弓は折れかねんばかりに湾曲し、経友を射殺す期を虎視眈々と狙っている。

対する経友も相手の一挙手一投足に注意を張り巡らせ、期を計る。両者の距離が更に縮まっていく。

「つまりらぬ争いに使って良い刀ではないがッ……」

経友が先祖伝来の刀を抜き放つ。

名刀狐ヶ崎 鎌倉の世より吉川家に代々伝わる三日月刀である。

陽の光を受けて鈍く輝くその刀身は、数多の戦を潜り抜けてきた凄みをかもし出していた。

じきに、両者必殺の間合いに入る。

経友が狐ヶ崎の切っ先を敵に向け、自身の身体を半身はんみに深く沈み込ませた。

往古より伝わる一騎打ちの作法である。

射向いむけの袖そでがないことが悔まれるが、この際致し方あるまい。防具がなくとも、これで大分敵の狙いは大分狭まるはずだ。

「ふん、古臭い型をッ！」

重房の手から、矢が放たれる。

射切り矢が螺旋を描きながら風を切っていく。その甲高い音は敵に死をもたらす黄泉の調べを思わせた。

思わず息を呑む。

そして、考えるより先に身体をそらした。

風が身体をすり抜けて、肩口が大きく裂ける。それに伴い、鮮血が飛び散った。

完全に避けたつもりであった。計算の狂いに歯噛みする。

「重房も修練を欠かしてこなかったということか……だが、この勝負もらった！」

自身を鼓舞するようにそう叫ぶと、経友は馬足をさらに速めて相手へ肉薄する。

そして、すれ違いざまに一閃。

刀は三日月の軌跡を描き、弓の弦を断ち切った。

「ぐっ……」

「遅いッ！」

すぐさま太刀を抜き放とうと動く重房を制するように、返す刀を浴びせかける。

だが、重房もただやられてはいない。弓を槍のように振り回し、経友の切っ先を逸らそうと試みる。

沈み込むような硬い音が辺りに響き渡り、草木が恐怖に揺れる。

「せいやッ」

歯を食いしばって、太刀を上方に振り抜く。

重房の弓の姫反りが切り飛ばされ、勢い良く宙を舞った。憤怒に満ち溢れた表情に一筋の焦りが流れる。

後は振り上げた太刀を力一杯打ち下ろすだけで、この戦いは終わる。

経友が確信を持って柄に渾身の力を込めた刹那、

「お、おのれえっ！」

やけくそ気味に放たれたけん制の蹴りが、経友の胸を突いた。

胃液の逆流するような痛みにも、経友の顔が歪む。

馬が察して体勢を傾けてくれなければ、あばらの二、三本は折れていたかもしれない。

両者の間合いが再び離れた。

「今一度ッ」

すうと、精一杯に息を吸い、太刀を構えた重房と対峙する。

そして、打ち合いに臨むべく再び馬を走らせようとした、その時

「なッ」

何処からか放たれた矢が二人の戦いに終わりを告げた。

「新手法ッ……！」

すぐに経友は周囲の気配を探る。

四人から五人といったところか。騒動を聞きつけた武者たちが集結しつつあるようだ。

「口惜しいが、この勝負預けるぞ、重房ッ」

ただでさえ、豪傑重房の相手をしているのだ。新手に囲まれてはひとたまりもない。

経友は迅速に馬首を返すと、一気にこの場から離れようと馬を走らせた。

「ま、待て！ おのれ、どこのどいつだ。折角の勝負に水をさした馬鹿野郎は！」

激昂する重房には悪いが、すでに相手の弓の弦は切った。もう、追いかけてくることも叶わないだろう。

武者の本分に最後まで付き合えなかったことは心残りだが、もとより今の自分には他にやるべきことがある。先を急がねばなるまい。重房の怒号が段々と遠ざかっていく。

「誰だ。迂闊者はこの俺が叩き切つてやるッ！」
重房の怒りたるや尋常なものではなかった。恐らく、この怒りを収めるだけでも一苦勞だろう。

そのようなことを考えていると、遠くかすかに聞こえる押し問答の中に重房の狼狽したような声を聞き取った。

「お、親父殿……」

その声を耳にして思わず後ろを振り返る。

新手の顔ぶれには、重房の父である山県重秋が混じっていた。豊かにたくわえた口ひげを揺らし、鋭い眼光をこちらに向けている。

（息子を守つたのか？ あの重秋殿が……？）

山県重秋は勇猛果敢で豪快な性格で知られていた。息子の大勝負を邪魔するような無粋な真似をするはずがないと思つていたのでが……。

「まあ、考えたところでしょうがないか。さあ、ぐずぐずしては松寿のところに通りに辿りつくまでに日が暮れてしまふ。急いでくれ、豊国ッ！」

豊国と呼ばれた馬が、その声に応えるように青鹿毛の体軀を揺らして大きく飛び上がる。

目指す先は吉田郡山。幼馴染のいる毛利家の本城である。

経友は文字通り人馬一体となつて、佐東の地を一気に駆け抜けた。

三、

吉田郡山城は、安芸北部にそびえたつ毛利氏の本城である。

二つの川に挟まれた天然の要害であり、猿掛などの支城と合わせて鉄壁の防備を敷いていた。

「吉川の千若経友である。門を開けてくれッ！」

経友が声を張り上げると、間を置かずして矢倉門が開かれた。

吉川と毛利の仲は良く、家中の者とも顔見知りである。彼らの変わらぬ対応に、経友はいくばくかの安堵を覚えた。

「千若丸か。久しいの」

「志道殿か。元気そうだな」

家人たちに囲まれながら、出迎えに現れたのは、毛利家の宿老である志道広良しじひろよしだった。

舟形に折りたたまれた烏帽子が、年齢相応の深い皺の奥に光る理知的な瞳に良く似合っている。

「松寿は元気になっているか？」

「健やかではあるよ。じゃが、今は『来客』があつての」

「来客？」

胡乱げな瞳で屋敷の玄関を見やる。この時期の来客というと、兄の手問といったところであろうか。

経友が思索を巡らせていると、用事を終えたらしい『来客』たちが姿を現した。

『来客』は三人。そのいずれも身なりが整っており、大層な身分であることが容易に見て取れたが、特に中心の一人は頭抜けていた。肩ほどにかかる長髪に、切れ長の瞳。一見女性と見紛うその相貌は他と比べようがない。

松寿の弟、相合四郎元綱である。

「これはこれは……千若殿ではありませぬか」

「四郎殿。久しいな」

元綱が扇子を口元に当てて微笑む。常に笑みを絶やさぬその表情は気品に満ち溢れており、何とも艶やかな色気を放っていた。

（だからこそ、周囲から『今義経』などと誉めそやされるのだからな）

と、一人納得する。

経友の妹も「顔はすこぶるよろしい」と大絶賛していたのをふと思い出した。

「今日はどうしたんだ？」

「これは異なることを。我々は毛利家臣であり、私は血族ではありませんか。家族が家にいることを不思議に思うのは、魚が川に住むことを疑うようなものでしょう」

口に出してから、我ながら間の抜けた質問をしたものだと後悔する。

志道が『来客』などと他人行儀な呼び方をしていたから、それに引つ張られてしまったのだ。慌てて頭を下げ、それを取り繕う。

「まあ、千若殿らしゅうございますな……」

くすりと笑う元綱とは対照的に、傍に控えた一人が不機嫌そうに眉をしかめた。

毛利家の重鎮、坂広秀である。

「むしろ、吉川の御曹司が何故郡山に居られるのか、手前としてはそちらが気になりますな」

「止めよ、広秀。客人に失礼であろう。千若殿、まこと申し訳ありません」

皮肉を投げかける広秀を、元綱が強い口調でたしなめる。

もっとも、経友としては広秀に文句を言う気にはなれなかった。

本来ならば、吉川の代表がしかるべき手続きを踏んで弔問すべきなのだ。

その前に、こうして何の約束もしていない者がみだりに顔を出している時点で、礼儀に反している。

こちらに非があるのは自明の理であった。

謝らねばならない。経友が声をあげようとしたその矢先、傍仕えのもう一人がゆっくりと口を開いた。

「四郎。いたずらに時を使うものではない」

それは小さな声であったが、とても力強く、この場を制するには十分すぎるものであった。

声を発した男の名前は渡辺勝^{わたべかつ}。

鬼殺しの血を引く歴戦の勇者である。毛利家中でも最強の一角に置かれる渡辺党を率いる彼の名は、秋の国中に知れ渡っていた。

元綱は勝の声に頷くと、経友に向かって優雅に一礼した。

「どうか、今までのように自分の家だと思って、ごゆるりとお過してください。では我々はこれで失礼いたします。行くぞ、広秀、勝！」

声に応じて、傍に仕えた二人が元綱に付き従っていく。志道を見やると、何とも複雑な表情をしていた。

「それでは上がってもいいか？」

「ああ、ゆっくりしていくが良い。松寿様もお喜びになることじゃろうしな」

志道が元綱たちから視線を離さずにそう答えた。彼の眼差しは、家中の同朋に向けるものとは思えないほど険しいものを秘めており、経友は内心引つかかるものを感じながらも、その場を後にした。

「せ、千ちゃん。どうしたの……？」

先刻の戦いを振り切って、吉田郡山の領主屋敷にたどり着いた経友を出迎えたのは、松寿の驚いた顔であった。

久方ぶりの再会だというのに、随分と間の抜けた言葉を投げかけてくる。

経友は面倒くさそうに頭を掻きながら、横目で彼女を見た。

想像していたほどではなかったが、しばらく見ないうちに少し痩せたように見える。

目の下にも大きくなまができていた。恐らく、人には言えない苦労をいくつも抱え込んでいるのだろう。

「決まっている。泣き虫の面を拝みにきた」

照れくさそうにそっぽを向いてこう返す。

松寿は驚いたように目を丸くした。何とって良いものか決めかねているといった様子だ。

「お父様の用事とかでなく……？」

「違うよ。うちの親父は追って正式な使いを出すはずだ」

言いながら、何故か祖父の姿が脳裏に浮かんできた。常日頃祖父がそらんじている古典の一説に、用がないのに訪ねる云々を謳ったものがあつた気がする。

「だが、用もなく訪ねてきたわけじゃないぜ。俺はそんなにあつかましくない」

身振り手振りを交えて泥沼の訂正を積み重ねる経友を見て、松寿は表情をころつと変えて、嬉しそうに微笑んだ。

「……ありがとうね。千ちゃん」

心をわしづかみにされるような笑顔であつた。

薄く紅を引いた唇が白い肌によく映えている。

数ヶ月ぶりに見た松寿の笑顔を見た気がするが、その威力は以前より更に増しているような気がした。

元より物腰は柔らかかつたと思うが、それに何処となく色気が備わってきているように感じられる。

従来の仕草ですら、心鎮めて相對することができなかつたのだ。

当然、彼女の変化を前にして経友が冷静でいられるはずもなかつた。

(……こいつ、こんな色つぽかつたかな)

平静を装つとする経友の苦闘がよほど滑稽に映つたのか、松寿がくすくすと小さな笑い声を上げる。

「別に用がなくても良いんだよ。むしろ用もないのに訪ねてきてくれた方が嬉しいの」

「あ、それだ」

松寿の言葉に先ほどの疑問が解決した。照れ隠しも兼ねて、それを口に出す。

「何が？」

「うちの爺さんが似たようなこと言つてた」

「論語の一説ね。吉川のお爺様は博学でいらつしやるから」

言つて、松寿が論語の一説をそらんじてくれた。

経友は思わず感嘆の声を上げる。この娘ときたら、行動はいちいちどんくさいくせに頭の回転はすこぶる速いのだ。

「しかし、訪問と言うのは用がない方が良いのか。失敗したな……」
懐の髪留めを出す機会を逸してしまい、経友は困ったようにあさつてを見つめた。

その様子を見て、松寿が怪訝そうに首をかしげる。

「千ちゃん、さっきからどうしたの？」

「あ、いや……」

「懐をちらちらと気にしているし、お菓子でも持ってきてくれたとか？ それならお茶か白湯を用意するよ？」

「違う、これは……」

彼女に目ざとく懐の物を見つけられてしまい、退路を立たれる。あれこれとごまかした所で、賢い松寿には見抜かれてしまうであろうし、何より隠し事をする人間だと思われるのも癪というものだ。ここにいたつては、致し方ない。勇気を振り絞って、懐から髪留めを取り出した。

「あ、髪留め……すごく可愛い……。もしかして、これ私に？」

「ん、あー……そうだな」

照れくさそうに答え、ぶっきらぼうにそれを渡す。

予定が狂い、経友は混乱していた。

本来、髪留めに期待していた役割は子供の玩具である。

松寿は恐らくいつものように泣きじゃくっているはずだ。だから、それをからかいつつ、贈り物で驚かせて泣き止ませれば良い。

そのようなことを考えていたのだが、松寿は泣いていなかった。

その上、懐中に秘めた策も暴かれてしまう始末だ。

あまりの恥ずかしさに顔に血が上ってくる。まともに松寿の顔が見られない。

これでは意味がない。そう思っていた矢先、彼女に変化が訪れた。

予期せぬ変化であった。それが経友を驚愕させる。

「……あ、あ、ありがとう……」

その声を聴いた瞬間、経友の顔から血の気が引いた。

松寿は泣いていた。髪留めをぎゅっと握り締め、大粒の涙をぼろぼろとこぼして嗚咽している。

これでは本末転倒だ。なんのために大金を払って、髪留めを手に入れたのか分からないではないか。

「お、おい！」

己の迂闊さを深く悔いる。考えが上手くまとまらない。

(くそつ、なんたる失態だ)

彼女の嗚咽は一向に止まる気配が見られない。大粒の涙が畳に染み込んでいく。

経友はどうして良いか分からずに頭をかきむしった。

「な、なあ。泣き止んでくれよ」

「ううん。ううん、違うの……違うの。これ、私嬉しくて……」

「へ？」

よくよく見ると、松寿は泣きながら微かに笑顔を浮かべていた。

潤んだ瞳に映った感情は、悲しみだけではないように見える。

「私……まだ、独りじゃなかった……千ちゃんがいてくれて、本当に良かった……」

松寿は涙を指でぬぐいながら、その顔を喜色に染めて何度も何度も礼を言ってきた。

これには、経友もたまらない。

「ま、まあ喜んでくれたなら良かったよ」

こつも喜んでもらえる、全身を無性に掻きたい衝動に駆られるが、流石にこつした空気の中で掻くこともできない。

恐らく自分は何とも珍妙な表情をしているはずだった。

「千ちゃん」

「ん、どうした？」

訳が分からずに問いかける。

「今日ね、尼子経久様の使いの方が来たの。内容は縁談のお誘い」

「え、縁談ッ？」

思わず、身を乗り出して聞き返す。尼子と毛利が婚姻するとなれば、安芸国内に与える影響は計り知れない。いや、そもそも誰と誰が婚姻すると言うのか。

「うん、私ももう年頃だからって。経久様の息子の興久様おきひさの嫁に来てはくれないかって」

「しょ、松寿が、か？」

青天の霹靂とはこのことだろうか。あまりに突然の出来事であったため、経友は何といって良いか分からずに口をパクパクさせた。

「毛利家にとつても良い話だからって。四郎君は賛成していて」

「そ、そうか」

話が耳から耳に突き抜けていく。心が離れて言葉が頭に残らない。

「千ちゃんは……どうした方がいと思う？」

「へっ？ あ、そ、それを俺に聞くのかッ？」

急に話を振られて、経友は盛大にうるたえた。

興久と言うのは、恐らく尼子家の三男塩冶興久のことだろう。祖父の交友関係を通じて、何度か顔をあわせたこともあるので面識はあった。

年の頃は、経友とさほど変わらない。顔の作りも端正だし、武者としての気概も持ち合わせている。少々、気位の高さが鼻についた気もしたが、そもそも尼子家の息子たちは、そのいずれも立ち振る舞いが洗練されている。だから、気位の高さも立つべきところに立てば長所になりうるだろう。

（そついや、妹も『顔はとても素晴らしい』と言って、いたく気に入っていたな）

青年と松寿が並び立って夫婦となっている様を思い浮かべてみる。なるほど、物静かな男女と言うことで、確かにお似合いのような気もする。

「千ちゃん……？」

だが、どうにも気に入らない。

毛利家にとつて、尼子とつながりを深めることはそう悪いことではない。

周防の大内はいい顔をしないだろうが、それは吉川とて同じだ。吉川は大内側に属していながら、尼子とは血縁関係にある。要はどちらへも転がることのできる体制を整えて置けばよいのだ。

「だが……」

しかし、先述したように尼子家の男子は気位が高く、そして厳格だ。仮にそのような家に鈍臭い松寿を放り込んでみるとする。松寿は果たして耐えられるだろうか。いや、そもそもいじめられたりするんじゃないだろうか。

悩むたびに、想像が悪い方向へと進んでいく。

「千ちゃん、どうしたの？」

「へっ？ ああ、おうっ。ちょっと考えていた」

「答え、出た……？」

松寿がこちらをおずおずと見上げながら訪ねてくる。その瞳は小刻みに揺れており、今回の件について戸惑っているように思えた。

それに気づいたとき、経友は得心がいった。

(ああ、松寿も困っているのか)

ならば、答えは決まっている。気弱な彼女が迷いを胸に秘めて、何処かへ行けるものか。

「んー、合わない気がする、かな」

「結婚するべきでないってこと？」

「ああ、うん。そうなるの、かな」

「そっかあ……」

松寿が深いため息をついた。胸の辺りで髪留めを抱きしめるように両手を当て、そつと目を閉じる。

心底安堵していると言った風に見えるその仕草は、経友の返答が正解であったと確信させるに十分なものであった。

「分かった。私、縁談断るね？」

「お、おい。こんな簡単に決めて良いのかよッ？」

「うん、良いの」

「そ、そうか。なら良いんじゃないの？」

関心が無いといった態度を取り繕って、経友が視線を逸らしてほそりとそう呟く。

「千ちゃん」

聞き慣れた細い声が、いつもより近くで聞える気がして、内心慌てた。

見れば実際に両者の距離が狭まっている。

正確には、触れ合っていた。彼女が頭を経友の胸に預けるときは、いつも決まって安心した後だ。

「ありがとう」

彼女のふわりと柔らかい黒髪が揺れ、いつも鼻をくすぐってくる柘の香りが、今日は殊更に強く感じる。

自ずと、顔から湯気が立ち上るくらいに赤面した。

人の心を縦横無尽にかき回す。これだから、自分は松寿は苦手なのだ。

出会ってからもう何年になるかは覚えていないが、彼女と自分ときたら始終こんな調子であった。

出雲の尼子経久

一、
松寿に髪留めを渡した翌日、経友は吉川の本城たる小倉山城に帰ってきた。

豊国を庭先に留め、自身の身体を労わるように思いつきり背を伸ばす。

「あら、千坊おかえり」

「おばあちゃん、ただいま」

優しい声に振り返ると、経友の祖母が庭先の花に水をやっていった。経友の姿を見ると、嬉しそうに屋敷内に呼びかけてくる。

「おじいさん、千坊が帰ってきましたよおっ」

「おー、千坊帰ってきよったか」

若々しい声とともに、屋敷の揺れる音がした。やがて、屋敷の間口に六尺を超える巨体がのそりと現れる。

経友の祖父、吉川経基であった。

「ただいま、基爺もじい」

そのあいさつに、基爺は太陽の香りのする笑顔を向けてくれた。経友は、我が祖父ながらその存在感に圧倒されて見惚れてしまう。ぼろを纏っているのだが、少しもみすばらしい印象を他者に持たせない。むしろ清貧と形容した方がしっくりくるだろう。

八十歳をゆうに超えているというのに、未だ筋骨隆々としたその肉体は少しも衰えを見せていない。

身体のうちらこちらに深く刻み込まれた数多の刀傷は、応仁の大乱を駆け抜けた彼の輝かしい栄光を表しているように思えた。

「昨日から一体何処をほつき歩いていたんだ？」

基爺が腕組みをして問いかける。口調や表情に怒っている素振りは見られない。

だが、経友は祖父のそうした仕草にびくっと身体を強張らせた。

鹿を絞め殺せそうなくましい腕で腕組みをされているのを想像してもらいたい。経友が怒られやしないかと必要以上に萎縮してしまったところで、誰も彼を臆病者とは馬鹿にできないだろう。

「……松寿のところへ、行ってた」

「何……だとツ？」

「うっ」

祖父の表情が一変するのを見て、経友は更に及び腰になる。

基爺はしばらく真剣な面持ちで何がしかを考え込んだ後、声を張り上げ祖母に笑いかけた。

「おい、婆さん。千坊が男になって帰ってきよったぞ」

「あらまあっ」

「なっ、なんでだよ！」

慌てて否定するも、祖父母はにやにやと面白そうにこちらを見ながら、こそこそと何かを言い合っている。

一体どんな想像をしているのかと、経友は頭が痛くなってしまった。

「違っっ！ 単に唐物を買ってやっただけだっ」

「ほう、唐物と申したか」

再び、基爺が目を丸くする。祖母もこれには驚いたようだ。

「おい、婆さん。千坊が毛利に縁談を申し込んできよったぞ」

「あらまあっ」

「だからッ！ なんでそうなるんだよッ！」

「ええじゃないか、減るものでも無しに。早くひ孫をこさえて俺に見せてくれ。そうしたら、喜びのあまりに昇天してやるよ」

「あああ、もうっっ！」

経友が地団太を踏む様に、祖父母が腹を抱えて笑い転げる。祖母は上品にからからと笑い、基爺は豪快にげらげらと辺りを揺らした。その様子を見て、経友はがっくりと肩を落とした。

「あら、その肩……千坊、怪我をしたの？」

「ん、ああ。松寿のところへ行く途中、山県のところの重房とやりあった」

不安げに傷を見つめる祖母を心配させまいと、肩をぐるぐると回して見せる。

「山県の坊主とやりあったのか。して、殺したか？」

「あちらの親父が割って入った。勝負は分けたよ」

興味深げに事の仔細を問い詰めてくる基爺に、経友は丁寧に状況の解説をしながら、その時のことを振り返って見せた。

「成る程なあ。相も変わらず馳せ弓もできぬとは……まこと無粋な弓の射方をするもんだ」

「だが、強力に磨きはかかっていた。だから、避けきれなかったんだ」

重房が放つ弓の威力には、経友も素直に舌を巻いた。だからこそ、このような弁明をして見せたのだが、

「それは単なる修練不足よ。その証拠にだな」

とその弁明を軽く切って捨てると、ごつごつとした手の甲で経友の胸をかるく小突いてきた。

「お前、みぞおちを蹴られたと言ったな。それは良くない。日頃、申し合わせの鍛錬しかやっていない証拠だ」

「あつ……」

「これについては、豊国の大手柄だな。俺の孫を良く救ってくれた」
言って、基爺は庭先に繋がれていた豊国の青々としたたてがみを優しくさすった。豊国は心地よさそうに一声いななくと、その感触を堪能するように静かに目をつぶる。

「ははは、可愛いやつめ。どこかかゆいところはないか？ 俺が掻いてやるっ」

「ち、父や兄たちとの訓練を欠かしたことはないんだ」

ばつが悪そうに俯く経友。基爺はその様子を見て、不思議そうに目をぱちくりとさせている。

「そりゃ、お前」

満面の笑みを浮かべつつ、基爺は自身の胸をどんと叩いてみせた。「あんな雑魚どもだけじゃなく、たまには俺とやってみろってことだろうが」

「うえ……基爺とか」

思わずげんなりとする。父や兄弟たちが眼前の祖父と鍛錬を行わない理由は一目瞭然である。領内経営の仕事は山ほどあるというのに、日頃の鍛錬で大怪我をしまつては元も子もあつたものではない。

そんな心が透けて見えたのか、基爺は愉快そうに目を細める。

「だが、玖たまちゃんは良く挑んでくるぜ」

「いや、あいつはまだ物の道理が分からないからだろう」

「うんや、あの娘はいずれ兄どもを超えるね。今を時めく巴御前、槍を振るえば男も怯える。だが、色男には滅法弱い」

言つて、再びげらげらと笑い転げる。

本当にこの爺は人生を楽しく謳歌しているものだ、経友は深いため息をついた。

「んで、どうするね。鈍っているようだし、鍛えてやってもいいんだぞ」

「んー……」

にやにやとこちらを眺める基爺のことはさておいて、今の経友には一つ気がかりなことがあつた。

松寿を取り巻く不穏な情勢のことだ。

志道の面持ちから察して、この問題は決して容易く解決するようなものではない。最悪、毛利家中で血が流れる可能性すらある。

経友はしばし考え込むと、意を決するように口を開いた。

「んじゃ……頼むかな」

「ほえ？」

基爺が意外そうな声を上げる。

「何でそこで驚くんだよ……」

「いや、普通は断るだろう。お前どっかで頭でも打ってきたか？」

「そんなんじゃないさ。ただ、松寿のところがきな臭くてだな」

と、言いかけたところで自分の迂闊さを深く責めた。

自分を見つめる複数の視線があからさまに、獲物を見つけた猛獣のそれに変わっていたからだ。

「へえー、へえー。お前がなあ」

「あらあら」

「兄者かっけー」

慌てて彼らが自分をからかう前に先手を打とうと、口先から泡を飛ばす。

「何だその目はッ！ てか、ごくごく自然に混ざってくんな玖！」

と、いつの間にか祖母の隣に引っ付いていた妹に矛先を向ける。

ところどころ癖の抜けていない短髪に、何処か眠たげな猫目がびくりと揺れた。

経友は妹の様子に普段と違ったものを見つけて、胡乱げに視線を投げかける。

「お前、その格好どうしたんだ？」

今の玖は普段と比べて随分と動きやすそうな格好をしていた。

薄手の小袖に、短めの袴。余所行きにしても自宅でくつろぐにしても父母が顔をしかめること間違いなしといった風体である。

「んー、ちよつとね」

口ごもる玖の頭を祖父母が我先にと撫でていく。彼ら二人にとって、この末の孫娘は可愛くて可愛くて仕方ないらしい。

「あら、玖ちゃんおかえり」

「うす」

「玖ちゃん、成果はどうだったよ」

「んー、ぼちぼちな」

玖は気持ち良さそうに祖父母の手に身をゆだねながら、手に持つ

た野鳥を控えめに掲げた。

白い羽毛に、大きな翼。経友はそれを見て、思わず声を上げる。

「お前、その鷺は自分で仕留めたのか」

「まーね。馳せ弓もあらかた覚えた。半弓だけど」

事も無げに言う玖を見て、経友は絶句した。

馳せ弓とは馬を駆けさせながら弓を射る技術であるが、一朝一夕でできるようなものでは断じてない。熟練の武者であつても手こずる技術を、この娘はあらかた覚えたと平然な顔で言っているのだ。

まさに尋常でない才能であつた。

「ほら。だから言つたる？ 玖ちゃんは、そこいらの不出来な野郎どもとは一味も二味も違うんだよ」

自慢げに口の端を持ち上げる基爺に同意するように、経友も低く呻く。

「あたしのごとはどうでもいいんだけど、さ。それより兄者。さっきの話は本当？」

「何のことだよ」

「だから松寿姉のためにつて奴」

それくらいすぐに理解しろといった風に、玖が半眼で見上げてくる。

経友は思わず後ずさりしながら、ぼそりと小さく答えた。

「松寿の周りが不穩になっている。ただではすまないかもしれない」

「戦か。相手はあの色男？」

玖はそう言つと、両手で目を吊り上げて相合四郎元綱の顔まねをしてみせた。

そのあまりの滑稽さに思わずぷつと嘔き出す。

「そついや、四郎殿はお前のお気に入りだったっけ」

「んー、駄目だね。顔は合格。でも、あれに兄者の向こう見ずさと、兄者を超える弓の腕前がついてきてくれなきゃ」

腕組みをしながら真剣に考え込んだ結果が、その返答であつた。

何故自分がそこまで評価が高いのか、さっぱり分からない。

経友は困ったような顔を浮かべて、わしゃわしゃと頭を掻いた。そもそも、元綱はそう悪し様に言われるほど悪い男ではない。自分よりも年下だと言うのに文武両道を兼ね備えた才人だと思う。いや、天才であると言っても良い。

何をするにも飲み込みが早く、幼い頃などは弓の腕前ですら経友に勝っていたほどだ。

そう答えてやりたかったが、答えられなかった。

素直に口に出してしまつては、武芸だけに精を出してきた自分がひどくちっぽけな人間になってしまう。そんな気がしたのだ。

経友が何と答えてよいものか悩んでいると、玖がそのまま続けてくる。

「でも、何でお家騒動になつてなるのさ。四郎はともかく、松寿姉はそういうの好みじゃないだろうに」

「そうだなあ」

玖の疑問に、基爺が顎に手を当て空を見上げた。

「久しぶりに娘の顔を見るのも悪くはない。多分黒幕はあいつだろうから会いに行つてみるか？」

「誰のことだ？」

「経友がそう返すと、基爺が待つてましたとばかりに笑顔を見せる。決まつている。出雲の主。尼子経久のところさ」

二、

小倉山に帰還してから数日後。

両親の許可を得た経友たちは、駆け足で出雲の国、尼子家の本城へと向かつていた。

瀬戸内の安芸から、日本海に面した出雲へと向かう。聞けば、大変な長旅に思えるかもしれないが、実際のところ、両者は驚くほど近い関係にある。

その理由は、今経友たちが通つている街道にある。

中国山地の合間を縫うようにして縦断しているこの道は、西国における物流の要として機能していた。

山道だと言うのに、行き交う人の姿が途切れることはない。

彼らのほとんどが、鉄の運搬を生業とする馬借ばしやくであり、彼らから徴収している通行税は、国人たちの貴重な収入源になっていた。

経友が興味深そうに、黙々と荷を運ぶ彼らの後姿と塩気の混じった湖を交互に眺めていると、行く先に尼子の本拠地である月山城が見えてきた。

「相変わらず立派な城だなあ」

経友たちの城とは比べ物にならない。雄大にそびえたつ月山全体を強固な要塞に改造しており、何人たりともこれを攻め落とすことなどではしれないと思わせるだけの威容をかもし出していた。

「元々の地勢も良かったが、これほどの城を築くことができたのは、間違いなく経久の手腕だろうな」

基爺も首を何度も縦に振って同意する。

爺の言うとおり、尼子の経済力はこの西国においても群を抜いていた。

元より出雲は良質の鉄資源に恵まれた土地であり、更に隣国から時折産出される天然の銀も彼らの潤沢な資金源の一翼を担っている。

このように出雲はただでさえ恵まれた地勢にあると言えるのだが、尼子は更に宇龍湊や街道の整備を活発に行うことで、内政基盤の拡充を図っていた。

そして、これらの施策は概ね成功していると言って良い。

少勢に過ぎない尼子が、西国の覇者たる大内相手に互角の戦いを続けていられることがその証であろう。

「結局のところ、渡世の沙汰は銭次第よ」

皮肉めいた笑みを浮かべる祖父の言葉に頷きながら、経友は松寿のことを思い浮かべていた。

「それ、松寿も言っていたな。尼子の工夫は素晴らしいとか誉めそやしていた」

「松寿ちゃんが？」

基爺が感嘆するように口笛を吹く。

「珍しい考え方なのか」

「まあな。俺たちのような猪武者は、戦の巧拙でそのものの価値を計りがちだ。その視点をもてる人間てのは中々いないものよ」

経友は、常日頃は何をするにも鈍臭い幼馴染の泣き顔を思い浮かべながら首を傾げた。

どうにも、基爺の言うような凄い人間であるとは思えない。無論、他人から笑われるような人間でもないという前提に立った上での話だ。仮に彼女を嘲るような愚か者がいようものなら、自分が黙ってはいない。

そのようなことを考えていると、基爺が力一杯背中を叩いてきた。「松寿ちゃんは何がたい女だぜ。大事にしてやんなよ」

戯れとは言え、祖父の鍛え上げられた豪腕で背中を叩かれたのだ。経友は酷くむせると、涙目になって抗議した。

「げほつげほつ……変なこと言うなよ。ついたみたいだぞ」

「おお、そうかい。んじゃまあ、久しぶりに娘夫婦の顔でも拝見するかねえ」

基爺はそう言うてにやりと口角を持ち上げると、月山城へと向き直った。

当主屋敷の奥へと通された経友たちは、尼子家一同から盛大な歓待を受けていた。

目の前には贅を尽くした料理と澄んだ酒が並べられており、家中の主だった面々が稲穂のように頭を垂れている。

まるで、異国の王を歓待しているかのような対応であった。

「御加減いかがでございますか。御父上」

月山城の主が深々と平伏する。

老いの見える相貌に、几帳面に整った口ひげが微笑ましそうに揺れていた。

とても数力国に跨る広大な領土の主には見えないほど、謙虚で慎まじやかな姿である。

経友は彼の振る舞いを見て、ごくりと唾を飲み込んだ。

目の前で頭を垂れている小さな老人。

彼こそ、西国にその名をとどろかせる大大名、尼子経久その人である。

主家である京極家から領国の支配権を奪い取った下克上の徒。

謀聖、鬼神……、彼を表す二つ名は星の数ほど存在するが、そのいずれもが他者の心胆を寒からしめるものばかりだ。

実際、彼の名を聞くだけで震え上がる大名も多いと言う。

どれほどの英傑なのかと気構えしていただけに、経友は想像と異なる経久の姿に戸惑いを感じていた。

「又四郎も元氣そうだな。俺より先にくたばったりするなよ」

これだけ盛大に歓迎されて尻込みしている経友とは対照的に、基爺はすっかりと腰を落着かせてしまっている。

音を立てて酒を胃袋に流し込み、料理に舌鼓を打っては、楽しそうに笑う。

我が家に居る時とそう大差のない振る舞いだ。

経友はこれも豪胆さのなせる業かと、少し呆れてしまった。

幼名で呼ばれた経久が恭しく顔を上げる。

基爺のあけすけとした態度に好ましさを覚えているのだろうか。

経久の顔から笑顔が絶えることはなかった。

「しかし、御父上が私の元を訪ねてくださるとは少々意外でした。周防のお方にとっては面白くないでしょうに」

「今更この老いばれが何したところで、御屋形様に影響なんざないだろうよ。それに……」

「それに？」

「俺が来なきや、うちの息子が訪ねて来ただろう？」

その一言に経久の笑顔が凍りつく。彼の変化に気づいているのか、基爺は酒をちびりとやりながら、にこやかに続けた。

「どうした？ お前にしては随分と急いでるじゃないか」

「は、そろそろ鬼の戻ってくる頃合にて」

鬼とは何を指すのだろう。経友には彼らの会話がいまいち理解できなかった。

尼子家中の者たちはどう思っているのだろうか。そう思って見回してみると、同席している重臣たちは静かに眼を閉じて二人の会話を耳を傾けているようであった。

場に緊張感が漂っている。折角の料理も、とても無視して食べられるような空気ではなかった。

「成る程、石見か？」

「左様。博多の動きが少々奇妙でしてな。盛んに唐国へ働きかけております」

「流石のお前も狼は怖いか」

「いやいや、狼などより余程恐ろしゅうございます。あれは虎です。

……とは言え、尻に火がついてはかないませぬなあ」

何処となく含みを持った会話が淡々と続けられていく。

「ふうむ」

基爺が杯の中で波打つ酒を見つめながら、静かに呟いた。

「避けられんか」

「そうですなあ」

張り詰めていた空気がにわかに弛緩していく。経友は安堵するようにはうつと息を吐いた。

その吐息を耳にした基爺が、この話はこれまでとばかりに勢い良く拍子を打つ。

「やや、いかん。折角の宴席だというのに場を白けさせてしまったな」

「いやいや……この者どもは皆、御父上に懂れております。今も一言一句聞き漏らすまいとしているだけにごぞいませしょう」

「がはは、そんな面白いもんでもないだろうに」

豪快に腹を揺する基爺の前に、重臣の一人がすすつと座りながら詰め寄り平伏した。

「尼子家中、駿河守様ご一同に対して謹んで歓待の意を申し上げます。どうか、ごゆるりとお過ごしください」

「野洲も息災で何よりだ。相も変わらず、その腕前は確かか」

「駿河守様の御前で披露できるほどにはあらず。まことお恥ずかしい限りにございます」

野洲と呼ばれた重臣が、相好を崩す。

経友もこの重臣とは面識があった。安芸に何度か足を運んできたことがあるからだ。

彼の名前は尼子久幸。尼子の当主経久の弟であり、西国最強と名高い戦鬪集団である新宮党しんくうとうを率いる英傑である。

その影響力は計り知れず、当主に匹敵する発言力を持っていないが、決して自分の力をひけらかすようなことをしない好漢であった。「そうしたいのも山々だがな。馬鹿息子どもが心配でおちおち寝てもらえん。明後日には発とうと思っておる」

「それは残念にございますな……」

心底無念だとばかりに、野洲が白髪しろがみの混じった眉を八の字にする。感情を包み隠そうとしないことが野洲の魅力だろうと、経友は日頃から考えていた。できることならば、自分もこのような人間になりたいものだ。

自然と表情を綻ばせながら、経友は料理にようやく箸をつけることにした。

「何だ、今から箸をつけるのか。折角の料理が冷めてしまうではないか。飲めや飲め」

「そうじゃ、千若。血が繋がっておらぬとは言え、主のことはわしも孫のように思っておる。そう畏まらずにくつろぐが良い」

口元に飯粒をつけながら箸を向ける基爺に、経久も同意するよう続ける。

「それでは、御言葉に甘えて頂きます」
そう言つて手を合わせると、経友は寛大な尼子の当主に感謝しながら舌鼓を打った。

三、

分厚い入道雲が彼方に見える盛夏の正午。月山城の馬場に、二人の気炎が競うように立ち上がった。

対峙しているのは、経友と野洲である。互いの手には九尺あまりの木槍が握られていた。

経友は野洲に対して、何時でも喉を突けるように刃先を向けている。対する野洲は、腰を落としてこちらの動きを窺っていた。

経友が口惜しそうに唇を噛む。

油断なく構える野洲の何処にも付け入る隙が見つからない。いや、祖父ならば見つけることができるのかもしれないが、少なくとも今の自分には隙を見つけることができなかった。

ならばと、意を決して地面を蹴る。

隙がなければ作り出すしかないではないか。

「ハッ！」

一足飛びに間合いを詰めて、突きを放つ。

堅木のぶつかり合う音が、馬場に響き渡った。

「ぶむ」

経友渾身の一突きを、野洲は掬い上げるように振り払って間合いを取る。

「悪くのつごゑる」

重ねた歳の割りには意外なほど澄んだ瞳でそう投げかけてきた。その声には明らかな余裕が見て取れる。

この男はまだ実力の半分ほども見せていないのだろう。怖れるより先に、敵の手の内を引き出せぬ自身の未熟さに腹が立った。

「学ばせて頂く……！」

そう語気荒々しげに言い放つと、崩れた体勢を立て直して、もう

一度構える。

分かつてはいたつもりであったが、自分と眼前の勇者とでは、その実力に雲泥の差があった。

元々自分は槍という長物が得手ではない。祖父が弓を得意とすることもあつてか、その後姿を追いかけて弓にばかり情熱を注いできたのだ。

だが、先日の重房との戦いもそうであつたように、何時でも望みの得物を手に持って戦えるわけではない。

『何でも試してみた方がいいんじゃないか？』

基爺のそんな一言が、此度の稽古に繋がった。

何度も深呼吸して、それから眼前の先達をじつと見据える。

敵の力を冷静に把握できなければ、学べるものも学べまい。そう考え、経友は狐のように眼光を研ぎ澄ませ、手元だけではなく野洲のあらゆるところに注意を払うことにした。

刃先を前後左右に揺らして、相手の出方を慎重に観察する。

「む？」

いぶかしむように、こちらの変化に身構える野洲。

一通り眺めたところ、野洲が支配している空間はおよそ前方半円状に広がっている。その何処を突いても振り払われてしまうであろうことは、先ほどの立ち回りで明らかであった。

そもそも槍のような長物は、防御に優れた特性を持っている。野洲はそれを熟知した上で、手本のような動きを見せているに過ぎないのだ。まさしく後の先の王道。だが、それゆえに厄介でもあった。

（ならば、真似るか）

ふっと短く息を吐くと、今度は手を変える。経友は野洲と同様に迎撃の姿勢をとることにした。

自身が迅速に対応できる範囲は、およそ狭い扇形になっている。

野洲の半円に比べるといささか心もとないが、それは修練の差である。今悔やむべきことではない。

「成る程」

野洲が納得したように、口の端を持ち上げる。
それからの展開は、言うなれば陣取り合戦と言つべきものであつた。

互いに中心を取り合うように槍をぶつけ合つては、敵の支配空間を左右に揺らす。

これはただの打ち合いよりも数段疲れる作業であつた。

間合いの出入りが起こるたび、両者の槍が交錯する。

絡み付くような手練の早業に何度も挫けそうになりながらも、経友は歯を食いしばって食らいついていった。

「うっ……」

だが、次第に野洲の巧みな槍捌きが、経友の空間を脅かしていく。支配空間の差が如実に現れ始めたのだ。

(修練の差は仕方ない……だがッ)

気を持ち直して、その時を待つ。

気が逸り、全身から滝のように汗が吹き出てきた。

(まだ我慢だッ……)

傾き始めた天秤が一気に野洲側へと落ち込むも、経友はまだ息を呑んで動かない。

(ま、まだ……)

神速一閃。

ついに野洲の一撃が、経友の空間を完全に薙ぎ払つた。

迫り来る電撃のような素早い突き。

体重を乗せたこの突撃に、経友はもう槍で対応できない。

身体を反らして間合いを取ろうとした所で、続く薙ぎ払いで叩き潰されるだけだろう。

だから、経友はその身を敢えて敵の懐へと一歩前へともぐりこませた。

(ここだッ！)

会心の笑みを浮かべる。

起死回生の機会は、もうこの機を置いて他にない。

槍は長物である以上、近間が死角になってしまふ。懐にさえ入り込んでしまえば、野洲の槍は無力化することができるのだ。

野洲の目が大きく見開かれ、驚きをあらわにしている。

その表情が、経友の判断が正しかったことを暗に示しているように思えた。

「せいやッ！」

鋭い呼気とともに、身体を巻き込むようにして力いっぱい蹴り上げる。狙いは野洲の脇腹だ。

重房にやられた戦法そのものであったが、ここまで上手くいくものなのか。経友は内心喝采した。

「御見事」

結論から言えば、経友の期待するような結果が訪れることはなかった。

野洲は短く贅辞の言葉を呟くと、経友に向かって更に踏み込んだ。両者が肉薄する。

驚愕する経友に、至極平静な眼差しを向ける野洲。

そしてそのまま身を翻し、槍の刃先ではなく石突きを経友の頭上に振り落とした。その後で基爺に聞かされた。

というのも、その前後の記憶が定かではないからだ。

届いたと確信したのに、その実全く届いていなかった。経友の意識は悔恨でその内を満たしながら闇に沈んでいった。

「あれは虚をついた見事な攻撃であったと思う。修練の行き届いておらぬ若武者では対応できんだろうな」

野洲の寸評に耳を傾けながら、経友は馬場の隅で二人と握り飯を食べていた。

「耳が痛いだろうなあ、千坊」

基爺が面白そうに経友をからかってくる。

笑いをこらえるように身体を震わせる様が、経友の癪に障った。

「うっせ」

腹立たしげに小石を投げる。

「おっと」

が、容易く避けられてしまふ。傘寿を過ぎて、なおもこの素早さだ。

経友は自信を粉々に打ち砕かれた気がして、長いため息をついた。「駿河守様、そう悪し様に言うものではありませぬ。千若殿は良く修練を積まれている」

「そんなもんかねえ」

基爺が不満そうに口を尖らせる。

経友はそんな祖父を半目で睨み付けながらも、野洲に褒められて内心悪い気はしなかった。

「はい。敵の動きから学んで、即座に我が振りを直すなど中々できるものではない。あれには本当に驚かされた。尼子家中の若武者に、千若殿のような者がいてくれれば……と、心底感じ入ったものです」

「まあ、付け焼刃の槍捌きにしては悪くなかったとは思うがね」

基爺もあさつての方を向きながらも、髭を指で弄びながら同意してくれた。

彼らの評価を聞き、経友も肩の荷が下りたとばかりに安堵する。

自信がなかったわけではないが、わざわざ出雲くんたりまで来て、恥を晒したくはなかったのだ。

「千坊、野洲の動きは学べたか？」

「うん。高度すぎて分からなかったものも多いけど、円の保ち方……って言うのか？ あれは覚えたよ。帰ったら槍の修練もしようと思っ」

その言葉に、野洲が表情を綻ばせる。

「そうませい。千若殿なら、修練次第で槍名人にだってなれるだろっ」

「馬鹿。円も確かに学ばにやらんことだが、そこじゃねえ」

基爺の渋い返答に肩を落とす。

「そうか。お前気を失っていて、仔細を見ていなかったんだな。情けねえなあ」

呆れたようにそう続けると、置いてあった槍を手に取り、ため息混じりに立ち上がった。

そして、先ほどの戦いで野洲が見せた動きを再現してみせる。

「良いか？ 野洲は近間の千坊相手に石突きを叩き付けた。槍の死角が近間だと勘違いしたお前の不覚を見事に突いてな」

不承不承、経友も頷く。

正直、槍にあのようない方があるとは知らなかった。

「槍の死角は手元。確かに不心得者相手ならば、その理屈は通じるだろう。だが、熟達した名人相手にそのような甘えは通じない」

更に槍の持ち方を度々変えてみては、様々な間合いでの立ち回りを演じて見せる。

「……すごいな」

祖父の華麗な動きに、思わず経友は目を見張った。野洲とて同様であったようだ。眼前で繰り広げられる古武士の演舞を目に焼き付けようと、食い入るように見つめている。

その所作は軽やかでありながら、一切の無駄が感じられない。まるでアメノウズメが舞踊に興じているようであり、唐国の英傑たるやとでも言わんばかりの風格を備えていた。

「つまり、どのような得物として熟達すれば死角などあってないようなものだということだ。お前は器用じゃない。だから、弓でそれを目指せ」

「えっ？」

無理難題にしか聞えなかった。とんち話でも聞いているようだ。弓で近接戦闘などできるわけがないではないか。

経友が文句言いたげに問い返す。

「なら、基爺は弓で潜り込まれた時にどうするんだよ」

「そりゃ知らねえよ。俺は不覚の接近なぞ許したことがない」

事も無げに言い放つ祖父の一言に、当てが外れたように気落ちする。

そもそも、祖父の常識に自分を当てはめて何かをしようとするこ
と自体が間違いなのだ。自分なりにできることをやっていくしかな
い。

そんな経友の諦めが透けて見えたのか、基爺は不満げな表情で口
を尖らせ、やがて思い出したように口を開いた。

「あー、だが近間での技も知らないわけじゃないな。良い機会だか
ら教えてやろう」

「おーい、良く見てろよ」

飄々とした表情で、馬上の基爺が二人に声をかけてくる。

構える弓は八尺五寸。かの弓の名手、鎮西八郎為朝の愛用してい
た弓と同じ太さのものである。

あのような強弓で矢を射られれば、並みの具足など容易く貫通し
てしまうに違いない。噂に聞く唐国の鳥銃てっぺうなどよりも威力は上なの
ではないだろうかと感じさせるほどの迫力だ。

「んじゃ、行くか」

短く告げると、基爺は矢を番えて馬を走らせた。

目標は馬場中央に置かれた巻き藁である。

基爺は馬を縦横無尽に跳躍させながら、目標へと向かっていく。

白い体毛が輝いて見える。

その脚には風が渦巻いているようで、その背には羽根が生えてい
るようであった。

「天馬に化けたか……」

野洲があふれ出る感動を素直に口に出した。

いくら名馬を駆っていたとしても、並みの武者が操ったところで、
あのように軽やかな動きはすることは不可能である。

しかも、祖父が今駆っている白馬は吉川のものではない。恐らく名馬ではあるうが、先ほど尼子に一頭借りたのだ。

慣れないはずの馬を手足の如く操る 経友は、今日この瞬間ほど祖父の実力に畏敬の念を抱いたことはなかった。

「よし」

軽やかな声が巻き藁の目と鼻の先まで近づいた。

近間に入ったのだ。

「さあ、どうするッ……?」

固唾を呑んで見守る二人。

基爺は、そのまま馬を駆けさせると すり抜けるようにして回

り込んだ。

「あっ」

神速の早業。

気づいた時には、巻き藁の背に矢が一本深々と突き刺さっていた。

「お、押し捺おしおさり……」

野洲が呻くように呟いた。

押し捺りとは、熟達した騎馬武者が矢合わせの際に見せる基本技

術である。

馳せ弓は一般的に追う方がやりやすい。故に騎射戦闘において、

後ろを取られることは致命的と言える。

押し捺りは、体をひねることで射向けの袖を相手に露出させる。

こうして敵の矢を防御しながら、後方への射撃を行うのだ。

いわば防御のための技であった。

「それをまさか、攻撃の虚を作るために使うとは……」

開いた口が塞がらないとはこのことだった。

往古の名人には使い手がいたのかもしれない。だが、恐らく今生きている武者どもに、これができるとは到底思えない。少なくとも経友は知らなかったし、野洲にしてもそれは同じように見えた。

「どうだ。見惚れたか?」

太陽の香りがする笑顔でこう言われてしまつては、経友も何も言

えない。

ぐうと一声唸ると、経友は俯いてしまった。

「まあ、暇のある時にでも練習してみな。せつかくの必殺技その言なんだ。俺の代で途切れさせちゃ勿体無いだろう」

「ひ、必殺技……？」

「そう！ 必ず相手を殺す技と書いて必殺技だ。俺がこれを使えば、椿の花のように敵の首が落ちてな。だから、この技を椿落とつらくと……」

「え、縁起でもないこと言うなッ」

青ざめた顔で頭を抱える。

つい先日、松寿に椿の花をかたちどつた髪留めを送つたばかりである。こんなことなら別の飾り物を送ればよかった、と経友は心底後悔した。

そのやり取りを傍から眺めていた野洲の頬が緩んでいく。

「……千若殿は幸せ者だな」

「……何故です？」

怪訝そうな眼差しを野洲に向ける。

「騎馬の乱舞に、先ほどの椿落……だったか。これらは全て弓馬の道における到達点だ。駿河守様程のお方直々にご指導を受けながら、その奥義を肌を感じる機会など、公儀の将とて得られるものではないのだぞ」

言われてみると、確かに自分は他の者より恵まれている気がする。祖父だけではなく、野洲のような先達や重房のような好敵手もいるのだ。

そう思いなおした後、経友は落胆したようにため息をついた。

「確かに機会には恵まれているのかもしれませんが。だが、基爺の言うことは一々難解だ。せめて俺に才がもう少しあったら違ったのかも知れませんが……」

経友は自分に才があるとは思っていない。才能に溢れた者というのは、妹の玖や元綱のような人間を指すのだ。

不意に幼馴染のことが思い浮かんだ。

あのおどおどとして自信なさげな仕草に、経友はいつも呆れてものも言えなかったのだが、
(もしかしたら、松寿も同じような気持ちだったのかもしれないな……)
できた親族を持つと言うことは、つまりはそういうことなのだろ
う。

経友は何だか今まで辛く当たってきたのが急に申し訳なく思えてきて、ばつが悪そうに頭を掻いた。

「なに、千若殿には先がある。これからゆっくりと腕を磨いていけば良いのだ」

何度も頷きながら、野洲が励ましてくれる。

「そうはいかない。それでは間に合わない」

焦れるように発したその呟きは、野洲にとつて随分と意外なものであつたらしい。

ほう、と一言声を上げた後に、彼は納得したように目を逸らした。「ああ、そうか……千若殿も感じ取っているのだな。この乱世がこのまま終わるはずがない、と」

彼の見つめる瞳の先には何が映っているんだろうか。

経友がそのようなことを考えていると、基爺が突然思い出したように口を挟んだ。

「そうだ、千坊は又四郎に聞きたいことがあるんじゃないか？」

「あつ、そうだった」

不覚だった。そもそも出雲までついて来た理由の一つは、毛利家への縁談にある。

その意図するところを聞かずして、帰ってしまったては全く意味がない。

「ありがとつ、基爺！ ちょっと、行ってくるつ」

「はいよう」

手を挙げて答える基爺の顔がにやついていた。

正直、何もかも踊らされているような気がして、余り気分の良い

ものではない。

だが、折角の機会であることも事実だ。
経友は駆け足で経久の元へ向かうことにした。

四、

「千若殿か」

尼子経久は当主屋敷の縁側で、池の鯉に餌をやりながら書を読んでいた。

何の書だろうか。没頭しているように見受けられるのだが、そこに感情が窺えない。

そうして、こちらが声をかけようか悩んでいるときの一声がこれだった。

出鼻をくじかれたようなものだ。経友はどうして良いか分からずに面食らってしまう。

「なっ……」

こちらに気づいていたのですか。そんな一言すら、上手く言葉が出てこなかった。

正直、二人きりでの対面は酒宴の席とは訳が違う。この男からは、祖父や野洲のような豪の者とは違った静かな迫力を感じる。その源泉は一体何なのだろうか。

「わしは臆病者だからな。周りの気配に人一倍敏感なのじゃ」

経久がこちらの考えを見透かすように微笑んだ。

だが、目は笑っていない。

酒宴の時には一切気づかなかった。こうして先刻と見比べてみて初めて分かったことだが、この男は野洲と違って感情を表に出そうとしていない。

(これが出雲の尼子経久か……)

このままでは埒があかないと内心焦れる。腹に力を込め、改めて彼と対峙せんと睨み返した。

「はは、まるで戦にでも臨むような面構えじゃな。もっと気を楽に

すると良い」

おかしそうに、経久がくつくつと笑う。

これだけの気を発して必死に向き合っているのに、経久の態度はのらりくらりとしたものであった。

このままでは、はぐらかされてしまう。

危機感を覚えた経友は、こちらの気持ち折れてしまわない内に用件を切り出そうと口を開いた。

「お、お話があります！」

「ほう？」

初老の眼差しにかすかな興味が見え隠れする。

おかしなものだ。先ほどの宴席の方が、彼は余程友好的な態度を取っていたはずだ。

それなのに、今の方が眼前の男の心中に迫っている気がした。

水が静かに流れる音を聞きながら、両者の間に沈黙が訪れる。

「どうした、千若殿。わしに何か用かな？」

「も、毛利との縁談について！ 経久公が意図されるところをお聞かせ願いたく参りましたッ」

「ふむ……」

経久はしばし考え込むようにして顎に手をあて、やがてゆっくりと言葉を紡いだ。

「単純な話よ。味方は多い方が良い。吉川と縁戚関係にあるように、安芸の国人をまとめあげている毛利家と誼を通じたいと考えた。どうじゃ、不自然ではなかるう？」

言っていることは至極尤ものように感じられた。

だが、何かが引っかかる。

そのような単純な足し算ではない何かが、彼の頭の中で計算されているように思えるのだ。

だが、それを引き出す手段がない。

「何も、縁談でなくても……」

「それは吉川の干渉か？」

「い、いえっ」

経久の静かな声色に鬼気迫るものが入り混じる。

重大な失言であった。慌てて、これを否定するように首を横に振る。

経久はその様子を見てにっこりと微笑むと、

「全ては毛利が決めることじゃ。わしが決めることではない」

この言葉により、経友はこれ以上追求することができなくなってしまう。

「う……」

「話は終わりかの？」

「あ、いや……」

ここで終わらせてはならない。尚も食らいつく経友の様子を見て、出雲の主は口の端を歪めた。

とその時、重臣の一人が手紙を片手に慌てた様子で駆け込んできた。

がっしりとした体格にいかめしい面構え。この男の名前は亀井安

綱。尼子家の柱石の一人である。

「御屋形様」

「何じゃ武蔵……後にせい。わしは今、千若殿に稽古をつけてやっているのじゃ」

「いえ、それが……」

言って安綱は小声で耳打ちをし、経久に手紙を渡した。

そのやり取りを見ていた経友は驚愕する。

始めは面白くなさそうに目を走らせていた経久であったが、次第に眼を輝かせ、仕舞いには声を出して笑い始めたのだ。

「くくく……ははは……あっはっはっは！」

耳打ちの内容は聞き取れなかった。

だが、経久の相好はこんな愉快なこととはないとばかりに崩れていた。彼の心をここまで揺さぶる手紙が尋常な内容とは、とても思えない。

「千若殿」

「はっ……！」

慌てて表情を戻して言葉を待つ。続く言葉は経友にとって予期せぬものであった。

「喜べ、千若殿。毛利の姫君が縁談を断つてきよった」

「あっ……」

「しかも、当主となる決意表明まで添えてくるとはな。毛利元就、良い名ではないか」

「毛利、元就……？」

松寿が名を変え、元就となった。この事実は意外なほど経友の心を揺さぶった。

断るところどころまでは、直接意思を聞いていたので理解ができる。

だが、改名となると話は別である。

改名は男の風習だ。たとえ建前上でも、忌み名をつけるということは男になると言うことと同義であると言える。

その意味するところは決意。

武家のしきたり上、男性しか相続できないとされる家督を継ぐという決意の現れに他ならない。

あの気の弱い松寿が、何故そこまで大きな決心をしなければならなかったのか。

経友にはその答えが見出せそうに無かった。

「大内にも尼子にも媚びへつらつておらぬ……実に愉快な名じゃ。

しかも友好的に接する用意があると……成る程、兄の死をそう用いるか」

反芻するように『元就』の二字を何度も繰り返すと、経久はこちらを向いて表情を変えた。

「主の差し金か？」

周囲の空気がざわめくほど、強い語調でそう投げかけてきた。

卒倒しかけない覇気に眩暈を起こしそうになる。だが、経友は耐

えた。唇を真一文字にぎゅっと結んで、必死に押し黙り続ける。

吉川が他家の外交に表立って干渉したとあれば、これはただ事ではない。吉川と尼子の関係は即座に崩れ、戦に発展するだろう。

だから、ここは死んでも是と口に出してはならない。

無言の圧力に晒されながら、幾ばくかの時が流れる。

不意に覇気が弱まった。

怪訝に思いながら、経久を見上げる。

「千若殿は松寿姫を好いておるのか？」

とても優しげな声色だった。それは今までにないほど感情に溢れた声色で、この男の心に最も深く迫ったような感覚さえ覚えた。

「あ、いえっ。それは……そのっ……」

「まあ、良い。惚れた腫れたも世の習いじゃ。若いと言うのは良いものじゃのう」

目をつぶり、ゆっくりと頷くその様は年齢相応の朗らかさをかもし出している。

大名ではなく、ただの老人。これがこの男の素面なのだろうか。

戦国の大大名尼子経久に、このような一面があるとは余人の誰にも想像できない。

しかし、経久はこう続けた。

「だが、困る」

「えっ……?」

「元就は困る、と言っておる」

再び経久の表情に、尼子家の当主としての威厳が現れる。

「あの者が当主に就けば、毛利は必ず伸びる。これは尼子にとって歓迎すべきことではない。だからこそ、手元において腐らせておこうと思っていたのだがのう」

だんまりを通していた経友も、流石にこれには黙っていられなかった。

「お、怖れながら申し上げます……! あ、あいつはとても弱い奴なんですッ。猿掛にいた時だって、心無い家臣から城を追い出され、

あなぐら住まいの時だつてありました。そんな弱虫が経久公に弓引くなどとてもありえませんッ！」

決死の抗弁に、経久はゆっくりとかぶりを振る。

「弱さで兵家を論じることとはできぬ。至弱とて、至強を食らうことがあるのだ」

「で、ですが……！」

「くだいッ！ 吉川が我らの戦に口出しするかッ！」

老人の両眼が、カツと目を見開かれる。

そのあまりの剣幕に、まるで身体が消し飛ばされるような気がした。

だが、ここで負けてはいられない。

「……吉川ではありません」

「何い？」

「た、ただの千若経友として……つ、経久公に……じ、直訴申し上げておりますッ！」

庭の砂利に額をこすりつけ、経友は必死に直訴を試みた。

ここで折れてしまつては、尼子家はあらゆる手段を用いて毛利家への介入を試みるだろう。

松寿が首を縦に振らない以上、それは暴力的なものにすら変わらう。これすなわち、松寿への害意だ。

（井上なんたらが松寿を城から追い出した時、あいつどんな顔してたっけな……）

柀の香りが、つんと鼻をついた。

「ほう、つまり貴様は吉川の一族としてではなく、何処の馬とも知れぬただの若造として、この尼子経久に講釈を垂れていると、そういうことか？」

「……左様にございます」

言つてしまった。もう首を切られても文句は言えない。経友は静かに裁決を待った。

「ふむ」

経久が考え込むように、静かに唸った。

「ここまで無理を通した男は久しぶりじゃ。面白い。その意見認めてやる。毛利への介入を改める気はない。だが、それと同時に貴様一人がそこかしこで動く分には何も言わぬ」

経友は、その言葉にはつとになっておもてを上げた。

「好きに動くが良い。ただし、吉川の力を借るようなことがあれば……即刻腹を切れ」

この言葉ほど待ち望んでいたものはない。

経友は砂まみれの額を拭おうともせず、満面の笑みを浮かべた。

「しょ、承知ッ！」

その時、経友は幼い頃に松寿へ言ったことを思い出した。

『お前をいじめる奴は、全員ぶつとばしてやるよ』

ぶつとばすまではできそうになかったが、これで約束を破らなくて済むと心底安堵したのだった。

経友がその場を立ち去った後、安綱は不愉快そうに表情をどす黒く歪めていた。

「殺しますか？」

その言葉に、経久は薄ら笑いを浮かべる。

「阿呆、わしの顔に泥を塗る気か。そのようなことをすれば、わしが貴様の首をはね飛ばす」

「はっ……しかし、このままでは尼子家に弓引く可能性も……」

なおも食い下がる安綱に対し、経久は不思議そうに首をかしげた。
「何故、そう思う？」

「と、言いますと……？」

「わしは得にならぬことはせぬ。わしが、何時何処で損をしていると言っただ？」

言っつて、経久は池の鯉を楽しげに眺めていた。

「別にどう転んだって良いと言っつておる」

毛利の内紛（一）

一、

「父様、母様失礼いたします」

松寿は仏壇の位牌に手を合わせると、それをそのまま手持ちの巾着袋にしまいこんだ。

巾着の生地描かれてある文様は七宝しっぽうと言う。円と円が重なる様子が円満を意味しており、縁起が良いとされていた。

位牌同士がこつんと音を立て、松寿の頬が思わず緩む。

「こらこら、喧嘩などされては駄目ですよ？」
くすりとしながら、亡き父をたしなめる。

生前、松寿の両親はお世辞にも仲が良いとはいえなかった。

心労がたたって無理に酒を食らった父は、酔いに任せて何度も母や松寿に手をあげたのだ。今でも松寿のまぶたには当時の光景が鮮明に焼きついている。

「ご夫婦なので、円満に、ね？」

夫婦、その言葉が心の内で跳ね回った。驚いて、思わず胸に手を当てる。

「夫婦かあ」

椿の髪留めをそつと撫でる。先日、経友から贈られたものだ。手に渡された時、涙が出るほど嬉しかった。

次々に肉親を失っていく悲しみに心が引き裂かれそうになっていた時分に、この贈り物だ。これで心揺らがぬ乙女などいるわけがない。

「まさに機を見るに敏、だよ。狙ってやってるのかなあ……」
憤まじやかな飾り自体も自分に似合っていると思う。何度も姿見で確認したのだから間違いない。

椿は、愛らしいけれども何処か憤み深くて控えめな花を冬に咲かせる。その様がまるで春をひたむきに待っているように見えて……

だから松寿もこの花が好きだった。

「それにあまり派手過ぎても私に似合うわけないしね」
くすりと笑い、そしてかあつと頬を赤らめる。

「夫婦、かあ……」

と、もう一度繰り返す。

彼は、この素敵な贈り物を一体どのような気持ちで贈ってくれたのだろうか。彼はいつも狙い澄ましたように傷ついた自分を救ってくれる。あの不機嫌そうなきかめっ面で、彼は一体何を思っ手て手を差し伸べてくれるのか。

早合点などとてもできない。できるわけがない。でも……でも、少しくらいは望みを持つても良いんじゃないだろうか。

松寿を遠くを見るような眼差しで、小さくため息をついた。

「我妹子わがこを早見浜風大和なる我を松椿吹かざるなゆめ」

万葉の歌が自然と口について出てくる。妻の元へと早く戻りたい気持ちを切に表した素晴らしい歌だと思う。

「我を待つ椿……妻は松で椿……」

自分は松寿で、贈られた花は椿だ。早合点などできるわけがない。でも……でも、勘違いしたって良いんじゃないだろうか。

「姉上、こちらでしたか」

腹違いの弟から声をかけられたのは、そんな時だった。

「え、四郎君ッ？ わっ、わっ」

心の赴くままに空想の世界に浸っていたのだから、うるたえ方もひとしおだ。

着物に足を取られて盛大に転ぶ自分を見て、元綱が呆れた顔で口を開けた。

「郡山に居られないので、一体何処に行ったのかと探しましたよ」

「あ、ごめんなさい。父様と母様を兄様の元へとお引越させようと思って、ね？」

棘のある物言いに気落ちしてしまう。確かに今はお家の一大事だ。家督の行く末も満足にまとまりきってない内から、個人の感傷で動

いてしまったことは失敗であつたかもしれない。

「まあ、少しくらいなら良いでしょう。姉上はお優しいのだから仕方ない」

元綱が苦笑いを浮かべ、そのまま続けた。

「やはり喪主を姉上が行つたのは正解であつたと思います。家臣の中には口賢しい者もおりますが、私は姉上で良かったと思いますよ」

「そ、そうかな」

兄の葬儀は、松寿が主導で執り行つた。家中の意見がまとまらな
い内に強行したため、これを強引だと批判する者も少なくない。

「元々葬儀の主催者は、同胞の年長者が執り行つが武家の習い。その程度も受け入れられぬ輩など、好きに言わせて置けばよいのです」

滔々と流れるように紡がれる元綱の声が、ふと途中で止まる。
こちらを見つめる彼の切れ長の瞳の奥には、深い疑念が渦巻いて
いるように見えた。

「ですが、縁談の儀。こちらは何故断られたのです？ 我らが毛利
は未だ磐石とは言えず。尼子との後ろ盾は、必ず我らに繁栄をもた
らしましょう」

「……それは違つよ、四郎君。経久様はそんなに甘くない」

「ふむ。婚姻同盟、それ以外に何の意図があると言つのでしうか」
「それは……」

問いかけに応えようとして、松寿は言葉に詰まつた。

この縁談は断じて同盟の誘いなどではない。いや、短期的に見れば確かにそうなのかもしれない。伯耆国か石見の国か。どちらを攻めるにしたところで、後顧の憂いを断つ効果はあるだろう。

だがそれ以上に、これは安芸を相手取つた戦の一手とも言つべき
ものであつた。

あの出雲の覇者が欲しているのは、いわば『正室の血統』だ。毛利と尼子の間に来た『正統』な赤子は、毛利家を継ぐ資格を有する。それを楔として、妾の腹から生まれた四郎を追い落として毛利を吸収する。

そう、これは遠まわしな侵略なのだ。

(でも、四郎君に妾の子だからなんて……言えるわけないじゃない) 松寿は躊躇いがちに四郎の目を見返した後、必死にかぶりを振った。

「と、とにかく駄目ッ」

「……困りましたな。婚姻はできない。更に家督の件でも譲るつもりはない……我侂が過ぎますぞ」

「だって、四郎君は……ううん、四郎君じゃなくてもだよ。婚姻の是非を握るのは当主でしょう。それが毛利のためだと思っているなら、私の意見なんて……」

その言葉を、元綱は否定しなかった。

当たり前だ。自分よりも正統な血筋の者が家中にあれば、当人同士がどう考えようと一つにまとまることなど有り得ない。ならば、外へ追い出してしまった方が良く考えるのは、至極当然であると言える。

「……仕方ありませんな」

元綱は諦めるように嘆息すると、凍えるような冷たい眼差しをこちらに向けてきた。

「あつ……」

松寿は自身の迂闊さを呪う。大事な時だからと、側近たちを郡山に置いてきたのが裏目に出てしまった。

何とか逃げようとするも、実力のある若武者相手にそれは叶わない。

着物を掴まれ、畳に勢いよく叩きつけられてしまう。全身を痺れるような痛みが襲った。

「ううっ……」

「不忠、どうかご容赦を」

感情のこもっていない声が頭上から降ってくる。

これから何をされるとも分からない恐怖に、松寿は必死に目をつぶった。

(嫌……怖い……助けて、助けて、千ちゃんツ)

元綱の無慈悲な両手が松寿の首を締め付けてくる。遠のく意識の中、松寿は声にならない声で何度も幼馴染の名前を叫んだ。

二、

「兄者おかえり」

少女らしからぬ抑揚のない声が淡々と紡がれる。

出雲の月山城を発ってから数日あまり。安芸に帰ってきた経友たちを出迎えてくれたのは、玖の仏頂面だけであった。

「ん、ただいま……？」

経友は小倉山城を取り囲む異様な空気に呆然としていた。

一族の者が帰ってくるという知らせは家人にも届いているはずだ。だというのに、矢倉門は堅く閉ざされたままであり、内部からピンと張り詰めた空気が滲み出している。普段はやかましいほどに合唱している鳥たちのさえずりすらも聞えない。

「これは……」

静か過ぎる。まるで殻に籠って、外からの働きかけを拒絶しているかのようだ。

一体、彼らは何を拒絶しているのか。

尼子経久に直談判を行った経友を？ いや、違う。早馬を駆けさせても、出雲からの連絡がつくには早すぎる。第一、もし経友の一件が原因だとしても、当主である父が経友に勘当を言い渡すだけで済むはずだ。嫡男でもない息子を追放する程度で、こんな大事になるはずもない。

ならば、一体何を？ 他に考えられる可能性なぞ

その時、経友の脳裏に何かが閃いた。嫌な予感にどっと汗が吹き出てくる。

そうか、これは戦を直前に控えた時の空気だ。

「……戦が始まるのか？」

経友の言葉に、玖は矢倉門にもたれかかると、つまらなそうに桜

色の唇を噛んだ。

「昨日、毛利のところの使いがやってきた」

「使い、だって……？」

「そう。内容は援軍の要請。吉川はそれを断った」

「何故だ。吉川と毛利は同じ大内派の国人だ。疎遠ならばまだしも、安芸を揺るがす一大事に断るいわれはないだろう」

苛立たしげな表情で食ってかかる。

吉川の判断はどう考えても道理に合わない。

安芸の秩序は国人同士の信頼関係によって成り立っている。外敵に立ち向かう際に一致団結することができていたからこそ、これまで安芸の独立性が一定程度保たれてきたのだ。その信頼関係を裏切るなど、とても正気の沙汰とは思えなかった。

「安芸の一大事ならば、な」

基爺が二人の会話に割って入る。その意味深な発言に、経友は眉をびくりと持ち上げた。

「どうということだ、基爺」

「まだ気づかないのか。毛利の戦は吉川に関係のないところで行われる。つまり敵は同じ毛利ということだ」

馬を下りた基爺は、身体を乱雑に叩いて土ぼこりを落としていた。そのまま、玖の方へ向き直って問いかける。

「今どういう状況だ？」

「陣触れが出て、松寿姉の側近と四郎の軍が横田のあたりで睨み合っている。でも、戦にはならないと吉川は判断した。そう時を経ずに和解すると思う」

「ふむ、その心は？」

「今回の件は、激怒した福原広俊の一存が発端になっている。でも、松寿姉がいない以上、姉の派閥は動けない」

福原広俊は松寿の祖父に当たる。志道と同様に、毛利家の家督騒動の中で松寿派を取りまとめる筆頭家老であった。そのような人物が激怒するとはただ事ではない。

「どういうことだ、玫。あの温厚な式部殿が激怒するなど……いや、それよりも」

松寿の不在。

その意味するところを図りかねて、更に続けた。

「松寿がいない、だって？」

玫がびくりと固まる。逡巡するように経友を見上げると、慌ててすぐに目をそむけた。何と言って良いものか決めかねているようだ。焦れる経友が齒噛みする。妹の表情だけでも、今起こっている問題がただ事でないことが分かった。経友は待ちきれなくなり、

「玫」

と問い詰めようとしたところ、玫は観念したようにその声をさえぎった。

「先日から行方が知れないって聞いた。四郎たちから隠れているのかもしれないし、逆に押し込まれたのかもしれない。……もしかしたら、もう殺されているのかもしれない」

「殺され……？」

一瞬にして経友の頭の中が真っ白になる。

あつてはならない言葉を聞かされた。無意識にその言葉を否定し、頭の外側へ追い出そうとするも、出て行こうとしてくれない。やがて、松寿の死が明確な光景となって浮かんできて

「ッ！」

いても立つてもいられなくなり、豊国の背中に飛び乗った。

「待て、何処へ行く千坊」

「松寿のところに決まってるんだろッ！」

当たり前のことを聞いてくる基爺に、金切り声を上げて噛み付く。すぐにでも松寿の元へ飛んでいきたい。到着が遅れば遅れるほどに、彼女の死が現実になつていく気がした。

「落ち着け、千坊。戦場で我を忘れる奴は、すぐ死ぬぞ」

「これが落ち着いていられるかよッ！」

「松寿ちゃんなら生きておるはずだ。玫ちゃん、そうだな？」

「絶対とは言い切れないけど、可能性は高いと思う。少なくとも、吉川の見解では松寿姉はまだ生きている」

玖がこくりと頷く。

真剣な面持ちだ。いたずらに騒がず、冷静さを失っていない。だが、それが経友にとっては余計に憎らしかった。

「何でそう言い切れるッ！」

「良く聞け、千坊。毛利はそんなに大きな家じゃない。いくら真つ二つに割れたからと言って、そう簡単に戦なんぞ起こせる余力は持ち合わせておらんだ」

玖をかばうように基爺が続ける。その動きに、自分が思っているよりも手ひどく玖に当たっていることに気がついた。

だが、自分だって好き好んで玖に当たりたいわけではない。行き場の無い感情がとめどなくあふれ出してくるのだ。仕方がないではないか。

経友は悔しそうに奥歯を噛み締めると、手近にあった柵を力いっぱい殴りつけた。

震える握り拳から血が流れ出していく。

「あ、兄者」

「耐える。続けてくれ」

「……福原広俊が即座に動いたのは、恐らく松寿姉の命を救うため。四郎側をけん制しているんだと考えて良いと思う」

「そもそもだ、この状況で松寿ちゃんを死を伏せる理由がないだろうが。戦も交えずに睨み合っている以上、人質にでもされているとでも考えた方が妥当だ」

二人の見解は実には的確なものである。それが激情に身を任せている経友にも理解ができた。

感情を抑えるように深く息を吸い、そして吐く。何度も、何度も繰り返した。

自身の顔を両手で覆い隠す。

情けない、と本当に思う。悔恨に身を震わせながら、経友は何と

か喉から声を絞り出した。

「何でそんな冷静でいられんだよ……」

二人の眼差しは、いつも自分に向けられているものと何ら変わらない。深い親愛と細やかな気遣いを強く感じる。

だが、今はそんな目で自分を見て欲しくなかった。

「俺たちよりも、お前の方が松寿ちゃんに近い。それだけのことだろっよ」

「人間、持ちつもたれつ、だよ。兄者は今思っていることを為せば良い」

彼らの言葉に、ふっと心が軽くなるような感覚を覚えた。

ぐちゃぐちゃになった獣道が白く塗りつぶされ、一筆書きの道がすっと一筋引かれていく。

「兄者。父がこの場に姿を見せないのは何故だか分かる？」

「親父が……？」

屋敷の奥で座っているであろう父の姿を思い浮かべる。

責任感の強い男だ。今回の一件についても深く物を考えているに違いあるまい。兄たちとて、それは同じことであろう。

「この戦は十中八九、尼子が一枚噛んでいる。吉川は尼子との距離を縮めたいと考えている。つまりは……」

「ここで行くなら、それ相応の覚悟をして出て行け、ということか」
尼子経久へ放った啖呵が思い起こされる。

吉川を捨てても守りたい存在であるかどうか。そのようなことは考えるまでも無く明らかであった。

「分かった。んじゃ、行ってくる」

玖の頬が眩しそうに緩む。

「……ためらう素振りもありゃしない。兄者らしいよ」

玖の口から白い八重歯が見え隠れした。基爺もつられて笑い声をあげる。

やがて、三人の笑顔がこの場を満たす。

「千坊、まずは式部のところへ急げ。この状況を理解しろ。お前の

戦はそこからだ」

「……私の穂馬ほしうまも連れて行ったほうが良い。打ち合いになれば、豊国だけでは足が鈍る。あの子は良い子だから松寿姉を乗せても速く駆けられると思う」

二人の助言と親切をしかと頭に刻みつける。その価値は千人の与力にだって、少しも劣ることはない。

経友は決意を固めると、二人に深く頭を下げた。

「分かった、借りていく。ありがとう」

「千坊」

「兄者」

基爺と玖の声が重なった。一瞬お見合いした後、二人は悪戯っぽい笑みを浮かべて思い思いの言葉を発してくる。

「今度は途中で喧嘩なんてするんじゃねえぞ」

「ほら、行った行つた。松寿姉が待つてるよ」

「うん」

彼らのおかげでやるべきことは定まった。

後は決意を形にするだけだ。

「ちよつくら松寿を助けてくる」

夏の山風が、火照つた身体を優しく撫でる。

放たれた強い意思が向かう先は、ここより南東。安芸の横田。

泣き虫の彼女のことだから、今も声を上げて泣いているかもしれない。即刻出向いてあやしてやらねばいけないだろう。

前回と違って玩具はないが、何……手土産など要らんと論語の先生も言っているらしい。

「待つてる、松寿。すぐ向かうッ」

豊国と穂馬。二頭の名馬を引き連れて、経友は横田へ向かい一気呵成にと駆け出した。

「千坊ーッ！ 助けられなきゃその場で野たれ死んでしまえーッ！」

「しまえー」

背中を後押しする二つの声が心地良い。

疾風になった自分を感じながら、経友は拳を力いっぱい握り締めるのであった。

「行ったか」

経友の後姿が完全に視界から消えると、基爺は俯く玖へと視線を送った。

震えている。

兄を送り出すまでひた隠しにしていた感情が、今は小さな身体いっぱいにあふれ出していた。

「よく耐えたな。玖ちゃん」

玖の背中を優しくさすってやる。

「玖ちゃんはとても強い子だな。流石は俺の孫だ」

無骨な手のひらで、何度もがしがしとさすってやる。

「……痛いよ」

恨めしげな目つきで、そう返された。

もう大丈夫なようだ。可愛い孫娘を覆う憎らしい震えは既に消えうせていた。

顔つきも平静を取り戻している。

年頃の娘にしては些か感情の起伏が乏しい面持ちに、

「勿体ねえ。女の子らしい玖ちゃんも、可愛らしくて俺は大好きなんだが」

心底残念だと言う風に、肩を落とす。

「何言ってるの？」

半目で呆れたようにこちらを見上げてくる。そのような表情も愛らしい。息子に似なくて本当に良かったと安堵する。

「気持ちの整理はついたのか？」

「うん、まあね。それより、基爺。私も行くよ」

と、玖は兄が向かった先へと視線を走らせた。

「それは困るな。千坊はただの馬鹿だが、玖ちゃんは吉川の大事な娘だろうに」

「問題ない」

決意のこもったその話しぶりに、基爺はにやりと口の端を持ち上げた。

小さな身体に流れる血潮が、確実に自分から伝わったものだと確信したからだ。

「女は家に縛られない」

桜色の唇がきゅつと凜々しく結ばれる。

その曇りない眼には、何人たりとも挫くことのできない金剛の意思が宿っているように思えた。

> i 1 7 0 2 3 — 2 2 8 3 <

毛利の内紛（二）

三、

「貴様！ よくもまあ、おめおめと顔を出せたものだなッ！」

張り詰めた空気の中、元服間もない若武者の怒声が経友の耳朵を叩く。

眼前の青年は荒々しく息をつきながら、憎々しげにこちらを睨みつけていた。具足で固めた細身の身体は怒りにうち震え、今にも殴りかからんとする勢いだ。

「すまん、話を聞いてくれ」

経友は深く頭を下げ、その怒りを辛抱強く受け止めた。

彼の怒りも尤もなことだ。経友の実家である吉川は、既に彼らの援軍要請を断っている。だと云うのに、こうしてわざわざ陣中見舞いに来るなど、相手の神経を逆撫でしているとしか思えない。

陣を覆う白い垂れ幕の隙間から、他の武將たちもこちらの様子を窺っている。やはりと言うべきか、その眼差しも険しいものばかりであった。

明確な敵意を、この身にひしひしと感じる。

普段ならば、これは戦場で敵から受けるものだ。それを本来味方であるはずの相手から受けるというのは格別に堪えた。

強く下唇を噛む。一目散にこの場から逃げ出してしまいたい衝動に駆られた。

だが、それは許されない。たとえ裏切り者の謗りを受けようとも、経友は現状の把握をしなければならぬのだ。

『この状況を理解しろ。お前の戦はそこからだ』

基爺の言葉が思い起こされる。

松寿を取り巻く状況は、今どうなっているのか。どのように動けば、現在の状況を改善させることができるのか。経友だけで知恵を振り絞ったところで、解決策が思い浮かぶとは到底思えない。

ここは何としても、渦中の真つ只中にいる人間の協力を得なければならぬ。だから、必死に耐えた。

「それで今更何の用だ！ 偵察か？ 切り込みか……？ そうか、太刀を抜くなら受けて立つぞ……ッ！」

直に見ずとも、彼の潔癖そうな細面が赤黒く染まっっていく様子が目に浮かぶ。

かちやり、と鯉口こいぐちを切る音が聞えた。彼の親指が太刀の鏝にかかったのだ。こちらがおかしな動きを見せればたちまち切り伏せられてしまうだろう。

だから、経友は頭を上げずにそのまま返答した。

「……式部殿か、志道の爺に取り次いでもらいたい。この通りだ」

「なん……だとお？」

「頼む……」

ここでようやく顔を上げ、青年の両眼をまっすぐ見返す。

彼は何とも微妙な表情をしていた。振り上げた拳の着地点が分からない。そう言った戸惑いが容易に見て取れた。

しかし、それも一瞬のことである。はっと我に返った青年は太刀を抜き放ち、憤然とした表情で経友の喉元に切っ先を突きつけた。

ちくりとした痛みが喉元に走る。じわりと血が浮き出てくるのを確かに感じた。

「帰れッ！ 貴様のような輩にお爺様方がお会いになるはずもなからう」

「……頼む。後生だ」

「貴様あ、僕が帰れと言っているのだッ！」

青年の激昂に、陣中のざわめきが大きくなる。流石に刃傷沙汰にまで発展するとは考えていなかったようだ。動揺のさざなみに混じって誰かを呼びに行く声が小さく聞えた。

青年の太刀を握る手が震えている。

激情に身を任せて抜刀したものの、最後の一线を踏み越えて良いものかどうか戸惑っているのだろう。

(もしかしたら、まだ人を斬ったことがないのかも知れない)

ならば、これは分の悪い賭けではない。そう思って経友は深く息を吐き、采配をゆだねるように目を閉じた。

彼らの動揺が段々と混迷の様相を深めていく。青年の顎から、汗がぽたりと零れ落ちた。

「おいおい、何だこの騒ぎは。けほつ……元保^{もとやす}、お前の仕業か？」

場の空気を見事に収めてしまったのは、思慮深い壮年の掛け声であつた。

咳の混じつたその声に、場の空気が安堵したように溶けていく。

元保と呼ばれた細面の青年は、射抜かれたようにその声に反応し、慌てて太刀を鞘に収めた。

経友も声につられて目を開ける。

元保は何ともばつが悪そうにしていた。隠れるところを探すかのように、辺りをきよるきよるとし始める。

「あ、父上。いえ、これは……」

すると、垂れ幕を押しつけて、幸薄そうな壮年の男がこちらを覗いてきた。

三十路を越えて半ばごろ。痩せ身に色白で、この何処となく疲れた表情には覚えがあつた。

「ち、父上っ！ それより、安静にして下さらないとッ」

父と呼ばれた壮年の男が、苦しうに咳をする。

元保が血相を変えて駆け寄ろうとするが、男は気にするなとばかりに手で制した。

咳をしている間も、彼の思慮深そうな瞳は少しも揺らくことが無く、狼狽する息子を静かに見つめ続けている。

「何があつたのかと聞いているんだが？」

「うっ……」

元保が言葉に詰まる。

その様子に、壮年の男は困つたような表情で髭を弄りながら、視線をこちらに向けてきた。

「あれ、千若殿じゃないか」

「上野殿か。大事無いようで何よりだ」

彼は志道広良。志道の爺の嫡男に当たる男である。現在は宿老である父の名を継ぎ、毛利家の庶事を司っているらしい。

忌み名が志道の爺と同じあるため、非常に紛らわしく、経友は幼い頃から彼のことを上野と呼ぶことにしていた。

「吉川は此度の戦に関わらないはずだろう……？ 一体どうした？」

「俺は吉川の使いじゃない。吉川の家名は……もう捨ててきたんだ」「か、家名を……ッ？」

経友の受け答えに、元保が色めき立つ。

対する上野は冷静そのものだ。呆れたようにため息をつく、苦笑いをしながら経友の肩をぼんと叩いてきた。

「ああ、成る程……。まあ、千若殿らしいと言えば、らしい話だなあ」

「松寿は無事なのか？ 助け出せそうなのか？」

「落ち着け。まあ、奥に入れ。福原様やうちの親父に聞くべきことだろう、それは」

それもそうだと、上野の答えに同意する。

そして、彼の招きに応じて陣中へと歩み入ろうと一歩踏み出したその時、上擦った元保の声が経友を呼び止めた。

「お、お前ッ」

「……？」

「家を捨てたと言う話は、本当なのか？」

信じられないと言う目をしていた。

その疑問は経友にも分からなくはない。下級武士ならいざ知らず、吉川のような由緒ある一族の者が家を捨てるなど前代未聞のことなのだ。

（そうか……自分は大変なことをしてしまったんだな）

彼の様子を見て、経友は改めて自分の決断がいかに重大なものであったかに気づかされた。

「……本当だ」

「そ、そうか」

目を伏せてそう答えると、元保は何故か決まり悪そうに俯いていた。

声をかけてやりたい気持ちもあつたが、今はとにかく時間が惜しい。こうしている間にも刻一刻と松寿に危機が迫っているかもしれないのだ。

「話はもう終わりにして良いか？ 時間が惜しいんだ」

と続けると、元保の答えを待たずに歩き出す。

「あ、ああ……」

何処か呆然としたような声を背中で感じながら、経友は上野に続いて陣中へと入っていった。

陣中では松寿派の主だった面々が肩を並べて座っていた。その誰もが経友の訪問に目を丸くしている。

「千若丸……お主、何故……？」

「爺、松寿は無事なのか？ 俺に手伝えることはないのか？ 頼む、何でも良いから教えてくれっ……頼む……ッ！」

志道翁の驚きの声を遮るように、経友が問いかける。

藁にもすがる思いとはこのことだろう。自分の声が何とも情けないものになっていることを経友は自覚しながらも、形振り構わずに懇願し続けた。

「そういうことか……全く、無茶をしておっからに」

翁は上野と全く同様の反応を示すと、困り果てたように視線を会議を取り仕切っている人物へと滑らせる。

「千坊」

昔を懐かしむような声が上がった。

恰幅の良い体格に、日に焼けた福顔。その上に優しそうな白髪混

じりの眉が乗っている。会議の中心人物である福原広俊は、頼杖をつきながら、孫でも見るかのような面持ちで目を細めていた。

「大きくなったな。一年は会ってなかったか」

「式部殿……松寿は……？」

「松寿様は無事じゃよ。それだけは確約させている」

「そうか」

それを聞いて安心する。最悪の可能性が遠ざかっただけでも、大きな前進と言えた。だが、これで相合元綱たちが松寿の身柄を確保していることも確実になったわけだ。

ここで気を緩めてはならない。経友は眉の険を深めながら質問を続けた。

「四郎たちの主張は？」

式部は、その言葉に沈痛な表情を浮かべる。そして一拍置いた後、忌々しそくに吐き捨てた。

「尼子との縁談を断り、いたずらに両家の関係を悪化させるなど言語道断。かくなる上は毛利家のためにも、松寿様が尼子家に嫁入りするまで、その身柄をお預りする。相合衆の主張は概ねそのようなものだ」

「元綱殿を押しているのは、坂や渡辺といった家老衆よ。まったく情けない……出雲の亀井なんぞに踊らされよつてからに……。式部殿申し訳ない。我が本家の招いた種じゃ、何度謝つても謝り足りん」
「言つな、広良。いくら坂の一族と言えども、そなたは親戚筋に過ぎぬ。第一、坂家は毛利の柱石じゃ。それこそ誰のせいでもない……」

老将たちの顔色が更に暗く沈んでいく。

身内はかけがえのない物だ。いくらまとまりのない空気であったとしても、まさか実力に訴えかけるような騒動に発展するとは思わなかったのだらう。

「思えば、松寿様が側の者を満足につけようとせず猿掛へと向かおうとしたあの時……わしが是が非にでも止めて置けばよかったの

だ

途方にくれて頭を抱える式部の表情は、声をかけるのもはばかれるほどに後悔一色で塗りつぶされていた。

老将一人のため息が、辺り一面に伝染していく。

重苦しい雰囲気にしたたまれない気持ちになる。何とかこの空気を払拭しようと経友は、

「事態が進展する見込みは……」

と口を開き、慌てて言葉をつぐんだ。

そもそも、自分がこうして駆けつけるまでも、彼らは何とか状況を打開しようと様々な手段を講じてきたはずなのだ。

そのような海千山千の老将たちの陰鬱な表情を見れば、解決の目処が未だ立っていないことは一目瞭然であった。

(ならば……)

事態を整理し、付け入る隙がないかどうかを探り出さなければならぬまい。

そう考え、経友は足りない頭を精一杯に働かせ始めた。

まず、相合勢の今後の動きについて考えを巡らせて見る。

相合勢は尼子の迎えがくるまで粘り続ける腹積もりだろう。尼子に松寿を引き渡してしまえば、家督は元綱のものになる。いわば、これは「守れば勝てる戦」と言える。

対する式部たちは、松寿を人質に取られているために無闇に敵を刺激することができない。このまま座して待つていても、松寿は尼子に奪われることになり、家督を継いだ元綱による大規模な粛清が待っているだけであろう。まさに打つ手なしといったところか。

(表立って動けない以上、隠密裏に動いてはどうか？ けど……)もし失敗すれば、相合勢に式部たちが強硬策に走ったと認識されるだろう。結局松寿を危険に晒す羽目になる。

それでは本末転倒だ。

頭が痛くなってくる。式部たちが頭を抱えるのも分かるほどに、手詰まりの状態だ。

このような状況下で、相合勢を刺激せずに済むような都合の良い駒など

「あっ」

ある。一つだけあった。

経友の突然の声に、老将たちが目を白黒とさせる。

「どうした、千坊。何ぞ思いついたことでもあったのか？」

「式部殿。松寿が押し込められているとしたら、何処だと思っ？
教えてくれ」

「む、それを知って何とする？」

式部が怪訝そうに問いかけてくる。経友は彼の曇った福顔を真っ直ぐ見つめながら、

「無論、救いに行く」

きっぱりと言い放った。

「馬鹿なツ！……松寿様は人質なのじゃぞ。無闇に動いて」

「大丈夫だ。俺は此度の騒動とは無関係の人間だし、万が一失敗したところで松寿に危害が及ぶ可能性はないと思う」

かぶりを振って、諭すようにそう答える。

今回の家督争いは、あくまで毛利家内部の問題である。たとえ外部から狼藉者が乱入したところで、両者の緊張状態に大きな影響はない。

万が一失敗したところで、経友一人が殺されるだけで済むはずだ。そう……現時点で松寿を救うべく動かせる駒は経友以外、他に無かった。

「だが、それではお主が」

「じゃあ、このまま指をくわえて待っているのかよッ！」「むっっ……」

あくまでも制止しようとする式部に対し、経友も負けじと声を荒げる。

式部の言いたいことは良く分かる。良く分かるのだ。

何せ、彼には経友も幼い頃から良くしてもらっている。心配して

くれるのもありがたい。

だが、今は松寿の人生がかかっている。そのような些事にこだわっている時ではないはずだ。

「松寿が……尼子家へ嫁ぐのを嫌がっているのは確かなんだろ」

「それは、無論だ。そうでなければ引つ込み思案な松寿様が家督を継ぐなど言い出しは……」

泣きそうな顔で、松寿が尼子家に引き取られていく様が思い浮かんだ。

婚儀の間、始終俯いている松寿を、尼子の三男が何処か小馬鹿にした表情で抱きしめる　想像するだけで、胸が張り裂けそうになった。

「冗談じゃない。経友はこみあげるものを、ぐっと我慢して言葉を搾り出す。

「だったら、救ってやらなきゃだろ」

決意を込めたその言葉に、式部は静かに肩を落とした。

そして、助けを求めるような眼差しで、隣の志道翁に意見を求める。

「広良はどう考えるか」

「ふむう……」

顎に手を当て、険しい表情で黙り込む志道翁。彼も式部と同様に戸惑いを見せていた。

拳を握り固め、じっと彼の言葉を待つことにする。

沈黙が場を支配した。

「仕方ない……式部殿、認めてやってくれ」

ようやく口を開いた翁は、何処となく呆れたような苦笑いを浮かべた。

「広良……」

「君は船、臣は水。松寿様が居られぬ限り、わしらにできることはない。だが、こやつは水ではないのだ」

その言葉に経友は眼を輝かせる。

「それではッ」

「うむ……松寿様の居場所だがな」

ぼつり、ぼつりと語り始めた志道翁の言葉に、経友は一言も聞き漏らさぬよう真剣に耳を傾けた。

四、

「敵の陣中に松寿様が押し込められている気配はなかった。また、元綱の居城は郡山城と尾根続きじゃ。人を隠すには大分具合が悪いならば、譜代どもの城かと予想されるが……」

志道翁の言葉を一言一句忘れぬように心の中で繰り返す。

夜の帳が下りきるまでにはまだ早い時分、経友は山中の茂みに息を潜めて、その時を待っていた。

頬に止まったやぶ蚊を、音を立てないように押し潰す。

だが、このような処置も焼け石に水でしかない。目に見えるだけでも数十匹のやぶ蚊が、今も容赦なく経友の全身にたかっているのだ。

要所を布で守っているとは言え、平静ならば到底耐えられるものではない。

それでも経友は必死に我慢し続けながら、頭の中で情報の整理を行っていた。

「……あちらも松寿を奪われぬよう細心の注意を払っているはずだとなれば、この一大事に城内に将兵を残している城が怪しい」

道中で、馴染みの商人である金吾と遭遇できたのは僥倖であった。

商人は武士以上に情報を重んじる。今回の騒動に関しても、金吾はかなりの精度で状況を把握していた。

「こう言う時は、縁起物のあわびや鰹が飛ぶように売れますからね。急のこととは言え、人のいる場所は大概把握していますよ。はい」

「……相合勢の中でも、渡辺の長見山城は遠すぎる。そして、坂の居城は何故か守兵が多い。相合勢の中での力関係を考えても、恐らくは……」

その的外れな推理ではないはずだ。だが、樂觀はできない。どうか当たっていてくれ。そう切に願いながら、経友はその時をじっと待ち続けた。

どれくらい時間が経ったのだろうか。

辺りはすっかり暗くなり、眼前に見える坂氏の居城のあちらこちらに松明が灯り始めた。

「ようやくか……待ちわびたぞ」

小声でそう呟くと、足音を立てないように細心の注意を払って近づき始める。

失敗は即、死に繋がる。

昂ぶる気持ちを必死に抑えながら、経友は一步、また一步と歩みを進めた。

城を取り巻く木塀のすぐ側まで近づぐことに成功した経友は、辺りに兵がいないことを確認すると、背負っていた弓を取り、屈みながらそれを番えた。

弦の勢い良く跳ねる音と同時に、矢が空高く放たれる。

縄を結ばれた矢は不安定な放物線を描き、そのまま城内へと落ちていった。

「手際が良いとは言えないが、慣れてないんだから仕様がないな…

…」

縄を静かに引つ張っていく。途中で確かな手ごたえを感じる。上手い具合に何処かへ引つかかってくれたのだろうか。

「良しッ」

念のためにもう一度辺りを確認した後、経友はするすると縄を伝って塀を登っていった。

塀の上まで登りつめた経友は、用心深く辺りの様子を窺う。

かがり火を焚いている兵が三人、門に詰めている兵が五人。そし

て巡回の兵が十数人程度まばらに見える。

「合わせても三十いるかないかといったところか。思ったよりも多くはない……これは助かるな」

安芸の国人たちが動員できる兵数は、さほど多くない。小物も含めて千も集められれば良いところだろう。

家人ともなれば、更にその数は減る。それでも、五十以上は覚悟していただけに、これは嬉しい誤算であった。

塀から飛び降り、身を屈めて屋敷へと駆け寄っていく。今のところは順調に事が進んでいることに経友は内心安堵した。

と、その時、

「ッ！」

突然の気配に、心臓が飛び上がるような思いで屋敷の軒下へと身を滑らせる。

(じゅ、巡回のっ……兵、か)

危うく鉢合わせするところであった。普段から鍛錬で感覚を鍛えていなければ、見つかったいかもしれない。

経友は深く息を吸い、動揺する心臓を無理やりに鎮めると、地面を這って移動を始めた。

(これはある意味都合だ。屋敷内に乱入できるはずもなし、まずは軒下から屋内の様子を窺おう)

都合の良いことに、板の間の床にはそこら中に換気用の穴が開いている。これを利用すれば、十二分に屋内の様子を探ることができるだろう。

経友は、一間一間、丹念に中の様子を探っていた。

家人たちの笑い声が聞える。毛利を二分するお家騒動とは言え、かれらは勝ち戦に組している者だ。雰囲気は明るいのはそのせいなのかもしれない。

(外れ、か)

保ち続けてきた緊張を一旦途切れさせ、経友は無念そうに息を吐く。

今探っていた家屋は、城主が生活するための主屋おちやであった。物音などに耳を澄ませてみても、特に気になる点は見受けられない。少なくとも、床の上で宴会を行っている連中が、松寿を閉じ込めているようにはとも思えなかった。

(となると、離れか、蔵が怪しいか……?)

気を取り直して、経友は四肢に力を込めた。まずは軒下から這い出して、手近な蔵へと迅速に近づく。

主屋の側面にはいくつかの蔵が林立していた。

月明かりに照らされて、耐火性を備えた土壁が白く照らし出される。

見張りの兵は 配備されていなかった。

(見張りの兵がない。ここも望みは薄い、か……)
裏へと回り込み、先ほどと同じ要領で窓に縄を引っ掛ける。

案の定、縄を伝って窓から覗いてみても、中に松寿は見当たらなかった。

もしか、この城に松寿はいないのではないだろうか……? 嫌な予感が脳裏をよぎる。

(……まだだ、まだ離れを見ていない……ッ!)

自分に言い聞かせるように心中でそう呟いてはみたものの、立ち込める不安はそう簡単払えるものではなかった。

心なしか、消沈した足取りで離れへと向かう。

主屋の向こう側。

立地で言えば、蔵の対角線上に屋敷の離れは建てられていた。

恐らく平時は、城主の家族が寝泊りしているのである。

宴会の影響か、建物の中に明かりは灯っていない。

そして、やはりというべきか見張りの兵は詰めていなかった。

(そ……んな……)

一縷の光明が、厚い暗雲によって遮られてしまったような心地がした。

この城が外れであったならば、もう何処を探せば良いのか分から

ない。両足がまるで重い枷を付けられたように動こうとしてくれなかった。

(馬鹿野郎、ここが駄目でも手当たり次第探すだけだッ！ 立ち止まるな、松寿を救えッ！)

役立たずになった両足を経友は叱咤するように力いっぱい殴りつけた。

じんとした痛みで顔をしかめる。

我ながら馬鹿なことをしたと思う……が、上手い具合に両足にかかれた枷が外れてくれたようだ。活力を取り戻した両足は、何とか再び言うことを聞いてくれるようになった。

経友は念のためにと、望みの薄い離れの中へと忍び込んでいく。暗闇の中で、視線を上下左右にと動かす。

だが、目当てのものは見当たらない。

やはり、外れだったか……と、きびすを返そうとした瞬間、

「あつ……！」

離れの奥に蠢いている何かを発見した。慌てて駆け寄り、それを抱き寄せる。

手に確かに伝わってくる人肌の温もり。線の細い身体

間違いない。横たわっているのは年端も行かない娘だ。それも、

両手両足を縛られている。

「松寿ッ！ 松寿なのかッ？」

小声で必死に呼びかけるも返事はない。気を失っているのだろうか。

歯を食いしばって彼女を抱きかかえると、経友は外へと急いで駆け出した。

廊下から外へ飛び降ると、雲間から零れ出した月明かりが、経友と囚われていた娘を照らし出してくれた。

娘の顔を見て経友は愕然とする。

「松寿……じゃない……？」

囚われていた娘の顔は、全く覚えのないものであった。娘の冷た

い視線が経友を射抜くように貫く。

お前は一体誰だ　そう問いかけようとした刹那、経友は凍りつくような殺気を感じ、反射的に娘を放り投げて横に跳んだ。

銀光が煌き、幾つもの鈍い音が地面に突き刺さっていく。

全ては避けきれなかった。肩口に生じた鋭い痛み思わず顔を歪める。

見ると左肩には二本の矢が深々と突き刺さっており、袖を真っ赤に染め上げていた。

「これはこれは千若殿ではありませんか。何故このような場所におられるのでしょうか？」

嘲るようなその声を耳にした経友は、悔しげな表情で唇を噛む。

(謀られた……ッ！)

声のする方向へ視線を向ける。

そこには此度の元凶たる相合四郎元綱が、複数の側近と共に武装して立ちはだかっていた。

お前は私の手のひらの上で踊っていただけなのだ　そう言わんばかりに不快な笑みを浮かべながら……

毛利の内紛(三)

五、

家人たちによって、無数の松明が離れを取り囲むようにかざされている。

真昼のような明るさだ。燃えさかる炎が、咎人を責め立てるように煌々と揺らめいている。

ちくりと突き刺されたような両眼の痛みに耐えかねて、経友は片手で光を遮った。

その仕草がよほど滑稽に思えたらしい。周囲から湧き上がる嘲りの笑い声は、底冷えするような不快感を感じさせた。

「不自由をさせたな。すぐに後始末をするから、しばし待て」
「……はい、四郎様」

悠然と灯火を背負いながら、元綱が横たわる娘に労いの言葉をかける。娘は何処か熱のこもった視線を彼に投げかけながら、嬉しそうに頷いた。

「さて、千若殿？ 牛若丸の真似事にご執心なところ申し訳ないが、ここは鬼きいちほうげん一法眼の屋敷ではありません。よって目当ての六韜りくたうもありはしないのです」

切れ長の瞳が愉悅に歪む。

彼の芝居がかった口調は、その整った容貌と相まって、ただでさえ光輝いている存在感を更に高めるのに一役買っていた。

だが、煌びやかな見てくれに反してそのまなざしは冷酷で、どこか世の中に絶望しているようにさえ見える。

「お前、四郎殿か……？」

「……？ 先日といい、千若殿は良く分からぬ質問をしますな」
経友は何か釈然としないものを感じ、元綱に問いかけた。

馬鹿げた質問であるとは自分でも分かっている。が、経友には眼前のこの男が、どうしても記憶の中の相合四郎元綱と上手く重なら

なかつたのだ。

以前の元綱は誠実だった。

才に溢れているにもかかわらず、それを鼻にかけることもない。瞳をぎらぎらと輝かせ、己が才を磨くためにひたむきに努力する。山口で良く顔をあわせていた幼馴染の一人、相合四郎元綱とはそう言う男であった。

だが、今日の前に居るこの男はどうか。成る程、その溢れんばかりの才能は以前と少しも変わるところがない。

身動きのできない松寿派の家老たちと相対しながら、彼らに付ける隙を与えず、更には不意の侵入者を予測して待ち構える……その判断力、立ち回りたるや、同年代の若者をはるかに上回るものだ。まさに生まれながらに勝者たることを約束されたかのような立ち回りだ。

だが……それに反して彼の瞳は、勝者の持つ『それ』にしては、あまりにもくすんだ色をしているように思えた。

「……昔のお前はそうじゃなかつただろ。何がお前をそうさせた……？」

「ふむ、むしろ変わらぬ貴方の方がおかしいと考えるべきでは？人は変わるものでしょうに」

短い問答の後に、元綱は短く息を吐いた。そして、懐から扇子を取り出し、形の良い口元に当てる。

「諦めたのですよ」

厭世観漂う声色で紡がれた言葉が、経友を更に驚かせる。

「どれだけ才を磨こうとも、どんなに努力を重ねようとも……私が妻の子である以上、それを存分に振るう機会は訪れない。龍になれるのは鯉と決まっています。取るに足らない雑魚に、天は決して道を示してはくれぬのです。どんなに鮮やかな衣装を身に纏おうとも、下人は……下人でしかないのです」

扇子で顔を隠しながら、元綱は肩を大きく震わせる。

表情は見えない。だが、彼の背中からは妬みや憤りと言った黒い感情が、煙のように轟々と舞上がっているように感じられた。

釣り上がった眼が、扇子の上からちらりとこちらを覗いてくる。凍てつくような悪意　それを身に受け、経友は思わず身震いした。まるで経友の周囲だけ真冬になったかのようだ。

「千若殿、私は貴方が嫌いではなかった。国人の三男風情が分不相応な努力を重ねていると言う一点において、むしろ共感を抱いていたと言っても良い。ですが……貴方と私は似ているようで似ていなかった。英雄の背中を見て育ってきた貴方と違い、私の上に位置する者たちは……揃いも揃ってほんくらが過ぎたのです」

「お前、それは……」

慌てて口を挟もうとするも、彼の扇子がそれを制するかのようにはたりと閉じられる。

経友は機を失い、苦みばしった顔で虚空を見つめる冷たい瞳の行く末を追った。

「父が愚鈍であることは構わない。死した後に子がそれを正してやれば良いのですから。だが、兄や姉まで愚かでは、風下に立つ私の気持ちはどうなるのか。文弱の兄上が死んだかと思えば、次は姉上だ。底の浅い我俣を言っでは、私の心をささくれ立たせる……もう、疲れたのです」

そう言い終えると、元綱は長いため息をついた。

しばしの沈黙。そして、段々と彼の背負う黒い感情が大きくなっていく。

抑えきれぬほどに高まった『それ』は形を求めて乱れ狂う。そして、結実した言葉は、

「だから……私が上に立つ」

ごくごく短いものであったにも関わらず、彼の抱いてきたもの全てが詰まっているように思えた。

明白なる下克上の意思。経友の喉が、音を鳴らして唾を飲み込んだ。

「幸いにして、今の世には下克上とやらが蔓延っている。細川のよ
うな天下人とて、親兄弟で争いあう外法の末世だ。そうだ……時代
は私を後押ししてくれているッ……」

元綱の声が大きく、そして色を帯びていった。

もう、経友の知る相合四郎元綱の面影は欠片も残っていない。今、
自分の目の前に立っている男は、才に溢れた潔白な若者ではない。

悪徳をその身に食らった奸臣　いや、乱世に身を委ねる梟雄の
一人であった。

強く歯噛みする。

痛みを訴える肩を意識の向こう側にやりながら、眼前の男に心を
飲まれないよう、必死に睨みつけた。

「松寿はどこだ……」

「ふむ……？」

「あいつを何処にやったと聞いているッ」

「さてね。たとい冥土の土産であったとて、それを教えてやる義理
はない」

「四郎ッ！」

経友の呼びかけが心底癢に障ったのか、元綱の顔が面白くなさそ
うに大きく歪んだ。

懐に扇子を仕舞い込み、片手を挙げて周囲に指示を送る。

「もう良い。こいつを射殺せ。生きてこの城から出すでないぞ」

「四郎ッ」

「英雄の孫でありながら、その愚鈍さ……まことに救いがたい。死
んで、その出自に詫びるが良い」

死の宣告とともに、彼の片手が経友へと向けられる。

それに従って、幾つもの矢先がこちらに向けられた。

「放てッ！」

元綱の号令とともに、数多の矢が飛来してくる。

そのいずれもが狙い違わず経友目掛けて飛んできていた。このまま坐して待つていれば、たちまち全身を串刺しにされてしまうことだろう。

「くうッ」

経友は狐ヶ崎を抜き放つと、急所に届かんとしていた幾つかを全て斬り払った。

銀色の閃きが十文字をかたちどった後、真つ二つに断たれた矢が四散していく。

（更にッ！）

残りの矢が降り注いでくる。

その数は十を超えており、一振りや二振りでは到底払いのけられる量ではない。

経友は来るべき痛みに備え、奥歯を強く噛み締めた。

身体を半身に構え、眼前に迫る鉄矢の雨に集中する。

一本目は無事に避けきった。二本目は鼻先を掠めた。三本目は避けきれず、腿に浅くない裂傷をつけていった。

……まるで雨の中を濡れずに歩くような所業だ。成功するはずがない試みと言える。だが、経友はそれを懸命に続けていった。

十本目の矢が経友の喉元に浅い傷をつけた時、辺りには経友の血が盛大に飛び散っていた。

（だが、生きているッ……！）

瞬時に息を整え、次なる行動に備える。

まずは、この包囲を突破しなければならぬ。

周囲を取り囲む家人たちから、かすかな動揺が感じ取れる。先ほどの矢を受けて、まさか立っていられるとは思っていなかったのだろう。

（突破するならば、今しかないッ）

経友は、狐ヶ崎を八相はっそうに構え、包囲している家人の中でも特に動

揺の色が濃いと思われる箇所に向かって斬り込みをかけた。

「何をやっている、無能者めがッ！ 貸せッ」

配下の余りの不甲斐なさに業を煮やした元綱が、苛立たしげに声をあげる。

家人の手から弓を奪うと、荒々しく弓を引いた。

「弓とはこう扱うのだッ！」

放たれた矢は、迅雷のような速度で経友目掛けて飛んでくる。

到底避けられるものではない

瞬時の判断の末、経友はすでに矢の刺さった肩を盾にすることにし、斬り込みを続行した。

ずぶりという嫌な感触を感じ、焼け付くような痛みが身体を駆け巡った。

「ああああああアッ！」

痛みで固まる身体を奮い立たせようと、経友は叫んだ。

更に一步、足を踏み入れる。更に一步。雑兵の狼狽した顔が隅々まで確認できる距離にまで近づいた。

烈火の気合を伴った狐ヶ崎の一撃が振り下ろされる。

「ひゃ、ひゃああアッ？」

雑兵の腕が宙を舞う。

たまらずに倒れこんだ雑兵を乱暴に踏み越え、経友は何とか包囲を突破する。

「役立たずどもがッ………間断入れずに囲めえッ」

呆然としていた家人たちであったが、元綱の声に自分の為すべきことをはっと思ひ出すと、慌てて刀を抜いて追いかけてきた。

経友は、追いつがってくる敵を相手に二合、三合と斬り結び、門を目掛けて駆けていく。

時折放たれる鉄矢は、庭木を盾に何とか凌いでいった。

「はあっ………はあっ………！」

肺が空気を欲しがり、身体が休息を欲してくる。

だが、ここで立ち止まるわけにはいかない。

心の中に、助けを求める松寿を確かに感じ、一心に駆けていった。周りの景色がめぐるしく移り変わっていくも、経友は脇目も振らずに駆け抜けていく。

主屋の曲がり角を転がり込むように飛び出て、ようやく視界の端に捉えた正門は　やはりと言うべきか、閉ざされていた。

門前に待ち伏せていた家人たちがこちらへと向かってくる。このままでは挟撃を受けてしまいかねない。

「くそッ。まだ手詰まりには早いだろうッ！」

まだ、窮地を脱することのできる道筋は残されているはずだ。

経友は必死に考える。

侵入経路は一方通行であった。もう同じ道を辿って戻ることはできない。裏門へと向かう余裕も残されていない。他に残された道は

……

その時、経友の視界に防衛用の矢倉がちらりと映った。

「あそこだッ……！」

迫っていた雑兵を横薙ぎに斬り払った後、経友は行く先を変えて矢倉へと無我夢中で走る。

流石に矢倉にまで待ち伏せの兵はいなかった。経友は喝采をあげながら、大急ぎで梯子に取り付いた。

「だれか、あいつを引きずり落とせッ！」

階下から元綱の怒号が聞えてくる。

幾人かの家人たちが経友を追って梯子を上ってきているが、それらを何度も蹴落としては、ただひたすらに上を目指していく。

梯子は数人分の重みを受けてぎしぎしと揺れ、何度も経友の頬を下から放たれた矢が掠めていく。

どっと冷や汗が引き出してくる。

出血と連戦、そして緊張が祟って何度も気を失いそうになるが、その度に唇を噛んで懸命に耐えた。

(あと少し、あと少しだ……！)

自分に言い聞かせながら、手と足を動かす。

「良しッ……！」

梯子の終点を告げる堅い床の感触に歓喜の声をあげ、勢い良く矢倉の上へと這い出る。

地面よりも強い風が、経友の血に濡れた身体を容赦なく打つ。

眼下には暗い森が延々と広がっており、経友は本能的な恐怖を感じて息を呑んだ。

「く……思ったよりも……高い」

階下からは相変わらず雑兵が上ってくる音が聞える。ここで立ち止まっている暇などありはしない。

……もはや選択の余地はないのだ。

「くそ、くそっ……おおおおッッ！！」

覚悟の雄たけびと共に、経友はその身を柵の外へと投げ出す。

肝を掴まれるような不快な感覚。重みを支える場所を失った経友の身体は、一旦ふわりと停止した後、地面に向かって真っ直ぐに落ちていった。

途中、木の枝が何度も経友の身体を強かに打つ。

そして、すぐに経友の身体を襲う大きな衝撃。

「ッッ！」

声にならない悲鳴を上げた。

落下の衝撃で、胸を強く打った経友は地面の上で悶絶する。

胃の中のもの逆流してくるのを押さえられない。

「げほっ……げほっ……」

呼吸もままならない状態の経友を、開門の音が無慈悲に追い立てる。

この場に留まっていたには意味がない。経友は、激痛の走る身体に鞭打って転がり落ちるように山を駆け下りていった。

「松寿……松寿ッ……」

かすれる視界に、幼馴染の幻影を浮かび上がる。

経友は意識を闇に持っていかれないよう、彼女の名前を繰り返しながら懸命に引きずる足を動かした。

春を待つ（一）

> i 1 7 5 7 8 — 2 2 8 3 <

一、

朝靄あさむせがかかったようにおぼろげな道を、経友はただひたすらに歩いていった。

辺りは薄暗く、目に映るもの全てが影のように黒く霞んで見える。今歩いている場所が、一体何処なのかも判別がつかなかった。

確か大怪我をしていたはずなのだが、不思議と痛みは感じない。その代わり、身体が凍えるように寒かった。血が足りていないのだろうか。

温もりを求めて身震いする身体に鞭打って、無心で足を引きずり、前へ前へと進んでいく。

「何処へ向かっているんだ、俺は……」

混濁した意識の中、かすれ声で一人呟く。だが、答えるものは誰もいない。

豊国や、穂馬でもいてくれれば、何かしらの反応を返してくれたのかもしれないが、残念ながら彼らは傍にいないようだった。

「置いてきちまったもんなあ……あれ、何処に置いてきたんだっけか……」

俯き、しばし考え込むが、どうにも思い出せそうにない。寝惚けているのかと思うくらいに頭が働かなかった。

「まあ、いいや」

歯痒さに少し焦れるも、直にどうでも良くなった。

こうしている間にも、意識の外側で経友の足は動いている。まるで別の生き物にでもなったかのようだ。

無理に物を考えずとも、いずれこの身は何処かに辿り着くだろう。もう、なるようになってしまえ。そう考えて、足の進むに任せた。

「ん……？」

ふと、誰かに呼び止められたような気がして、経友は振り返った。後ろには誰もいない。怪訝そうな表情で、首を傾げる。

「はて……」

一体誰が自分を呼び止めたのだろうか。

辺りをきよろきよろとしていると、霞の中にいくつもの人影がぼんやりと浮かび上がってきた。

複数の人影は段々と色づいていき、見知った人物の姿をかたちどつていく。

「千若」

それは父母や兄たちであった。厳しい顔つきで、こちらを咎めるよう睨んでいる。

「千坊」

それは祖父母であった。何処か寂しそうに笑って、こちらを見つめている。

「兄者……」

それは妹の玫であった。何故か大粒の涙を浮かべ、肩を震わせている。

一瞬声をかけようとも思ったが、すぐに思い直して苦笑いを浮かべた。

「これはないな……まやかしだ。あいつが泣いている所なんか、もう何年も見ていない」

あまり感情を表に出しながらない妹のことだ。これからも目の前で、このような表情を見せてくれるとは、とても思えなかった。

「そうだ、基爺たちに謝らなきゃ。大口を叩いたって言うのに、救えなかつたんだから……」

口をついて出た『救つ』という言葉に、垂れ流しの思考がぴたりと止まった。

「救つ……？ 誰を……？」

決して忘れてはいけない大事なことであつた気がする。

不安に押し潰されそうになりながら、今度は諦めようとせず、頭の中で何度も問いかけ続ける。

その時、柊の香りが鼻をついた。とても甘く、そしてとても寂しい香りだった。

経友は、はっと顔を上げる。

「あつ……」

目の前を覆う霞が、ぱつと晴れ渡っていく。

薄暗闇が切り裂かれたように霧散していき、遙か遠方にふわりとした黒い髪がたなびいているのが見えた。

「松寿ッ」

必死に駆ける。

だが、松寿との距離はちつとも縮まらない。

焦燥感に駆られ、苛立ちを覚える。届かないと分かっている、自然と片手を前へ伸ばしてしまう。

「松寿ーッ！」

大声を張り上げるが、一向に気づく様子が見られない。

彼女の綺麗な髪が、風に靡いて揺れていた。

舞い上がった毛先が淡く輝き、泡のように消えていく。

消失は全身へと波及していった。

まずは、髪。次に、手足。末端から中枢へ、ゆっくりではあるが確実に

彼女という存在が、やがてその場から完全に消え失せてしまう。

それは自明の理であるように思われた。

「助けに来たんだ、松寿ッ！」

心が張り裂けそうになりながらも、経友は必死に呼びかけ続けた。何故気づかない。どうしてこちらを振り向いてくれない。

無力感に抗うように、経友はありつた力の力を込めて、喉から声を絞り出す。

必死のあがきは、彼女がそこからいなくなっても延々と続けられ

た。

「あ……れ……？」

全身を襲う焼け付くような痛みに驚いた経友は、うつ伏せになった上半身を反射的に持ち上げる。

山道を抜ける肌寒い風が頬を撫でていった。

悪夢でも見ていたのか、べっとりとして身体をぬらした冷や汗が、身体の内もりを奪っていく。

辺りの景色はすっかり茜色に染まっている。帰巢する鳥たちの声が、周囲を飛び交っていた。

「……？」

状況を理解できない経友の耳に、聞き慣れた馬のいななきが聞こえる。

声の主に視線をやる。豊国であった。

経友を背に乗せた豊国が、気遣うようにこちらをちらりと一瞥し、すぐに前を向く。

山道を登っていく足取りはゆっくりとしたもので、傷ついた経友の身体を労わっているようにも感じられた。

「豊国？」

ふらつく頭をぼろぼろの手で抱えながら、経友は考えをめぐらす。坂の居城で元綱たちに取り囲まれた経友は、命からがら包囲を突破して逃げ出すことに成功した。そこまでは分かる。

だが、そこから先の記憶がない。

山を転がり落ちるように駆け下りた、その後……

「そっだ、追っ手は……？」

慌てて後ろを振り返る。

後方には、穂馬が後ろを警戒するようにつかず離れずに続いていた。

白いたてがみがひるがえった瞬間、その身体に広がる赤い広がり
が目に飛び込んでくる。

彼女のすらりとした半身には、その所々に矢が刺さっていたのだ。
あまりの痛ましさに、経友は声を漏らさずにはいられなかった。

「守ってくれていたのか……」

自身が置かれた状況を即座に理解し、沈痛な表情を浮かべる。

どうやら、二頭の元へ何とか逃げ帰ることのできた経友は、その
まま意識を失ったらしい。

豊国は、動けぬ経友を背負って経友の足となり、穂馬は怪我人を
背負って早く駆けることのできない豊国を守るように、追っ手を捌
いてくれたのだ。

この二頭がいなければ、今頃自分はこの世にいなかっただろう。

「ありがとうな」

心を込めて礼を言うと、豊国の背からゆっくりと下馬した。

着地の瞬間、尋常でない痛みが全身に走ったが、歯を食いしばっ
てそれに耐える。

引きずる足で穂馬へと近寄りながら、その視線を穂馬の傷口へと
向ける。

傷は決して浅くない。だが、馬は人間に比べて身体が丈夫だ。恐
らく命に別状はないだろう。

ほっと安堵の吐息がついて出る。

「痛かったろう……？ ちょっと、待っていてくれ」

たてがみを優しく撫でると、経友は右腕を覆う射籠手を取り外し、
身に纏う着物を脱いだ。

生地はお世辞にも清潔とは言いがたいが、それでも血止めには十
分役に立つはずだ。

狐ヶ崎で、それを長く裁断していく。

「少し、我慢してくれよ」

穂馬にそう声をかけると、彼女は気構えができたことを表すよう
に低いいなないた。

合わせて経友も小さく頷く。そして、刺さっていた征矢そやを一気に引き抜いた。

血が辺りに飛び散った。

失血を防ぐため、彼女の傷口に裁断した布を手早く当てる。

「暴れもしない。玖の言うとおり、お前は良い子だな」

嬉しそうに身体を振るわせる穂馬をもう一度撫でる。

じんわりと赤く染まっていく布を縄で固定した後、経友は豊国に声をかけた。

「豊国もすまない。お前の身体も、血で汚してしまったな」

経友の声に応えるように低く呻いてくる。

落ち着かない声色であった。焦れつたそつにこちらに送ってくる眼差しに、経友は怪訝そうな表情を返した。

だが、すぐに豊国の視線が、経友の肩口に向かっていることに気づき、その意図するところを理解する。

経友自身、他人を心配していられる状態ではなかったのだ。

「ああ、そうか。俺がこんな体たらくでは、お前も落ち着かないか」
くすりと笑って、自身の傷を一つ一つ確認していく。

どうやら裂傷は捨て置いても大した問題はなさそうだ。
深手といえるのは、肩の矢傷のみである。こちらは放っておけば、矢から毒が染み出し、いずれ肩を腐らせるだろう。早急に処置する必要がある。

経友は刀の鞘を口にくわえ、舌を噛み切らないようにすると、自身の左肩に刺さる矢を引き抜いた。

雷に打たれたように、身体が“く”の字に折れ曲がる。

あまりの痛みに再び気を失いそうになるが、気力を振り絞って二本目の矢も続けて引き抜いた。

「ぐっ……」

肩で荒い息をつきながら、痛みが和らぐまで静かに時を過ごす。

既に周囲に鳥の声はない。

人と馬の静かな息遣いと、風に揺れる木の葉の音だけが満ちてい

た。

強い緑の香りが、傷ついた経友の身体を癒してくれる。

ただでさえ、血の臭いと痛みでどうにかなくなってしまっただけなのに、これは非常にありがたかった。

そうやって、痛みの波が引いていくのを、根気強く待ち続ける。

四半刻は経っただろうか。

肩の止血もようやく終わり、経友にも幾分か考える余裕が生まれた。

「……結局、ここは何処なんだ？」

頭を捻って自問する。

追っ手が来ないことから察するに、ここが相合勢の勢力下ではないことは確かのようにだ。

とすれば、大分遠くまで逃げてきたことになるのだが……

経友は落ち着いた眼で改めて周りの景色を見回した。

「ん……？」

ふと、何か引つかかるものを感じ、経友は眉を寄せた。

改めて見てみると、草木の生え方から獣道の場所、そして耳に響く森の音まで、五感で感じ取れるもの全てに覚えがある。

知っている。経友はこの道を良く知っていた。

「それも一度や二度通った程度の記憶ではない。まさか……」

頭によぎる可能性を確かなものとするため、経友は豊国の背に再び跨り、一気に山道を駆け上がった。

そう高い山でもないはずだと、記憶が告げてくれている。

それを証明するように、鬱蒼とした緑が、ぱあっと視界から消えた。

頂上へと辿り着いたのだ。

経友は開けた頂上から眼下を見下ろし、そして驚愕する。

「猿掛、城……だと……？」

すぐ傍にそびえたっていたのは、良く見知った松寿の居城であった。

幼い頃から暇を見つけては通っていた馴染み深い場所が、夕焼け色に赤く染まっている。

「夕焼け……」

信じられないような目つきで、沈み行く太陽へと視線を走らせる。坂の居城へと忍び込んだのが夜更けであったことを考えると、既に最低でも一日は過ぎている計算になる。

意識を失ってから、相当時間が経っていることは覚悟していたが、まさかここまで経っているとは思っても寄らなかつた。

予想を遥かに上回る事実には、経友は苦々しげに呻く。

「くそっ……何でこんなところまでッ」

豊国に文句を言いかけるも、寸前で言葉を飲み込んだ。

猿掛は、吉川の居城である小倉山の南方、目と鼻の先にある。

つまり、豊国は経友の身を慮って小倉山を目指していたのだ。これを難じることなどできるわけがない。

「ちくしょう……」

やり場のない怒りが頭の中を渦巻いている。自身のあまりの情けなさに、経友は声を上げて泣きたい衝動に駆られた。

意気揚々と、松寿救出に乗り出したは良いが、松寿の元へ近づくこともできていない。

それどころか、経友が松寿救出のために動いていると相合勢に知られてしまい、かえって警戒を強めてしまうという体たらくだ。

これでは、松寿から遠ざかるばかりではないか。

「そもそも、松寿の居場所さえ分からないんだ。遠ざかるとかそう言った話ですらない……」

絶望の帳が、経友の身に重く押し掛かってくる。

もう諦める。お前じゃ誰も救えない。脳裏に誰かがそう囁いてきた。

追い討ちをかけるように、遠方からは戦の終わりを告げる法螺貝の音が風に運ばれてくる。

毛利家のにらみ合いが終わってしまったのだろうか。福原や志道の翁は松寿を諦めてしまったというのか。

『敗戦』。その二文字が経友の心を満たしていった。

大粒の涙が、地面へと零れ落ちていく。

二頭の勞わるような鳴き声が、やけに耳に残った。

「分かつてる。諦めろって言うんだろ。でも……諦められないんだよ。分かつてくれ……」

涙で滲む辺りの景色が、段々と薄暗くなっていく。

夜が再び近づいてきたのだ。

宵闇の到来は、まるで経友の内にくすぶり続ける未練の炎を容赦なく消さんとしているかのように、その深みを増していく。

(もう打つ手はない。諦めよう)

己の内なる声に、敢え無く頷こうとしたその時

経友の瞳に溜まりつつあった陰鬱な濁りを洗い流すように、淡い光が眼に飛び込んできた。

「あれは……？」

目を凝らしてみると、それは花のようであった。

薄暗くなつていく景色の中、小さな白い花が周りの闇に負けぬよう、必死に光を放ち続けていたのだ。

普段なら見逃していたかもしれない。

だが、最後の一瞬まで藁にもすがる思いで解決の糸口を捜し求めていた経友にとって、その白い光は特別に明るく目立って見えた。

経友は涙で濡れた目を手で擦り、花の近くへと馬を近づけさせた。下馬して、それを手にとって見る。

千重咲きの椿。

よくよく見てみれば、それは本物の花ではなかった。精巧に作られた花飾り　　そう、それは間違いない松寿に贈ったはずの髪留めであった。

「何でこれがここに……」

思わず、南方を見る。

坂の居城は猿掛や郡山の南方にあった。だが、経友が今立っているこの場所は、猿掛から北へと伸びる山道の途中にある。

つまり、全く正反対の方向にあるのだ。

「道理が合わない。何故だ……？」

松寿がさらわれた時に、譜代の城へと連れ去られたのならば、必ず南方へと向かうはずだ。

それをわざわざ北方の道へと松寿を連れてくる理由が理解できなかった。

「尼子に引き渡すために北へ向かったのか？　……いや、それはない。尼子と相合勢が連携をとって動くには早すぎる」

いくら出雲国が隣国とは言え、国を隔てているのに違いはない。松寿の決断と、それに対する誘拐。このような突発的な事件に対応するだけの連携は到底望めないはずだ。

また、相合勢だけで出雲へ連れて行くということもありえない。

出雲への道中には、いくつもの国人勢力が割拠している。その中には大内派だって当然いるのだ。

万が一そういった他勢力に襲撃され、松寿を奪われてしまった目はも当てられない。

そもそもこの戦は相合勢にとって大義が弱い戦だ。人質である彼女が手元から離れれば、たちまち戦の均衡は崩れ、相合勢の命運は尽きてしまうに違いない。

だからこそ護衛の兵を必ず付けておかねばならないのだが、兵を引き連れて出雲へ向かうなど悪目立ちがすぎる。

松寿派の家人だって、馬鹿ではないのだ。すぐに追っ手を差し向けるだろう。

そう……現実問題として、すぐに松寿を尼子へ送り届けることなど不可能だ。

そこまで考え、経友はある疑問に思い当たった。

「待てよ……？　そもそも、四郎は何で坂の居城にいたんだ？　あの時、横田の地では相合勢と松寿派が一触即発のにらみ合いをしていたはずだろう。理由もないのに総大将が本陣を留守にしているはずがない」

考えれば考えるほどにおかしな話だ。

横田の軍を別働隊とし、坂の居城を本陣とするには兵の数が少なすぎる。総大将に万が一のことがあれば、戦自体が立ち行かなくなるのは、敵方の松寿が証明している。

元綱が城に詰めていたのは、何か他に理由があったと考えるべきだろう。

「坂の居城に松寿はいなかった。確認したのだから、これは間違いない。とすると、守備のためと言う線は薄い。ならば何故……」

経友は、更に考えを進めた。

知恵を振り絞って、あらゆる可能性を捻り出しては、それを否定していく。

延々と繰り返される試行錯誤の中、一つだけ、どうしても否定しきれない可能性が一つだけあった。

「囹……か……？」

金吾からの情報にあったとおり、坂の居城に兵が駐屯していることは、外部にも知られていた。

そこに元綱が詰めているとなれば、松寿が囚われていると考える人間が現れても不思議ではない。

「でも何で……」

釈然としない思いで、経友は口元に手をやった。

囹が無駄だとは思わない。だが、そもそも松寿は人質なのだから、守りを固めてけん制するだけでも十分なはずなのだ。

わざわざ回りくどいことをしてまで、松寿がそこに囚われている

よう見せかけなくとも良いではないか。

まさに蛇足だ。必要のない小細工と言える。

「必要がない？」

刹那、経友の脳裏に何かが稲光のように閃いた。

もう一度繰り返し、ごくりと唾を飲み込む。

猿掛の北に落ちていた髪留め。総大将不在の本陣。そして必要のない囿

もし、囿をする必要性があったのだとしたら。松寿がそこにいるよう見せかけなければいけない理由があったとしたら……

頭の中で、数多の情報の断片が組み上がっていき、一つの確固とした形を成していく。

「もしかしたら……」

おぼろげな仮説が、確信へと変わっていくのにそう時間はかからなかった。

経友は、生まれ出でた可能性を静かに言の葉として紡いだ。

「松寿は猿掛から連れ出されていない……？」

二、

月明かりが色濃くなっていく時分、経友は背の高い茂みを早足で掻き分けていた。

松明の類は持ち合わせていない。だが、ここは幼い頃から慣れ親しんだ山だ。目を瞑ったって走破することができた。

「そもそも、一人をさらうって言うのは、そんな容易いものじゃない。どんな奴だって身の危険を感じれば抵抗くらいする。いくら松寿が女の子だからと言って、それは例外じゃないはずなんだ……」

ここは毛利の領内だ。松寿派の人間だって辺りをうろついているわけで、狼藉の途中で見つかる可能性は決して低くない。

拉致に手間取れば、その危険性は更に増す。

たとえ夜の闇に紛れて、彼女の身柄を運ぼうとしても、譜代の城

へ向かうためには松寿派の治める土地を経由する必要がある。

ただでさえ松寿に手を出すという大冒険に踏み出しているのに、頭の良い元綱がそれ以上の危険を重ねるだろうか。

「……そんな危険を冒すくらいならば、まずは手近な場所に隠して、機を窺った方が良い。それが無難だ」

猿掛からそう離れていない場所に、誰にも気取られずに一人を隠すことのできる場所。

そんな都合の良い場所は果たしてあるのか……

「つたく、松寿は何故かあなぐらと縁があるな……！」

経友には心当たりがあった。

幼い頃、松寿は井上某という重臣に、城を追い出されて洞窟へと押し込められたことがある。

ここ、猿掛にはそういった場所がいくつか存在するのだ。

「松寿は猿掛付近の洞窟の何処かに押し込められている」

自身の推論を再確認するように、何度も繰り返す。

昂ぶった感情に呼応して、自然と足が速まる。怪我のことなど、とうに頭から抜けてしまっていた。

「ここは……違うか」

経友は把握している全ての洞窟を手近な場所から当たっていった。当てが外れるたびに、隠しようのない不安が膨らんでいくが、前回と違って希望の灯火が弱まることはない。

経友には確信があった。

懷中に仕舞った髪留めに手を当てる。柀の残り香がほのかに漂う。ただの勘なのかもしれない。だが、感じるのだ。

一つ、また一つと心当たりを潰していき

果たしてそこに答えはあった。

「……明察ッ」

山中の薄暗い洞穴の前に、煌々と松明が灯っている。

何人かの見張りが、落ち着かない様子で敵の襲撃に備えていた。

「間違いない。松寿はここにいるッ……！」

身を屈めて、様子を窺う。

洞窟の前には四人ほどの兵士が詰めていた。恐らく、他にも何人が散らばっているはずだ。

乱れた息を整えるべく、静かに呼吸を繰り返す。

不意打ちが成功すれば、対応できぬ数ではない。

経友はすうつと獲物を見るように眼を細め、背中に背負っている弓を番えた。

日頃の鍛錬を思い出し、神経を研ぎ澄ませる。

痛みすら遠のいていく中で、狙いとなる兵士の身体が殊更に大きく見えていった。

静かに矢が放たれる。

螺旋を描きながら暗闇を切り裂いていく疾風の一撃は、狙いたがわずに兵士の胸へと深々と突き刺さった。

「あ……？」

胸を貫かれた兵士は、信じられないと言った様子で目を見開いて、その場に力なく崩れ落ちた。

まさかの襲撃に、他の兵士たちが色めき立つ。

「て、敵襲ッ！ 敵襲ーッ！」

その声に、洞窟の中から更に二人が飛び出してくる。

合計五人。

五体満足ならば、無理を通せぬこともないが、今の経友は手負いだ。まともにもやりあっては勝ち目が薄い。

「よし……」

経友は慌てずに次の矢を番え、組み打ちに移るまでに兵の数を減らすことに専念した。

最も距離の近い、槍持ちの兵士へと視線を走らせる。

視界が収束していく。

それに伴い、槍持ちの姿が鮮明になつていった。

不安を隠せず、周りに怒鳴り散らしている。

忙しなく動き続けている喉元がはつきりと視えた瞬間、弓鳴りの音が再び闇を切り裂いた。

経友の視線を追うように放たれた矢が、槍持ちの喉を貫く。

槍持ちは苦悶の表情を浮かべながら、血泡を吐いて往生した。

「あそこだッ」

次の狙いを定めようとしていた経友目掛けて、兵士たちの怒声が近づいてきた。

矢の出所を確認した兵士たちが、氣勢を上げて切り込んできたのだ。

一瞬距離を取ろうとも思ったが、自らの足の具合を思い出し、忌々しげに舌打ちする。

引きずる足では、敵を掻き乱すことはできない。

意を決した経友は、狐ヶ崎を正眼に構えて兵士たちを迎え撃った。まず、一人目と斬り結ぶ。

鋼の打ち合う音が経友の耳を打つ。

敵兵士が腕力に任せて、こちらを押し倒そうとしてくる。兵士とは言え、流石に松寿の防衛を任されているだけあって、精鋭と言える腕前であった。

「だが、手に負えぬほどではないッ……!!」

短く叫ぶと、虚を突くように刀身を滑らせ、敵の腕を深く斬りつける。

敵の返り血が経友の頬をわずかに濡らした。

「うッ」

筋を断ち切られ、敵の強力がにわかに弱まっていく。

その機を逃さずに、経友は返す刀で敵の身体を斬り上げた。

「おおおおッ！」

絶命する仲間には目もくれずに、横から新手が掴みかかってくる。取っ組み合いに持ち込み、数の有利で押し切ろうと言う算段だろ

う。

斬りつけた際に体勢を崩しており、刀での反撃もままならない。体捌きで身を守ろうにも、全身に響く鈍い痛みがそれを許してくれない。

経友は自由にならない身体に苛立ちを覚えながら、無念そうに顔を歪めた。

仕方なしに敵と組み合う。

敵の屈強な腕が、経友の肩と腕をふんずと掴んできた。

経友の身動きが封じられる。

それを待ちかねたように、背後に回り込んだもう一人から強い殺気が放たれた。

(どうするッ……?)

思考は一瞬で済ませた。

息を吐いて覚悟を決めると、背後の敵兵に向かって背中を向けながら近づいた。

取っ組み合っていた兵士も、元より押し倒して首を掻き切ろうと狙っていたため、経友に引き込まれる形で前へと体勢を崩す。

その隙を見逃す経友ではない。

後ろに転がり込むようにして、敵を投げ飛ばした。

「へっッ」

背後の敵兵と投げ飛ばされた兵士が音を立ててぶつかりあう。

兵士たちが倒れこむ姿を横目で確認しつつ、経友は素早く受身を取った。

そして、敵が再び体勢を立て直す前に、刀の柄で思いきり頭を殴りつける。

昏倒する兵士たち。

経友は彼らには目もくれずに、最後の一人の姿を探し求めようと刹那、頭に鈍い衝撃が走った。

全身が痺れるように動かなくなり、堪らずその場に倒れこむ。

(頭を殴られたのか……? まずい、これは非常にまずいッ……!)

揺らぐ視界の中、狐ヶ崎が手の届かぬ場所へと蹴り飛ばされるのが見えた。

経友の手元には反撃の糸口がもう残されていない。

「御命頂戴ッ」

馬乗りになつた兵士が、野太い声とともに太刀を振りかぶる。

濃密な死の影が経友の身体を包み込んだ。

痺れる頭で必死に打開策をひねり出そうとする。

だが、どの策もこの窮地を脱することができそうになかった。

「くっ……」

諦められない。

後もう少いで、松寿を助け出せるのだ。諦められるわけがない。

最後まで悪あがきをしてやる。

そう心に決めた瞬間、何故か山県重房の憤怒にまみれた仁王面がぱっと思ひ浮かんだ。

いつだって諦めの悪い猪武者が、窮地に立たされた時、採った行動を思い出す。

それは

「頂戴されてたまるかよッ！」

経友は思い切り兵士を蹴り上げた。

経友の蹴りが兵士の背中をしたたかに打つ。

兵士の顔が苦痛に歪む。

一瞬の隙が生まれた。

経友が悪あがきを続行するには十分すぎるほどの時間である。

「足癖の悪い腐れ縁に感謝だッ」

経友はがむしゃらに土を掴み、相手の顔に思い切り投げつけた。

「ぎゃッ」

思わぬ目潰しに、兵士がひるんだ。

続けざまに、経友は彼の鼻頭に勢い良く頭突きをぶち当てる。

軟骨の潰れる嫌な感触が伝わってきた。

顔を押しさえて悶絶する兵士の呪縛から逃れた経友は、転がり込む

ようにして狐ヶ崎を手に取り、

「ようやく、ここまでたどり着いたんだ。今更こんなところで負けていられるかッ！」

声高にそう叫ぶと、一刀の下に敵を斬り伏せた。

全ての敵が地に横たわる。

肩で荒い息をつきながら、経友は刀に滴る血を拭おうともせず、洞窟を目指した。

「ぜえっ……ぜえっ……松寿ッ……」

狐ヶ崎を杖にして、経友は無我夢中で足を動かした。

もう体力は底を尽いている。

何時倒れてもおかしくないほどに疲労困憊している経友の身体であつたが、それでもまぶたに浮かぶ松寿の姿を心の頼みとし、魂を削りながら奥へと進んでいった。

硬い地面を必死に踏みしめ、凍えるような空気の中で懸命に心を奮い起こす。

全ては松寿のためだ。

見返りを求めているわけではない。

ただ、松寿の悲しむ顔が見たくない　その一心で、暗闇の中をあがき続けている。

「無事でさえあつてくれれば良い」

息も絶え絶えになりながら、経友は松寿の無事を切に願った。

そして、その願いはようやく実を結ぶ。

「あっ……」

経友の顔が、見る間に喜びと安堵でいっぱいに染まっていく。

洞窟の最奥部……吹けば消し飛ぶような小さな灯りの下に、猿轡をかまされた松寿は横たわっていた。

春を待つ（二）

三、

「んう……」

背中越しに松寿の息遣いが聞こえてくる。どうやら意識を取り戻したようだ。

「ととと」

不意に平衡感覚を失って、軽く前につんのめる。彼女が起き上がった拍子に体勢が崩れてしまったのだ。

経友は松寿がずり落ちないように、軽く身体を揺すって再び彼女を背負い直した。

その振動に目が覚めたのか、松寿の寝ぼけ声がしつかりとしたものへと変わっていく。

「お、気がついたか」

「千……ちゃん……？」

松寿の声に、経友はちらりと後ろを振り向いた。

何が何だか分からないといった顔をしている。

普段ならば経友などよりずっと判断力に長けている彼女であったが、今回ばかりはどうにも上手く状況が飲み込めないらしい。

大きく見開かれた瞳は驚きでいっぱいになり満たされており、理解などという単語はどこか遠くへ飛び去ってしまったようであった。

そんな彼女の様子を見て、経友の頬はひとりでに緩んでいく。

まるで幽霊にでも出くわしたような松寿の表情が、おかしくて仕方がない。

自分は幽霊でもないし、幻でもない。現実にごうしてお前を助けに来たんだ　そう言った思いを込めて、経友は短く返事をした。

「あいよ」

驚愕は、すぐに歓喜によって塗り替えられていった。

「あっ……ああっ……千ちゃん……千ちゃんっ……千ちゃんッ！」

何度も経友の名が呼ばれ、彼女の細い両腕が背中にひっしと抱きついてくる。

「ちよっ……痛えって！ こちとら怪我人なんだっ！」

「え、あっ……」

全身を走る鈍い痛みを経友が思わず顔を歪めると、それに気づいた松寿の顔色が瞬く間に青ざめていった。

彼女の痛ましげな視線が、傷だらけになった身体のあちらこちらに飛び火していく。

「ご、ごめんっ……すぐに降りるね」

すぐに状況を察した彼女は、すぐに経友の背から降りようとした。辛そうに胸をぎゅっと押さえながら、心痛でどうにかなりそうなくらい顔をくしゃくしゃにしている。

経友は、そうした彼女の優しさに今までの自分の頑張りが全て報われたような満足感を覚えた。

「……いや、良いよ。お前だってすぐには動けないだろうしな」

慌てる松寿に動かないよう言い聞かせ、すぐに経友は前に向き直って話を切り上げた。

「でもっ……」

「良いから」

尚ももぞもぞと抵抗する彼女に強い口調で返事をする。

彼女は不満げな声を上げながら、不承不承といった具合ではあったが、それでも居心地悪そうに経友の背中におさまってくれた。

（案外すんなりと受け入れてもらえたな）

経友はほっと息をついて安堵の表情を浮かべる。

松寿は元々感情移入しやすい性分だ。

満身創痍の経友を見て、静かに身を預けてくれるとはとても思えなかった。

（いつまでも駄々をこねられたらと心配していたんだけどな。もしかしたら、思ったよりも疲労が激しいのか？）

不安を隠せずに、後ろをちらりと覗き見る。

何せ、彼女は洞穴の中に数日間も縛られた状態で押し込められていたのだ。

果たして年端もいかない少女が、そんな状態に陥って元気でいられるものだろうか。

正直、まともに動ける状態であるとは思えなかった。

「……動けるようになったら、すぐにでも降りるからね」

経友の視界の片隅で、松寿は口をきゅっと結んで不貞腐れていた。……どうやら大事無いようだ。

経友は内心、彼女の強情ぶりに少し呆れながらも、幼馴染の変わらない様子に改めてほっと胸を撫で下ろした。

改めて前に向き直る。

ようやく自分の手の届くところにまで取り戻すことのできた彼女は、概ね五体満足とっていいようであった。

彼女の身体にはさしたる外傷も見受けられず、特に乱暴をされた形跡も見当たらない。

一時はどうなることかと不安に押し潰されそうであっただけに、これには経友も痞えが外れたように気が楽になった。

こうして再び彼女の顔を見られた幸運に、深く感謝せずにはいられない。

……とは言え、口からついて出てくる言葉は、経友の心情とは多少食い違ったものであった。

「全く鈍臭いから捕まるんだからな。余計な気を回す前に、お前もちょっとは気をつけろよっ」

と、口を尖らせて不満げに毒づく。

「あう……」

しゅんとした声を背に受ける。振り返らずとも松寿の焦りを容易に感じ取ることができた。

（うん、これだな。からかったり、たまに助けてやったり……それで、松寿がころころと表情を変えていく。俺たちの関係はやっぱりこうでなくちゃ……）

と、思わずほくそ笑む。

自分が命を賭けて取り戻そうとしたものは、十分にその価値があるのだと言いきれる瞬間であった。

「ぐすっ……」

どんな返しを投げかけてくれるのかと期待していたのだが、その期待に反して、松寿からの返事はなかった。

平常ならば、このまま馴染みのやりとりが交わされるはずであっただけに、経友は当てが外れてうるたえてしまう。

「あっ」

急に経友の中にむくむくと罪悪感が芽生え始めた。

今まで元の鞘に収まった居心地というものを堪能していたという衝動の赴くままに言葉を投げかけていたが、よくよく考えれば今回は別に彼女の手落ちなど何処にもありはしない。

弱り目にたたり目な仕打ちを受けて、いつも通りに返せという方が無茶であったのだ。

「……まあ、もう済んだことだからいいんだけどなっ」

慌てて経友は言葉を補おうとする。

素直にごめんと言いたいのが、その一言が上手く表に出てきてくれない。

気まずい空気が、二人の間を流れた。

自然と口が重くなり、鼻の鳴き声と、草を踏みしめる音だけが延々と辺りをこだまする。

何度も謝罪の言葉を口に出そうとするも、喉の奥につかえては押し戻されてしまう。

そうして、ようやく口からついて出た謝罪の言葉は、ひどく不恰好なものであった。

「じ……ごめん」

経友の言葉に、松寿は小さく呟いた。

「うっん」

再び沈黙が訪れる。

経友は妙に落ち着かない様子で、松寿から話題が持ちかけられるのを待ち続けた。

「でも……やっぱり来てくれたんだね」

「ん、驚いたか？」

沈黙が訪れてから、半刻ほど経っただろうか。

ようやく差し伸べられた救いの手に、経友は嬉々として後ろを振り返った。

「ううん」

松寿はにっこりと微笑むと、意外なことに嬉しそうな表情でかぶりを振った。

彼女のまつすぐな瞳が経友に向けられる。

それは、まるで経友の心を射抜く矢文のように雄弁に感じられた。「全然驚かないよ。だって、絶対来てくれるって思ってた」

松寿はそう答えると、そのまま経友の背中にこつんと額をくつつけてきた。

幼い頃から続いている、いつもどおりの彼女の仕草だ。

彼女の気持ちが額を通じて伝わってくるような錯覚を覚え、経友は決まり悪そうに唇を噛んだ。

ぶいと顔を前に向けて不機嫌をあらわにして俯く。

彼女からひしひしと伝わってくる感情は、とてもひたむきな親愛の情で占められていた。

無心の信頼は武門の誉れ。いつもならば、鼻を高くして誇っているところであったが、今回ばかりは正直、彼女の信頼を素直に受け取ることはいできない。

「お前を助けることができたのは、たまたま運がよかつただけだよ」豊国たちが小倉山へ向かって傷ついた経友を運んでくれなければ、今頃経友は命を散らしていたことだろう。

山中に落ちていた椿の髪留めを見つけることができなければ、こうして松寿との再会は望めなかったに違いない。

これらは万に一つの幸運を拾っただけに過ぎない。

いわば、いくつもの奇跡が重なった上での成功だと言えよう。

これを自身の功績であると胸を張れるほど、経友は傲慢ではなかった。

「違うよ。千ちゃんじゃなきゃ……千ちゃんだからこそ、私の落とした目印に気づいてくれると思ってた。私、自信あったんだ」

「目印？」

経友が怪訝そうな表情を浮かべると、松寿はまるで悪戯が成功した子供のように口元をほころばせた。

「うん、千ちゃんがくれたあの髪留めだよ」

「へ……あれ松寿がやったのかッ？」

彼女の言葉に経友は思わず言葉を失った。

松寿の言葉を額面どおりに受け取るならば、救援を呼ぶための狼煙として、白い椿の髪留めを山頂の草むらに敢えて潜ませたことになる。

普通に考えれば、森の中で花を目印にするなどあまりに無謀な試みだ。見つけられるわけがない。

だから、経友は反射的に彼女の言葉を否定しようとしたが、

「あんな目印、見つけられるわけ……」

反論の呟きはかすれるように小さくなっていき、最後まで続けられることは無かった。

よくよく考えてみれば、現実問題として経友は髪留めを見つけることができたのだ。

頭の大部分ではありえないと考えつつも、経友には彼女の言葉をただの偶然と切り捨てることはできなかった。

「何年も一緒に遊んできたんだもの。千ちゃんが探しものをする時に、何処を見るか……どんな風に探すか……そんなことも分からないようにじゃ、幼馴染とは言えないよ」

「松寿……」

「このままだと二度と会えなくなっちゃうかも知れないもの。一生懸命考えたんだよ？ 四郎君たちに見つかからないように、それでいて千ちゃんに私のことを見つけてもらうためには、何処にどういった目印を置けば良いのかって……」

彼女の語りに熱が籠り、徐々に声が大きくなっていく。

気がつけば、彼女の身体は小刻みに震えていた。

「だから絶対に……絶対に。絶対に見つけてくれるって思ってたッ……」

と、自分に言い聞かせるように何度も繰り返す。

松寿の眼からは、はらはらと涙がこぼれ出していた。

一度決壊した衝動は一向に止まる気配を見せず、

「でも、でもっ……怖かった……怖かったの……本当に怖かったのッ……！」

あふれ出る涙を拭いながら、松寿は嗚咽を漏らした。

「そっか」

経友は合点がいったように一人頷く。

目の前の闇を払うために、必死で考え、考え抜いて最善を尽くしても、拭いきれぬ不安はどうしようもない。

今、彼女からあふれ出している感情は、まさしく経友自身も感じていたものであった。

「じゃあ、偶然じゃないな」

自然と語り口が優しくなっていくのを自覚する。

経友の一言に、松寿の震えがぴたりと止まった。

そうなのだ。

闇の中から抜け出そうと懸命に足掻いているのは一人だけではなかった。

主のいない中、何とか時間を稼ごうとした式部たち。

命を賭けて松寿を探し続けた経友。

……そして、松寿自身の努力。

皆が、眼前に迫り来る悲しい運命に抗おうと必死に奮闘してきた。今回の結果は、そうしたいくつもの努力の上に成り立っている。ならば、これを偶然と呼べるはずはなかった。

「皆頑張ったんだ。当然の結果って奴だな」

「千ちゃん……」

「帰ったら、感状でもくれよ。助けてくれてありがとうって。基爺たちに見せびらかさなきゃな」

と、軽口を叩いて小さく笑う。

経友は背中に温もりを感じながら、彼女が落ち着くまで黙々と歩き続けた。

「……こうしていると、前の時を思い出すね」

「あの時かあ」

松寿の問いかけに、経友は記憶を思い起こすように夜空を見上げた。

前の時、とは井上某に城を追い出された時のことを指しているのだろう。

あの日、いつものように猿掛へ遊びに出向いた経友は、松寿が城を追い出されたと聞いて飛び上がるほどに驚いた。

城代をしている井上に仔細を訊ねても、『無体をなさったため、折檻にござる』と取り合ってくれない。

業を煮やした経友は、ひたすらに領内を駆けずり回って松寿を探したのであった。

「あの時はお杉小母さんには随分と世話になったなあ」

「ふふ、小母さんなんて言ってるの聞かれたら、怒られちゃうよ」
松寿が愉快そうに身体を揺する。

お杉小母さんとは、松寿の父である毛利弘元の側室であった女性のことだ。

気風の良きじぶい健康的な美人である。

若くして夫を亡くしたため、言い寄る男も多かったそうだが、彼女は夫に操を立ててか、決して再婚しようとしなかった。

おかげで今でも未亡人を続けており、日進月歩で増えていく小じわと格闘する日々を送っている。

幼い頃に両親を失った松寿にとって、何かと世話を焼きたがるお杉は、まさに母親代わりの存在であった。

件の失踪騒ぎの時も、経友に的確な助言をして導いてくれたのは彼女だったのである。

「あの時も千ちゃんが見つけてくれたよね」

「おいおい、あれは全面的に小母さんの手柄だ。俺がどうこうしたわけじゃないぞ」

経友が片眉を持ち上げて否定すると、松寿はこくりと一度だけ頷いた。

そして、急に改まったかと思えば、透き通った声でぼつりぼつりと呟き始める。

「勿論、御養母様への感謝を忘れたわけじゃないよ？ その時のことだけじゃなく、色んな御恩をあの人からは受けている。一生かかっても返せないくらい……。でも、あの時……。私は千ちゃんが来てくれたことがすつごく嬉しかったの。ああ、この人は私が困っている時はいつだって助けに来てくれるんだなって……。そう思ったんだ」

彼女の言葉にはひたむきな想いが一心に込められていた。

幼い頃より向けられてきた『親愛の情』とは明確に違う何かを感じ、経友は若干の戸惑いを覚え、振り返る。

二人の視線が交錯した。

その瞬間、経友は彼女と自分の関係が以前と異なるものへと変化したことを悟る。

それが何なのかは分からない。だが、無性に恥ずかしく思えた。

「いつ、いきなり真面目な表情すんなよっ」

慌てて顔を背ける。

感情が昂ぶり、耳まで真っ赤になっていくのを抑えられない。

松寿が無言を保ったまま、何の反応も返してこないことも相まって、気まずいことこの上なかった。

何時にも増して柗の香りが強く鼻をついてくる。

近い。

改めて自分と松寿が肌の触れ合う距離にいることを自覚させられた。

(勘弁してくれ……こういうのは苦手なんだ。何か他に話題は……)

全身で照れくさを表現しながら、経友はこの居たたまれない空気を何とかしようと頭を働かせる。

ようやく思いついた打開策は、かねてから経友が疑問に思っていたものであった。

「あつ、そ、そうだ。何で柗なんだ？」

「え？」

きよとんとする松寿。

突然のことに、その意図するところが読めないようだ。

経友は、自身の中にある疑問を上手く形にすることができず、焦れつつそくに頭を掻いた。

「だから……それだよ。その香だよ。柗の。いつもそれじゃないか」

「良い匂いだと思うからなんだけれども……千ちゃんは嫌い？」

と、松寿に不思議そうに問い返され、経友は語る言葉を失った。

経友自身、柗の香りが嫌いなわけではない。むしろ、良い匂いだと思う。

松寿にも良く似合っていると思う。

いや、幼い頃から嗅ぎ続けてきたので、松寿以外からこの匂いがするなど考えられないというべきか。

「嫌いとかそういうんじゃないんだよな。良い匂いだとは思つ。そうじゃなくて……何というか……」

四苦八苦しながら、更に考える。

良く似合っているのは確かだ。むしろ、良く似合っているからこそ、何かが引つかかった。

幼い頃から彼女が好むこの甘い香りは、彼女に似合うからこそ、何か気に入らなかつたのだ。

そこまで考え、ようやく経友の中にあるあやふやな疑問が一つの形にまとまっていった。

「そうだ。それ、寂しくないか？」

「寂しい……？」

首を傾げながら鸚鵡返しに呟く松寿に対して、経友はこくりと頷き、更に続ける。

「ああ。柗って冬の花だろ。それに棘々しくて迂闊に触れたものじゃない。それって、すごく寂しく感じないか？」

柗の名は、傷が疼つらぐこと。つまり傷が痛むことにちなんでつけられたものだ。

『痛み』が名前の由来などという、とても悲しい花の香りを、彼女が好んでいること自体あまり好きになれなかった。

幼い頃から肉親との離別を経験し、家中においても、あまり恵まれた立場にいるとはいえなかつた松寿。

そんな彼女が『痛み』の香りを身に纏うなど、あんまりな話ではないか。

「そっか」

経友の問いかけをしばし反芻した後、松寿はにこつと微笑んだ。

「でも、私の名前である松寿も冬の名前だよ？」

「あつ、そっぴやそっぴや……いやっ、うーん、そうじゃなくて」

『冬』が蛇足であったのかもしれない。そうではなくて、『痛み』が思い起こされてしまうことが気に入らないのだ。

経友が反論しようとする、それを遮るように今度は逆に松寿から質問を受けた。

「千ちゃん、『歳寒の三友』って知ってる？」

「……？ ああ、知ってるよ。松竹梅のことだろ？」

唐国では松竹梅を『歳寒の三友』と呼んでいると、以前基爺に聞いたことがあった。

だが、それと柗は何の関係もない。

経友は彼女の意図が良く分からず、何だかはぐらかされたような気がして眉間のしわを深めた。

「松はね。寒さの中でも決して色あせたりせずに、じっと春を待つんだよ」

「春を？」

静かに松寿が是と頷く。

「冬が過ぎれば春が来る。どんなに厳しい寒さでも、頑張つて耐え忍べば……春は絶対にやつて来るんだよ」

耐えていれば、春が来る。

彼女のその一言は、意外なほど経友の心を大きく揺さぶった。

松寿は自分の境遇を憂えていない。むしろ素直に受け入れた上で、いつか自分にも春が訪れるまで必死に耐え忍んでいる。そう思えたのだ。

もし自分が彼女の立場にあつたとしても、同じような態度を取れるだろうか。

恐らく無理だろう。自身の境遇を恨み、何処かで必ず歪んでしまつて違いない。

このように考えられるのは、彼女自身の持つ強さの賜物なのだ。

「強いんだな」

無意識に思考が言葉になつて出ていった。

それは松寿に向けられた言葉であつたのだが、

「うん、強いよね。だから、私は冬に生きる全ての物が大好きなんだ」

彼女の発する答えは何処かずれていて、経友は拍子抜けする羽目になつた。

（まあ、これが松寿だよな）

と、経友は口をあんぐりとさせて呆れ返りながらも、驚きと納得

を同居させたような表情で笑顔を浮かべる。

つられて彼女も、朗らかに微笑んだ。

口惜しい話ではあるが、彼女の笑顔は息を呑むほどに可愛らしかった。

先ほどの言葉が誰に向けたものであるかなど、どうでもいいと思えるようになるほどに。

「春かあ」

夜空を見上げて、ぽつりと呟く。

木々の隙間から見え隠れする星たちは、己が存在を誇示せんばかりに瞬いていた。

戦乱の世の中には似つかわしくないほど綺麗な星空であった。

戦国の世。親兄弟ですら信じられない、血で血を洗う下克上の時代。

仮に四郎との争いや、尼子の介入を退けることができたとしても、彼女の苦境が終ることはないだろう。

乱世の災禍は、これからも彼女の運命を理不尽に弄んでいくに違いない。あるまい。

ならば、彼女にとっての春はいつ訪れるのか。

彼女が何事にも怯えずに心安らかにいられる日は、果たしてやってくるのか。

それを考えずにはいられなかった。

心の奥底で、小さくも根強い怒りの灯火がぽつ々と燃え上がる。

自然と歩みが乱雑なものへと変わっていった。

そうした経友の心中が伝わったのだろうか。

彼女は一瞬訝しげな表情をした後、ぼそりと小さく呟いた。

「春は……もう傍にいてくれるよ……？」

「へっ？」

思わず聞き返してしまう。

顔を真っ赤に紅潮させた彼女は、しどろもどろになりながら更に言葉を搾り出していく。

「だ、だから……せ、千ちゃんが……春なの……」

彼女の声は消え入りそうなほど小さなものであったが、その一言を経友は生涯忘れることはないだろう。

『松寿にとつての春は自分である』

今までの疲労も、怪我の痛みすら何処かへと消え失せてしまった心地がした。

まるで自分の身体が、まったく別のものへと生まれ変わったような錯覚を覚える。

「せ、千ちゃん……？」

気がつく、経友は悲しいわけでもないのに涙を流していた。

彼女を取り巻く乱世の闇は掬いきれぬほどに深く、払い切れぬほどに分厚い。

それを斬り開き、辺りを光明で照らすなど、凡人にでき得る所業ではない。

英雄たる基爺ならできたのかもしれない。

太陽の香りのする祖父の笑顔を思い出し、自分と比較してみる。

英雄ですらない自分に、果たして彼女の春となれる資格があるのだろうか。

(いや、違うな)

できるできないの話ではない。

彼女が春だと言ってくれた以上、自分はその役割を全うせねばならないのだ。

(第一……もうやってきている)

内気な松寿が尼子の縁談を断る際に、自分に何と問いかけたか。

何故松寿は、元綱との家督争いを激化させてまで、『元就』という名を得て当主として生きることを決めたのか。

彼女の判断を支える根本の部分に、経友の存在はあったのだ。

そうした事実から目をそむけるほど、自分は無責任な男ではない。

「俺は春なんだな」

確認するように、何度も何度も繰り返す。

言葉を発するたびに、経友の身体に活力が宿っていくようであった。

「ど、どうしたの……？ 千ちゃん」

松寿が恐る恐る話しかけてくる。

自分の言葉で、経友がこれほどの反応を見せるとは思っても見なかったのだろう。

何と声をかけてよいものか決めかねている風であった。

「何でもねえよ」

晴れやかな顔で経友は答える。

何でもない。そう、別に何が変わるといっわけでもないのだ。

元から、経友は彼女が困った時にはいつだって全力で助けようとしてきた。

それは『幼馴染』としての義務感で……それが『松寿の春』としての使命感へと変わるだけなのだ。

だから、自分の中に生まれ出でた大きな『道』について、殊更に騒ぎ立てる気も起こらなかった。

「そうだな、強いて言うなら……ちょっと、お前みたいに名前でも変えてみようかになって気分になっただけだ」

様々な思惑（一）

一、

月明かりが群雲に覆われてにわかには驚りを見せる。

経友は険しい眼差しを峠の向こうへと投げかけた。

あの峠を越えることができれば、豊国たちの待つ場所まで辿りつくことができる。

だと言つのに、遅々として進まない歩みと、一向に目的地へと近づけない歯がゆさに強く歯噛みした。

（くそ、あと少しだというのにッ……）

忌々しげに視線を近傍の林へと落とす。

明かりの乏しい闇夜の山道。そのあちらこちらで、ゆらゆらと数多の人影がひしめいていた。

それらの動きに乱れはない。実に統制の取れた動きだ。まるで飢えた狼を思わせる。

「……松寿、伏せるぞ。近い」

経友の忍び声に松寿が小さく頷き、息を潜めて身を屈めた。

茂みを隔てて半歩先を、何者かが通り過ぎていく。

じやりじやりと落ち葉を踏み鳴らす音が、経友の心をいたずらにざわめかせる。

（追っ手か……？）

気配を殺して、様子を窺う。

その身のこなしは、機敏そのもので隙がない。恐らく彼らが厳しい訓練を受けた兵士であろうことは容易に想像できた。

全員が深めの笠をかぶっており、影の差した暗い面相の奥で、ぎらりと瞳を輝かせている。

その煌きたるや、まるで身の内に隠し切れぬ殺意が、止め処なくあふれ出ているようであった。

「、情報では こちら」

経友の耳が彼らの会話を断片的に拾い取った。何者かを追いかけている最中であるように聞こえる。

こんな夜更けの山道にいる者など限られている。恐らく山狩りの獲物は、経友たちであろう。

とすれば、彼らは元綱の手の者だろうか。

成る程、このまま松寿が郡山へと無事に生還し、式部たちと合流してしまえば、相合勢の目論見はもろくも崩れ去ってしまうに違いない。

ならば、血眼になって追っ手を差し向けるのも、理解できる話ではあった。

経友がそう結論付けようとしていた矢先、松寿が予想に反した見解を口にする。

「千ちゃん……あの人たち、安芸の民じゃないよ」

緊張に満ちた声色で松寿が耳打ちをしてくる。

「何だつて……？」

眉を寄せ、再び彼らの言葉に耳を傾ける。

言われてみれば、確かに安芸の訛りではない。

だとすれば、一体何処の人間なのだろうか。経友の脳裏をいくつかの国名がくるくると去来していく。

「そうか、あれは」

「うん……あれは出雲訛りだと思う」

しゃがみこんで様子を窺っていた松寿が、くぐもった声でそう答える。

「くそ、最悪だッ」

まさかの凶報に、経友は地面を殴りつけたい衝動に駆られた。

恐らく彼らは松寿を引き渡すために元綱が呼び寄せた連中である。

洞窟へと到着した彼らは、相合勢の骸を見て松寿の逃亡を察し、追跡を開始したのだ。

そう考えると、彼らに先んじて松寿を奪還できた分、これは間一

髪の幸運であつたと言えるのかもしれない。

だが、猿掛からの脱出がより困難になつたことも確かであつた。

「……真つ直ぐに帰宅とはいかないか」

苦々しげにそう言つと、経友は松寿の手を引いてきびすを返した。音を立てぬよう、細心の注意を払つて茂みの中をゆっくりと歩く。あと少しというところで回り道を余儀なくされたことは腹立たしかつたが、それでも手詰まりというわけではない。

何せ猿掛付近の山々は、幼い頃から遊び場にしてきた我が庭とも言えるべき場所である。

巨木のうろから、誰も知らない獣道。

一見降りられないような沢へと降りることのできるツタの道まで、経友の脳裏には鮮明に焼きついていた。

(易々と捕まるものかよ)

この国に不案内な他国の人間なんぞに遅れをとるつもりはない。

経友は吐き捨てるように内心呟いた。

細い獣道を通り、木々で作られた暗い緑の天幕を潜り抜ける。

密集した木々は、追つ手から身を隠すのに好都合であつた。

何としてでも郡山へ松寿を届けねばならない

樹間に密生する下草に夜露のひんやりとした冷たさを感じながら、

経友たちは駆け足で麓を目指した。

包囲網からの脱出を試みてより、一刻ほど過ぎた頃。

息を切らして駆け続ける経友の耳朶を、流れ落ちる水音と湿り気を含んだ風がかすかに撫でていった。

二人は急いでいた歩みを一旦止め、音の出所へと耳を傾ける。

そう遠くないところに沢がある。

(どうする、沢を下りるべきか……?)

経友は記憶を辿りながら、逡巡した。

この先にあるのは、何度も魚釣りで訪れたことがある沢だ。

急勾配になっており、沢の近くまで下りるには一工夫がいる。そのため、物好きな釣り人が稀に到来するくらいで、里の人間は滅多に来ることはない。一旦下りることさえできれば、中々の釣果が期待できる場所であったと記憶している。

沢を下っていけば麓までは一本道になっている。

麓まで下りれば、人家があるから馬を借りれば郡山までさほど時間がかからない。

日中ならば、下山経路として十分に候補に入れてよい道であった。

「松寿……」

「うん、わかつてる」

経友の声に松寿が頷く。

本来、足元のおぼつかない真夜中に沢下りをするなど、危険極まりない愚行である。

もし、濡れた岩や崩れやすい斜面から足を踏み外して、沢へと落ちってしまったら命の保証はない。

「行こうよ、千ちゃん」

だが、だからこそ敢えて沢を下ることに意味があった。

恐らく追っ手は山道を中心に、麓へと段々と下りるように搜索をしているはずだ。

沢の近辺は、その危険性故に追っ手も近づかないだろう。

自然の脅威と、人の手による凶刃、そのどちらを避けるか

それは、なけなしの取捨選択であった。

「急ごう」

経友は松寿の手を取り、再び獣道を駆け出した。

鬱蒼とした木々が視界の端を流れていく。

やがて周囲にあつた緑がまばらになっていき、眼下に大きな滝つぼが姿を現した。

辺りに漂うひんやりとした空気の中、経友が足元を見下ろす。

「仕方ないとは言え、ここを下るのか……」

うんざりとした表情で経友が毒づいた。

崖と表現して差し支えない急勾配の下で、水しぶきが盛大に飛び散っている。

月に照らされた水面のあちらこちらには鋭角的な岩が飛び出しており、その淵では急流が大きな白い渦を為していた。

崖の上から、沢の傍まで大体十間じゅうけん（約18メートル）ほどある。

この急勾配を下るのは、慣れた者でも相当難しいものがあるのだ。いつもならば、さして困難とも思わないが、今回ばかりは松寿に加えて自分の怪我がある。

いつも以上に慎重にならねばならないだろう。

経友はごくりと唾を飲み込んだ。

「気をつけるよ」

松寿に注意を促しながら、掴まることのできるツタを探りながら絶壁を降下していく。

体重をかけすぎれば崩れ落ちてしまいそうな足元が、ひどく心もとない。

時折、松寿がずり落ちないように足場をしつかり踏み固める必要があった。

ツタが経友たちの体重を受けて、ぎりぎり悲鳴を上げる。

手のひらから汗が滲み出た。冷や汗に類するものである。

経友は逸る気持を必死に抑えて、ゆっくり着実に進んでいった。

「松寿、大丈夫か？」

「……うん、これ、くらいならっ……」

そう応える松寿の表情は、苦悶で青ざめていた。

松寿は元々身体を動かすことが得意でない。

経友を心配させまいと強がっているのが、ありありと見て取れた。ちらりと地面へ目を向ける。

随分と下まで下りてきた。後、もう二間ほど降りることができれば、大きな岩場へと足をつけることができるだろう。

さあ、あともう一息だ。

そう意気込んで、足を伸ばそうとしたその時
そう遠くない場所で、激しい剣戟の音が鳴り響いた。

「……刀の、音ッ？」

松寿が驚きの声をあげる。

山中をこだまする甲高い金属音は断続的に続いており、それが両者の力が拮抗していることを教えてくれた。

経友は困惑の表情を浮かべる。現状に理解が追いついてくれそうになかった。

(一体誰と誰が戦っている……?)

再び刀と刀がぶつかりあう音が木々をざわめかせる。

経友にはその火花が飛び散る様までも容易に想像することができた。

しかし、その刀を持つ者たちの姿かたちを思い浮かべることができない。全く想像すらつかなかった。

片方は山狩りをしている連中で間違いないだろう。

けれども、もう片方に推定できる集団にはとんと心当たりがない。

出雲の あの尼子の兵に戦を仕掛けるような無謀な輩が、この安芸にいるとは思えなかった。

と、不意に音が鳴り止んだ。

戦闘が終わったのだろうか。

経友がそう口に出そうとした瞬間、今度は頭上から大量の足音が聞こえてきた。

乱暴に下草を踏み抜いていく集団が、まっすぐこちらへと向かっている。

(まずいッ)

慌てて周囲を見回し、死角となるべき場所を探す。

頻りに崖崩れを起こしているであろう急勾配の途中には、身を隠せるような茂みは生えていない。

後もう少し下ることができれば、岩場の物陰に隠れることもできるかもしれないのだが、何にせよ今はとにかく急ぐしかなかった。

「松寿、急ごうッ……！」

「う、うんっ……」

経友は飛び上がりそうになる心臓を押さえつけながら、松寿に小声で呼びかける。

だが、ただで慣れない運動をしている上に、急な事態に対応できるはずがない。

松寿の困惑は更に深まるばかりで、

「あっ……」

ついには足を踏み外し、ツタから手を離してしまふ。

岩場目掛けて松寿が滑り落ちていく。

経友の顔から血の気が失せていった。

松寿の身体を繋ぎとめるべく、無我夢中で手を伸ばす。

「松寿ッ……！」

ずしつと、彼女の体重を左手に感じる。

奇跡的に、経友の手は松寿の腕を掴むことに成功した。

自らの手に感じる命の重み。

二人分の体重を受けてツタを持つ手が引き裂かれるように痛んだが、それでも経友は彼女を決して手放すまいと、彼女の細い腕を強く握った。

二人の身体が、宙吊りに揺れる。

額からぼたりと汗が流れ落ちていった。

辛うじて、最悪の結果だけは避けることができた。だが、それでも危機的な状況であることに変わりはない。

現在二人は宙吊りの状態で、手にしているツタに全体重を預けている。

松寿を助けた拍子に、その体勢を大きく崩してしまったのだ。

早急に立て直したい所だが、それには崖に足をつけて身体を安定させる必要がある。

足を壁につけてしまえば、嫌が応にも物音が生じてしまうだろう。経友は痛む腕のことを極力考えないようにしながら、真上を見上げて様子を窺った。

足音はすでに途絶えている。

山狩りの集団は経友たちの真上で立ち止まり、何事かを話し合っているようであった。

声と気配は感ずれども、彼らの姿は視界に映らない。

どうやら、上手い具合に連中のいる場所からは死角になっているらしい。

不幸中の幸いと言える。経友は安堵の吐息を吐いた。

(けど、無闇に物音は立てられないか)

経友は覚悟を決めて、このまましばらく息を潜めてやり過ごすことにした。

(頼むから……早く、立ち去ってくれ)

心中で切に祈る。

痛む腕は耐えれば良い。それよりも心配なのは、経友が必死にしがみついているツタの方であった。

今まで以上の負荷を受けたツタは、ぎちぎちと徐々に引きちぎれて行く。

彼らがこの場から立ち去るまで、果たしてツタが耐えられるかどうか。

云わば、これは時間との勝負であった。

(頼むッ！)

ツタが千切れぬよう、何度も願いを込める。

刹那の一瞬が、まるで永劫のように感じられた。

心臓の鼓動がたつぷりと三十回は脈打った。

まだ立ち去ろうとしてくれない。

更に三十回。

未だ、何かを探している。
心臓の鼓動が速くなっていく。
まだ動かない。

(まだかッ！)

そんな経友の焦りが災いしたのか
かすかに触れた崖の土壁から、小さな土の破片が崩れ落ちた。
経友の表情が絶望に染まる。

転がり落ちていく破片を凝視しながら、経友はせめて岩場に衝突
した際に生じる音が小さなものであるようにと祈った。

破片が岩場を目指して落ちていき、そして地面にぶつかり盛大に
破碎する。

音は 響かなかった。

「ッ！」

再び遠くで聞こえる剣戟の音。

あの甲高い金属音が、土くれの破碎音をかき消してくれたのだ。
山狩りの集団から発せられる殺気が一段と濃密なものに変わる。

彼らはこちらに気づく様子もなく、音のする方向へと山野を駆け
ていった。

体勢を立て直した経友たちは、新手がやってこない内にと急いで
下りていく。

二人の両足が地面に着いた途端、経友は腰が抜けそうになりなが
ら、長いため息をついた。

「……心臓に悪いだろうが」

魂が抜け落ちるほど長いため息が、急流にかき消されていく。

この調子ならば、少々物音を立てたところで崖の上までは届かな
いだろう。

経友は川下へと視線を向けた。

山中に響き渡る剣戟の音など、理解の及ばないものは甚だ多いが、
ひとまず当面の危機は回避されたと言って良い。

ならば、郡山を目指すだけだ。

経友は松寿の手を引き、川下へと歩き出した。

様々な思惑（二）

二、

「ようやく来たか」

二人の行く手を野太い声が阻む。

雲間に浮かぶ弓張り月が、経友たちの前方を淡く照らし出した。

視線の先に、幾つもの死体が転がっている。

身に纏う装備から察するに、彼らは安芸の民ではないようだ。

周囲に飛び散った血飛沫は、まだ完全には乾ききっていないかった。

もしかしたら、戦闘が終わってからそう時が経っていないのかも知れない。

むせ返るような死臭に、経友は思わず顔を歪めた。

野太い声の主が、つまらなそうに鼻を鳴らす。

彼は数多の骸に囲まれていた。

真紅の射籠手に、がっしりとした体格。

一人の若武者が不機嫌そうな面構えで胡坐をかいている。

見間違えようがない。

眼前にいる大男は安芸武田家の武将、山県重房であった。

「重房……」

重房は不貞腐れた様子で、こちらを睨み付けていた。

身体のうちらこちらに散在する刀傷から血が滲み出ている。

恐らく、周囲に転がっている集団と死闘を繰り広げた後なのだろう。

よくよく見れば、重房は肩で息をついていた。

「どうした、吉川の。大分痛めつけられたようじゃないか、え？」

重房が小馬鹿にしたような口調で笑った。

経友はその声を受けて、松寿をかばうように前に出る。

重房の発する眼差しは険しいことこの上なかったが、それでも殺気の類は感じられなかった。

とは言え、武田の被官である彼がここで待ち受けていたと言うことは、武田家が元綱方に……いや、尼子方についたということは間違いない。

(ならば、松寿に対する害意は明らかか……)

経友は覚悟を決めて、狐ヶ崎を重房に向けた。

蒼い刀身が月明かりを受けて、ぎらりと煌く。

「ふん、この前とは打って変わって血気盛んだな。やはり、色に狂ったか」

頬杖を突きながら投げかける重房の口調は、依然険しい。

「何だと？」

「よつと」

重房が難儀そうに立ち上がる。

彼の足元は若干ふらついており、先の戦いが激戦であったことを窺い知ることができた。

「俺の行動を安易だと諫めておきながら、貴様自身がこの体たらくだ。色に狂った、としか評しようがあるまい？」

彼の嘲りを受けて、経友の脳裏にここ数日間の足跡が去来していく。

今、ここに至るまでに経友が歩んできた道筋は、お世辞にも褒められたものではなかった。

いくら仲の良い幼馴染のためとは言え、家を捨て、命をも投げ打って難題の解決に奔走するなど、正気の沙汰とはとても思えない。

以前、重房の行動を『考えなし』と非難した人間が起こした行動にしては、あまりにも無責任が過ぎると言うものであった。

前向きに評するにしても無謀というより他に無く、色狂いと難じられたところで、むしろ当然の帰結と言えるだろう。

だが……それでも、経友は重房の言葉を否定した。

「いいや、違うね」

松寿に対して欠片ほども好意がない……と言ってしまえば嘘になる。

だが、それでも経友の胸中には、これを期に意中の女性と添い遂げたいだとか、自分を良く見せたいなどといった打算的な疚しい感情は存在していなかった。

ただ、松寿が助けを求めているから

手を差し伸べる資格を有していたのが、自分であったからこそ動いただけなのだ。

それ以外の感情を挟む余地など、経友にはなかった。

「ならば、貴様の目指している道は一体何だと言っんだ」

だから、このような重房の詰問に対し、経友は真っ直ぐと相手を見返してこう言った。

「松寿の春であること。これが俺の、武士としての本懐だ」と。

「千ちゃん……」

張り詰められた弓のようなびりびりとした空気が辺りを支配する。息をつくことすら許されない空間。

二人の顔を交互に見ながら、どうしたものかと悩んでいた松寿でさえも、呼吸をすることを忘れたように黙り込んでしまった。

にらみ合いが続く。

しばし経った後、険を深めた重房の視線が不意に地面へと向けられた。

それと共に、場の空気がつかえの外れた弦のように弛緩していく。

「本懐、か」

難しい顔のまま重房がぼつりと呟いた。

その声色は何故かとても寂しそうで、何処か苦悩を抱えているように聞こえた。

「俺はお前がうらやましいよ、千若……」

「重房」

山口に居た頃の、旧来の呼び方で呼びかけられて、経友は何事かとほんの少しの戸惑いを見せた。

体格に恵まれた彼の身体が小さく見える。

(こんな弱い姿を見せる奴じゃないのに……)

経友は、まさかの事態にかけるべき言葉を飲み込んだ。

山県重房。

いつも経友の元に争いごとの種を持ち込んでくる、まこと厄介な人間。

その気性は猛々しく、他人にへつらうことのない……とても誇り高い男。

そんな重房が、天敵ともいえる経友を前に、ここまで弱い姿を見せているのだ。

経友が驚くのも無理からぬことであつた。

「周りに転がつている木っ端兵士どもをしてみる」

「ん」

重房の伏目がちの視線が、辺りの骸へと向けられる。

経友は、彼の視線を追うようにして、数多に散らばつた死体へと注意を向けた。

「何処の手の者だと思つ？」

「何処の手の者つて……」

経友は考え込んだ。

安芸の者でないことは確かである。

はじめは出雲の兵かとも思つたが、すぐに山中で出会つた兵たちとは身なりが若干違つていることに気がついた。

中々答えに行き着かない経友を尻目に、松寿がおずおずと声をあげる。

「もしかして……大内の？」

その答えに、重房は是と頷いた。

「八本杉か、はたまた相良の頭でっかちか……詳しいことは分らんが、いずれにせよ大内の手の者に違いはない」

経友は重房の返事を聞き、胡乱な表情を浮かべた。

杉と相良、そのどちらも周防の大内家を支える将家の一つである。そのような名家の兵が、何故安芸の山中で暗躍していたのだろうか。

これが尼子ならば話は分かる。相合勢と繋がりがあるからだ。

(ならば、大内は……?)

次々と理解の外側に展開されていく事態に、経友の疑問は深まるばかりであった。

「お前は頭の回る時と回らない時の差が激しすぎるのが問題だな……」

経友の不理解を感じ取ったのか、重房はくたびれたような表情でため息をついた。

「あの……狙いはやっぱり……」

「そう、あんただよ。松寿姫。安芸における影響力の確保が奴らの狙いだ」

全く腹立たしい。重房は一言付け加えると、呆れたようにひらひらと手を振った。

「毛利家中の家督争い……相合元綱が勝つてしまえば、安芸国内における尼子家の影響力が強まってしまう。大内にとっては面白くないってことだろう」

怒りをあらわにしながら説明を続ける重房。

それを聞きながら、経友は驚きを隠せずにした。

縁談の誘いから始まった毛利家のお家騒動。

幼馴染を窮地に陥れた今回の騒動は、何とその後ろに大名たちの覇権争いを抱えていたのだ。

「俺たちの一挙一投足は、全て大国の権益に繋がっている。だから、あいつらは俺たちの動きに目を光らせている。俺たちがあいつらに不利益をもたらす行動を起こさないようにな。今だって……何処から俺たちのことを見張っているだろうよ」

重房の言葉に背筋の凍るものを感じ、経友は慌てて周囲を見回し

た。

深い暗闇が支配する猿掛の山中は、相も変わらず静寂そのものだ。自分たち以外の誰かが身を隠しているといった気配は感じられない。

しかし、それが余計に不気味でもあった。

「高々小娘一人の身柄を巡って、西国を二分する大勢力が睨み合う。全く、情けなくて涙が出るぜ」

重房が苦笑いを浮かべる。

自分よりも遙かに大きい存在に対してであっても、彼の無遠慮な態度は少しも収まることがない。

ぎろりと光るどんぐり眼に、大きな失望がちらついて見えた。

だが、そうした彼の不遜な態度も、じきに自嘲気味なため息に塗り替えられていく。

「……いや、奴らよりも俺の方が情けないか」

「重房……」

忌々しげな舌打ちと共に吐き捨てられる。

そして、重房の目がまっすぐと経友を見据えてきた。

「此度の騒動、武田は尼子に合力することに決まっつてな。松寿姫の確保に俺が駆りだされることになった」

経友は得心がいったように、成る程と呟いた。

武田と尼子は、反大内と言う一点において利害が一致している。

両家が何らかの盟約をすでに結んでいると言っつならば、盟友に対して与力することは極自然な流れだと言えるだろつ。

重房のような若手が単独で派遣されたのは、恐らく体面の問題だ。

盟友との信義を考えるならば、表立っつて相合派の支援を表明し、戦に介入してしまえば良い。

それができないのは、大内の動きを慎重に窺っつているが故。

そして、万が一松寿派が勝っつてしまっつた場合を視野に入れているためだろつ。

安芸国内に波風を立てぬ程度に支援を抑え、それでいて信義を疑

われぬ程度に優秀な人材を送らなければならぬとするならば、自然と支援の幅は狭まってくる。

今を時めく若手の一人たる重房の派遣は、まさに適材適所であると言えた。

「成る程、土地勘のない者よりよっぽど適役だな」

「当たり前だ。この俺以外に斯様な大役が務まるものか」

と、つまらんことを言うなと噛み付いてくる。

自分が選ばれたことに対して不満を抱いているわけではないようだ。

「ならば、何が不満なんだよ」

経友がそう問いかけると、重房は苛立たしげに頭を掻いた。

綺麗に剃られた重房の頭に、引つ掻き痕が赤く浮かび上がる。

「他国の奴に顎でこき使われると言つのが、どうにも我慢がならんのだッ」

重房が声を荒げる。

彼の巨体から吐き出される炎にも似た怒気に周りの空気がびりびりと震えた。

「御屋形様の命ならば、別段命を捨てたところで惜しくはない。惜しくはないのだが……」

それでも好かんものは好かんのだと、重房は辛そうに喉から言葉を搾り出す。

彼の肩は大きく震えており、その両拳は硬く握り締められていた。

「俺には政の才が無いから、こんな不満は筋違いかも知れん。だが、

それでも……御屋形様なら……御屋形様ならば、この安芸を誰にも媚びへつらうことのない立派な国にしてくれると信じていたのだ」

そう言い終えると、重房はひどく気落ちした様子で、がくりと肩を落とした。

重房の憐憫を誘う姿は、常ならば絶対に見ることができないものであっただけに、彼の失意がいかにほどのものか、経友には痛い程良く分かった。

「なあ、松寿姫」

「うん」

重房が俯いたまま松寿に語りかけた。

「どうやら、あんたはその千若に武士の本懐を授けたらしい。こ
こは一つ、俺の問いかけにも答えてはくれないか？」

「……分かった」

松寿がこくりと縦に頷く。

彼女の瞳には若干の不安が見え隠れしていたが、それでも馴染み
の知人のためにできる限りの助力をしてやりたいとおもったのだろ
う。

彼女の返事はとても早かった。

「あんた、この国のことをどう思う？ この国に住む、大国の顔色
を窺いながら、右往左往することしかできない俺たちをどう思う？
いつまで俺たちは俯いていなければならんだ……？」

面を上げて、力なく問いかけてくる。

重房の瞳は暗く淀んでおり、縋りつくものを捜し求めている風で
あった。

この国をどう思うか。いつまで自分たちは俯いていなければなら
ないのか。

経友も彼の問いかけを反芻するように、心の中で繰り返す。

とても難しい問題だ。

大内と尼子。西国を二分する大勢力の存在は、圧倒的なまでに他
者の追隨を許さない。

経済基盤、軍事力、外交能力……。

そのどれをとっても卓越しており、並みいる国人領主がどんなに
背伸びをしたところで、多少団結をしたところで対抗できるもので
ない。

安芸国内でも一、二を争う力を秘めている武田や小早川ですら、両家の顔色を窺う日々が続いているのだ。

他の国人たちが右往左往している現状は致し方ないものであると言えた。

経友がどう考えたところで、重房に満足のいく回答を与えられそうにはなかった。

自然と松寿へと視線が向けられる。

彼女は静かに目を閉じて、深く物事を考えていた。

時折、言葉を紡いでいるかのようにかすかに薄紅色の唇が開く。

重房の問いに対して真摯に応えようとしている。そう思わせる仕事草であった。

しばしの沈黙の後、彼女はゆっくりと眼を開き、彼の問いに答えを示した。

「安芸の国は……私たちは、決して弱くないよ」
力強い眼差しで、はっきりと言い放つ。

彼女の透き通った声が、経友たちの脳髄を奮わせる。

単なる慰めの言葉ではない、確信に裏付けられた何かを感じさせられた。

「それは慰めか……？ 俺たちのような小物が強者相手にどうやって勝てる」

「弱者が強者に勝てないなんて誰が決めたの？」

重房の言葉に、松寿はにっこりと微笑んだ。

その微笑みに、経友の心が揺り動かされる。

『至弱とて、至強を食らうことがあるのだ』

出雲の国主・尼子経久の言葉が思い起こされる。

それと同時に、松寿の姿とかの謀聖の姿が重なって見えた。

「百万一心、だよ」

「ひゃ、百万、一心……？」

重房が戸惑いながら鸚鵡返しに聞き返す。

経友にとっても聞き慣れない言葉であった。

二人は呆気にとられたように口を開き、彼女の言葉を待った。

「そう、百万一心。私たち一人一人の力はまだ弱いかもしれないけど、皆で力を併せれば何だってできるんだよ」

第一、と続けながら松寿は人差し指をびつと立てる。

「絶対に勝てないなんて結論に達しちゃうのは、大内家や尼子家の力の根幹を測り違えているからだと思う」

「測り違い……？」

思わぬ指摘に重房は狼狽する。

六尺を超える大男が、か弱い少女に対して及び腰になっている光景は、まさに異様そのものであった。

「国の根幹は人に在り。まつりごと、兵家のことも、それを左右するのは人の力。彼らが強いのは、私たちよりも人の力を集めやすい環境にあるか、もしくは集める術に長けていただけなんだ」

滔々と語る松寿の言葉には、端から端まで精気が宿っていた。

彼女の指摘は経友たちが考えたこともないような斬新な視点に基づかれたものであったが、その全てに確信をもたらす説得力があり、経友は一々納得させられてしまう。

これほどの器であったのか。二人の口から感嘆の息が漏れ出でた。『俺たちのような猪武者は、戦の巧拙でそのものの価値を計りがちだ。その視点をもてる人間てのは中々いないものよ』

松寿の演説を聴きながら、経友は祖父の言葉を思い出していた。

（成る程、確かに松寿は俺たちとは何か別の景色を見ているのかも
しれない）

今まで彼女のことは、出来の良い弟に隠れた、引っ込み思案な少女であると思っていた。

自分と一緒にいると思っていた。

だが、その認識は改めなければなるまい。

自分は今まで彼女の一面だけしか見ていなかったのだ。

経友は内心、自身の不覚を深く恥じ入ると同時に、幾ばくかの寂寥感を抱いていた。

そんな経友の心中の遙か遠くで、松寿に秘められた才はこれでもかと言わんばかりに輝きを放ち続けている。

「安芸にはね。いっぱい優秀な人が眠っているよ。そんな人たちが力を合わせる事ができたら……他国に怯える毎日を過ごす必要なんてない。私たちは自信を持って良いの」

「む、う……」

気圧されたように重房は黙りこくると、顎に手を当てて何事かを真剣に悩み始めた。

「百万、一心……百万一心……。そうか……百万一心か」

再び面を上げた時、重房の瞳は眼前の霧が晴れ渡ったかのように澄み切った色になっていた。

興奮収まらぬと言った風に見える。

彼は眉を持ち上げながら、身を乗り出して経友に語りかけてきた。

「千若」

「ん」

「今回は見逃してやる。疾く郡山へと急げ」

「良いのか？」

経友が不安げに確認する。

重房の行おうとしていることは、明確な命令違反である。

何処に誰の目があるとも知れぬ現状において、それはあまりにも危うい橋を渡る行為だ。

だというのに、心配げに問いかける経友を尻目に、重房は迷いのない実に爽やかな表情をしていた。

「ああ、俺はこれから御屋形様の元へ向かい、松寿姫から得た答えを以ってお諫めしてくる」

「馬鹿なッ！」

慌てて経友は声を荒げた。

そんなもの通じるわけがない。

御家のことは、単なる思い付きで生まれた代物ではない。家中一同がよくよく話し合って決定されたものだ。

それをやり遂げぬばかりか、真つ向から諫言しようなど……命が幾つあつても足りるものではない。

経友は必死に制止したが、重房は頑として譲らなかった。

「良いんだ。俺は元々器用な人間ではない。納得のいかぬものを無理矢理納得させて命をこなすなどという芸当は、土台からして俺には無理な話だったのだ」

「だが……」

「良いから行け。腹を切ることになるかも知れんが、そうであったとて悔いはない。安芸の行く末、俺も楽しみになつてきおつたわ」

重房は心底嬉しそくに腹を抱えると、経友に帰還を促した。

こうなつては重房は何と言つても聞き分けてくれないだろう。

経友は悔しそくに唇を噛むと、せめてもの無事を祈ることにした。

「分かった。だが、決して命を粗末にするんじゃないぞ」

「阿呆、日頃より命を奪い合う敵にかける言葉か」

「だからこそだ。俺の知らぬところで勝手に死ぬんじゃない」

経友は険しい顔でそう告げた。

重房は肩を竦めて笑い飛ばすと、話はこれまでとばかりに踵を返した。

経友も松寿の手を取り、先を急ぐことにする。

「そう言えば」

すれ違いざまに、重房が思い出したようにぼつりと呟いた。

「麓でお前の馬が待っていた。奴らは利口だな。山の空気を敏感に察知して、その場から離れたのだから」

「そうか」

経友は一言礼を口にして、そのまま振り向きもせず麓を目指した。

重房と再び相見えることが出来るよう切に願いながら。

経友たちが重房と対峙していた頃。

坂の居城から数里ほど北に位置する草原を、六騎の騎馬武者が駆け抜けていた。

夜風を切るようにして先頭を走るは、相合勢の旗頭たる相合四郎元綱である。

女と見紛うほどに端正であつた面持ちは、今や不快げに大きく歪んでいた。

彼の内面に蓄えられていたどす黒い感情を覆い隠すものは既にない。

心なしか、彼に付き従う家人たちが距離を置いているように見えるのは気のせいであろうか。

元綱が身に纏っている殺気は、家人にすら恐怖を催す類のものであつた。

「くそッ、益暗が余計な手間をかけさせるッ！」

元綱が恨みがましく舌打ちする。

彼らは雪崩のような勢いで猿掛の地を目指していた。

松寿の逃亡。

伝令の報告を聞いた時、元綱は眩暈を起こすほどの衝撃を受けた。彼には自信があつた。

松寿を人質に取り、尼子の迎えを待つという対応は、今回の事態における最適解であつたと確信している。

松寿派の家老たちが迅速に動いたことは計算外ではあつたが、それでも彼らを完封することができていたことがその証となる。

尼子への連絡とて、事件のその日の内に行ったのだ。遅きに失したと言うことはない。

そう、全てにおいて抜かりはなかつた。

恐らくは今夜中にも、尼子の兵が松寿を出雲へと連行してくれたはずなのだ。

そうして、今回の家督争いを無傷で収めた元綱は、晴れて毛利家を率いて雄飛していく……はずであつた。

「それをツ、それをツ！」

彼の目論見は音を立てて崩れ去ってしまった。

全ての元凶は、吉川の三男坊である。

理性的とは言えない彼の面相が、眼前に浮かんでくる。

吉川経友。

祖父の薫陶を受けているせいも、武勇においては着目すべき点もあつたが、それでも元綱と比べれば、取るに足らない凡人であつた。山口で顔を合わせていた頃から、学においては比べるべくもなかつたし、弓の腕においてさえ元綱が勝つていたので。

「あいつは、何故……いつも私の邪魔をするのだツ！」

幼い頃の記憶が思い起こされる。

元綱にとつては、忌まわしい記憶である。

どんなにその才を磨いたところで、出自と言う名の壁が立ちはだかつてくることを痛いほど分かせてくれた一件であつた。

元綱は頭にもたげてきた記憶をかき消すようにかぶりを振ると、前方を睨みつけた。

「犠牲を払わずになどと甘いことはもう言わぬ……姉上ともども必ず殺してやるツ」

そして、憎しみを込めて吼える。

彼の咆哮は風に逆らい、猿掛へと目指していった。

その時、元綱の鼓膜が咆哮を切り裂いてこちらへと飛来してくる何かの存在を感じ取つた。

元綱は頭だけ動かし、闇夜を切り裂く飛来物を避けて見せる。

背後で骨の碎けるような鈍い音がした。

飛来物を頭に受けた家人の一人が、力を失い落馬していく。

「やっぱり来た」

前方から年端も行かない少女の声が聞こえてくる。

その声色は可憐ではあつたが、感情の籠っていない無表情なものであつた。

「君は……」

雲の切れ間に顔を覗かせる弓張り月が、淡く前方を照らし出した。月明かりに照らされて可憐な少女の姿が浮かび上がる。

身に纏うは色鮮やかな単衣^{ひとえ}。

動きにくいことこの上ないはずのその装束を、彼女は金色のたすきでまとめあげていた。

朱色^{あかじ}の緘紐^{おとじ}で彩られた具足は、昨今見なくなった古風な大鎧を模しているようだ。

あまりにも場違いでちぐはぐな風体であるというのに、不思議と彼女にはそれが似合っていた。

「何時から斯様に傾^{かぶ}くようになったので？」

元綱が皮肉を込めて問いかけると、少女の何処か眠たげな猫目がきらりと煌いた。

少女が半歩前に出る。

手に持つ槍の切っ先は元綱の首筋へと向けられていた。

二人の距離はまだ大分離れている

だと言うのに、辺りにはまるで互いの喉元に短刀を突きつけ合っているような、肌のひりつく緊張感が色濃く漂っていた。

一触即発の空気の中、対面した二人は互いの名前を呼び合った。

「やはり君か。玖姫」

「久しぶり、四郎」

様々な思惑(三)

三、

玖は長さ五尺あまりの手槍をゆっくりと頭上で振り回し、その勢いを以って自身の足元を薙ぎ払った。

ザツ、

と硬いものを押し潰したような音とともに、辺りに大きな土煙が立つ。

手槍が宙へと跳ね返り、彼女が元の構えへと戻った時には、両者の間に一本の深い線が刻み込まれていた。

風が石突から垂れ下がった化粧紐を、単衣の端を、彼女の軽やかな短髪をたなびかせる。

「生憎だけど、ここより先へ通すわけには行かない」

遠巻きに様子を窺う騎馬武者たちに向かって、玖は静かに警告した。

何事も無かったかのように涼しい顔をしている少女の身からは、凄まじい闘気が発せられている。

果たして、この小柄な体躯にどれほどの実力が秘められているのか

彼女の立ち姿に底知れぬ覇気を感じ取ったのか、元綱の傍に仕えていた騎馬武者たちは、緊迫した面持ちで得物を持つ手をぎりりと握り固めていた。

「何故、君が此処に？」

緊張を高める家人たちなど全く眼中に無いと言った風に、元綱は頬を撫でながら問いかけた。

どうやら、先ほどの攻撃を完全には避け切れていなかったようだ。手に付着した血糊を舐め取り、流れるような眼差しで玖をねめつける。

両者の視線が交錯する。

元綱は彼女のまなざしの内に、明確な敵意とかすかな懐かしさを感じ取り、思わず頬を緩ませた。

「そのいでたち……久方ぶりの再会にしても、少しはしゃぎ過ぎでは？」

彼女の派手な装束を見て、元綱はくすりと笑った。

決して嘲っている訳ではない。

ただ、元綱の記憶にあった彼女と今の彼女の姿が上手く重ならなかっただけである。

山口で初めて出会った頃の彼女は、他人と語り合う事もできない、おとなしめで優しげな少女であった。

元綱と対面しただけで、顔を赤らめて何も言えなくなってしまっ……そういった少女であった。

彼女のあまりの変貌に元綱はくつくつと腹を抱える。

「それがこつも様変わりするとはね……」

「それはおあいこ。あんたも大分変わったでしょう？」

冗談めかす元綱に対して、玖がぴしゃりと言いのける。

玖と出会った頃の元綱は、まだ未来を信じるまっすぐな若者であった。

彼女の言葉で、幸せに満ちた少年時代を思い出し、自嘲気味に顔を歪める。

山口で勉学に励んでいた頃、元綱は何をするにしても同世代の学友たちから頭一つ飛びぬけていた。

礼法、軍学、武芸……

切磋琢磨した知識や技能は、全て自分に明るい未来をもたらしてくれると信じていたのだ。

「変わった、ね。本当に……何故私がこつも身を墮とさねばならなかったのだろうね」

「心変わりなんて、とどのつまりは自分次第だ。あたしと同様にね」

「君は自分で選んで、変えたのか」

「うん」

そう言うものか、と元綱は小さく笑う。

実際彼女の言う通りなのかもしれない。

もし、幼い頃の彼に寛容と謙虚さが備わっていれば……目の前に理不尽の一つや二つ立ちはだかつたところで、ここまで姉たちへの憎悪を深めることはなかつただろう。恵まれぬ自分の立ち位置に怒りを覚えることはなかつたであろう。

そう、彼の心構え次第では、今と違った未来とてあつたはずなのだ。

だが、以前の彼には理不尽を許すことができるほどの心の余裕がなかつた。

今義経、安芸の麒麟児……彼を称揚する二つ名だ。

彼は少々、周囲に持ち上げられすぎていた。

「いずれにせよ、一度踏み出してしまつた道を今更戻るわけにはいかない。私にも信用と責任があるからね」

「そう……」

玖が寂しげに息を吐く。

まるで今生の別れのような表情だ。元綱はいじらしくなつて彼女に微笑みかけた。

「今夜君に会えたことは本当に嬉しかった。君は変わったというが、相も変わらず可憐で美しい。……その単衣、私が与えたものだね」

「違う。これは兄者から贈られたもの。それ以外の何物でもない」

玖の頑なな否定に、元綱は解せないと言つた表情で首を傾げた。

「しかしそれは、賭弓のじゆみで……」

山口での一件を思い起こす。

あの日、大内家の当主、大内義興よしのぶは山口に集つた若者たちに賭弓を命じた。

『戯れぞ。我は諸君らの仕上がりを見てみたい。最も強こわき弓使いには手ずから褒美をやるつ』

当主の言に、元綱たち若人は奮い立つて参加した。

自らの鍛錬成果を世に知らしめる絶好の機会であつたからだ。

並み居る強敵たちを下すのは多少骨が折れたが、それでも元綱は見事に勝利をもぎ取ることができた。

彼女が着ている単衣が、その時の褒美である。初めは、最愛の母へと贈るつもりであった。

だが、吉川の三男坊に嘆願されたので譲ってやったのだ。正確には、譲らざるを得なかったのだが……

そこまで考えて、元綱はようやく彼女の心情が読めてきた。

「ああ、そうか。君は優しいのだな」

恐らくは地べたに頭を擦り付けてまで、単衣を所望した兄の体面を思つてのことなのだろう。

元綱は彼女の優しさを感じ入ると共に、三男坊が彼女の心を縛り付けていることに苛立ちを感じた。

「君の婆娑羅ハカドな風体も、もしやすると兄に恩義を感じてといったところか。君のような人が、盆暗のために人生を不意にするとするのは良くないよ」

そう、彼女はあんな男のために人生を捨てて良い女性ではない。

元綱は悲しげに顔を歪ませ、刀を抜き放った。

彼女とは戦いたくなかったが、意思の籠った両眼を見る限り、戦鬪は避けられないであろう。

元綱は彼女が矛を収めてくれるようお願いながら、その細い首目掛けて刃を向けた。

「小倉山へ帰れ、玖姫。君はこの争いが収まってから、全てがあるべきところに落ち着いてから……ゆつくりと君という人間を輝かせれば良いのだ」

優しくゆつくりとした口調で、そう諭す。

玖は元綱の言葉を聞きながら、唇を噛み締め、悲しそうに身体を震わせた。

「やっぱり、何も分かつちやいない」

彼女の透き通った瞳に、決意の灯火がぼつと浮かび上がる。

「この装束はあたしに対する戒め。四人の……あるべき関係を崩し

てしまったのは、あたしだから」

玖の覇気が噴き出すように広がっていき、元綱たちの肌をちりつかせる。

彼女の迫力に反応した従者たちが、一斉に彼女に対して得物を向け始めた。

「四郎、あんたを殺す」

数多もの刃を前にして、彼女は怖じることもなく対峙してみせる。凜とした声には、確固とした覚悟が宿っていた。

月明かりに照らされた草原に、山吹色の疾風が駆け抜けていく。

玖は自らを手槍を逆手に持ち替えると、鮮やかな単衣を靡かせ、元綱との距離を詰めるべく踏み込んだ。

まず相対するは、前方を守る二騎の武者。

玖はこれを、軽やかな跳躍により切り抜ける。

「なッ？」

驚愕の表情を浮かべる彼らの面をちらりと見た後、玖は元綱のいる方へと焦点を定めた。

突き刺すような殺気に、周囲の空気がじりりと震える。

「おのれッ」

残りの二騎が及び腰であった身体を奮い起こすように氣勢を上げた。

元綱を守るように、太刀を構えて立ちふさがる。

「邪魔……ッ」

彼女は吐き捨てるように言葉を発すると、何時の間にもやら手にしていた飛礫を思い切り投げつけた。

しなやかなバネを最大限に利用して投擲された飛礫は、唸りを上げて従者の顔へと叩き込まれていく。

「ぎゃッ」

先刻も響いた鈍い音と共に、四郎を護衛していた従者の一人が顔を押しさえて落馬した。

その威力に、傍らにいたもう一人の顔が青ざめていく。

印地打ち。

平安の御世より日ノ本に伝わる投擲の技である。

古くから戦ごとにおける必須技能として、研究に継ぐ研究が積み重ねられてきた。

いかに投げれば人は死ぬか。

彼女の放った飛礫は、熟練の技能者が修練を重ねてきた『それ』と全く遜色のない威力を備えていた。

「落ち着け、ただの印地であるッ！」

「そう、これはただの印地打ち。けど、夜戦において飛礫ほど威力のある得物もない」

玖の言を証明するように、傍仕えたちの動揺は最高潮に達していた。

不甲斐ない部下たちを叱責する元綱目掛けて、玖は身体を滑り込ませる。

低い体勢から見上げる彼の両眼は大きく見開かれ、わずかな驚きを湛えて揺れていた。

「すうッ……！」

玖は短い呼吸を放ち、逆手に構えた槍を横薙ぎに斬り上げた。

甲高い剣戟の音。

鋼がぶつかりあい、火花が盛大に飛び散っていく。

「うつけどもが、主を守ることでできんのかッ」

玖の一撃を難なく防いだ元綱が、苛立たしげに部下たちを怒鳴る。先ほどの攻撃は、彼の心胆を寒からしめることでできていなかったようだ。

「ならば」

手槍を持ち替え、突きを上下に振り分けながら連続で放つ。

迅雷の連撃。だが、これも目標に届くことはない。

常人では初撃すら防ぐことのできないであろう槍捌きだというのに、元綱はそれを馬上において危なげなく捌き切ってしまった。

「流石玖姫、短い期間で良く修練をされたものだがッ」

元綱が嬉しそくに口の端を上げる。

玖は手を休めることなく続けざまに槍を突き上げた。

が、これも元綱は上体を反らし、寸でのところがかわす。

「私を倒すというのならば、うちの勝か、国司^{くにじ}程度にはなってもらわなくてはな！」

端正な顔立ちに似合わない野獣のような咆哮をあげ、元綱は上体を反らした余勢を駆って馬を飛び降りた。

そのまま袈裟に斬りつけてくる。

轟音と共に迫り来るこれを、玖は柄で軌道をずらしてみせた。

更に返す刀で、滑らせるように指を狙う元綱の追撃を、槍から一瞬手を離すことで対処する。

「ははッ、見事ッ！」

まるで二人の薄氷の上を渡るような競り合い。

上下左右縦横無尽。

正手搦め手織り交ぜられた両者のやり取りが続けられる。

両者の身に纏う具足や露出した装束が、避け損ねた一撃を受けて飛び散っていった。

「殿ッ」

元綱の従者が我に返り、玖の背後から襲い掛かる。

が、玖は後ろを振り返ることもなく、石突で従者の顎を打ち上げた。

泡を吹いて倒れていく従者を見て悲しむこともなく、元綱は驚きと喜びに満ちた声をあげた。

「やはり、君は素晴らしい。最高だッ！ そうだよ、これが益暗との器の違いという物だよな。やはり千若程度とは物が違うッッ」

「兄者は鳳だ。誰よりも強い翼を持っている。ただ飛び方を知らないだけッ」

感極まって声高に叫ぶ元綱に対し、気炎を上げて対抗する。

(まさか、ここまで差があるなんて……)

一向に底の見えない元綱の実力に、弱気な考えが玖の心を支配していく。

だが、こんな所で挫けるわけには行かない。

(せめて、兄者が無事に松寿姉を助け出せるだけの時間稼ぎを……ッ)

怖気づく心を必死に鞭で叩いて、前へと向き直らせる。

これにより萎える心は無事に立ち直った　　が、それでも一瞬の隙が生まれてしまう。

彼女の心の隙を敏感に感じ取ったのか。

玖の瞳に、体重を乗せた突きを放つ元綱の姿が入り込んだ。途端に浮かび上がる無数の選択肢。

(力を反らす？ いや、それも織り込み済み。これは触れてはならない一撃だ……！)

見る間に加速していく渾身の一撃を　　彼女は跳ぶことで避けることにした。

槍を杖に自重を乗せる。

きしんだ手槍の反発を利用し、彼女の身体は宙高くへと舞い上がった。

「躍超物おどりしえ！ そのような古法まで御爺様に学ばれたのかいッ？」
元綱の肩先を飛び越え背後へと回り込む。

感嘆の声を耳にしながら、玖は絶好の機会が訪れたことを悟った。

(これが勝機ッ)

着地と同時に、手槍を腰溜めに構える。

「沈丁花しんちょうけ……ッ！」

全身が爆ぜるような感覚。

玖の身体が旋風のように翻る。

大地を踏み抜き、下段から繰り出される神速の一撃は、螺旋を描きながら元綱の首目掛けて跳ね上がった。

まるで龍の顎あぎとが肉も骨も砕いていくように、振り返ろうとする元綱の半身を抉きつていく。

元綱の身体に鮮血あだばなの徒花あだばなが花開いた。

「ぐッ………?」

元綱の顔が、苦痛と驚愕によつて大きく歪む。

巧みに身体を反らして刃の顎から身を守るうとするが、彼女の放った『それ』は吸い付くように離れない。

数年の修練の末に基爺から授けられた奥義の一つである。

吹き出る血飛沫が華麗な華を彷彿させるが故に、この名が付けられた。

応仁の大乱において、数多の猛者たちを葬ってきたこの技ならば、元綱の才に抗し得るであろう。

なけなしの希望を胸に、玖は槍を握る力を強めた。

(これならッ)

彼女の願いを込めた一撃が、元綱の身体を削りながら突き進んでいく。

「があああッ!」

元綱の絶叫が大気を震わせる。

血煙が辺りを真っ赤に染め上げた。

玖は身体中に元綱の血を浴びながら、薄目で彼女の刃が命を刈り取ることができたのかを確認する。

果たして、槍の刃先は

彼の首には届かなかつた。

「は………はは、生き延びた。生き延びたぞッ!」

ぎらぎらとした生気を瞳に宿し、元綱は寸前で止まった槍の穂先に視線を向けながら、邪悪な笑みを浮かべる。

三叉に分かれた穂先を受け止めていたのは、彼愛用の名刀と、その鞘。

彼は咄嗟の機転により、刀の鞘までも利用して必殺の一撃を見事に食い止めて見せたのだ。

元綱は玖を太刀の腹で払い飛ばすと、血に塗れた半身を満足げに見つめ、狂ったように笑い出した。

身の毛もよだつような、おぞましい笑い声であった。

(そんな……)

絶望が彼女の心に満ちていく。

沈丁花は自らが打てる最高の一手であった。これを防がれては、もう玖に彼と抗し得る手段は無い。

彼女の消沈を後押しするように、元綱の手が彼女の腕を掴んだ。

「玖姫、痛むと思うが許しておくれ」

みしりという鈍い音と共に、玖の利き腕に激痛が走る。

腕が折られた。

反撃の糸口を完全に潰された玖は、地べたに突っ伏しながら、玖は口惜しげに下唇を噛む。

(止めることができなかった……)

涙がひとりでに流れ落ちていった。

「くふっ……あは、あはははッッ！ やはり、やはり私は天に見捨てられてはいなかった。私の努力は報われる……私は、愛されているのだッ」

元綱の涙混じりの声が、うつすらと白みかけている安芸の空を暗く翳らせていく。

安芸を揺るがす争乱の幕開けであった。

昔日（一）

一、

あれは幼さゆえのすれちがいか

ことの起こりは今から四年前に遡る。

四月晦日みそかの日、経友は大内義興にあてがわれた宅地の庭で、弓の修練に励んでいた。

季節は梅雨入り真っ只中であり、久方ぶりの晴れ間は経友に貴重な練習時間を提供してくれている。

一寸たりとも時間を無駄にできない。

寺の鐘楼が日没を告げる中、経友の弓を持つ手に力が込められる。すたん、

経友が放った矢が、吊るされた的の中央へと突き刺さった。

からからと揺れる的には同じように刺さった矢が八本。

今放った矢と合わせれば、合計九本の矢が的の中心を捉えている。十中九発。いつもならば上々な成果と頬を緩ませていたであろう。

だというのに、経友の心は少しも晴れてくれない。

経友は険しい表情を崩さぬまま、汗ばむ指をぬぐって次の矢を番えた。すたん、

すたん、

突き刺さった反動で的がくるくると回る。矢は、中心から少し外れたところに突き刺さった。

「……くそつ、またやり直しか」

苛立たしげに毒づく。

外れた矢を忌々しげに睨みつけながら、経友は震える指を無理に伸ばして、再び矢を番えた。

百発百中。

それが、経友が己に課していた目標であった。いや、最低条件とすべきか。

三日前の馳せ馬の日、大内の当主は経友たちの集まっている場で賭弓の開催を高らかに宣言した。

現在、参加を表明している若武者たちは、皆弓上手と称している者ばかりである。

馴染みの山県重房などは元服間近にして既に八尺を扱い始めているし、石見の高橋や周防の内藤も油断のできぬ相手だ。

彼らならば、調子次第で十中八九程度は軽くやっつてのけるだろう。本番たる端午の節句（五月五日）まで一週間も無いのだから、修練に力が入るのも無理からぬことであった。

「けれど、本当の敵はあいつらじゃない」

弓を射ながら、同郷の元綱を思い浮かべる。

毛利家の四郎元綱。彼は特別であった。

経友よりも弓を手にしていた期間は短いはずなのに、まるで昇竜の如き速さで実力をつけていく。

経友も追いつかれまいと鍛錬の回数を増やすなど必死の努力を試みたが、その差は縮まる一方で……ついにはあえなく追い抜かれてしまったのだ。

昨年正月の射礼（正月に行われる年中行事）で、弓上手一番手として名を挙げられた若武者は 経友ではなく、元綱であった。

思い出すたびに、経友の胸がちくりと痛む。

理解している。これは嫉妬だ。

目下であると思っていた者に、何時の間にもやら差をつけられていた焦燥と妬みなのだ。

何故、英雄の血を引いているはずの自分ではなくて、彼が一番になってしまうのか。

経友は情けなさから、全身を投げ出したい衝動に駆られた。

「四郎は頭の回転も早いし、風雅も解している……それが何で、弓まで上手なんだッ」

心の中に留めて置くべき言葉が、つい口をついて出てしまう。

学才のない自分が恨めしかった。武芸ですら花開くことの無い自

身の器を恨めしいと思った。

そんな心境が結果に現れたのだろうか。
すん、

放たれた矢は中心をわずかに離れた場所に突き刺さる。

「くそつ、くそつ」

手元からこぼれ落ちた矢を忌々しげに蹴飛ばして、鼻をぐずらせた。

射的に心の乱れは禁物だというのに、心に立ったさざなみは中々収まってくれない。

心が苦しくてたまらない。

何とかしてくれ。助けてくれと、自身の心が切に助けを求めてる。

だが、この暗い感情を消し去る術を、経友は持ち合わせていなかった。

「千若様」

そんな彼の耳に、今最も会いたくない者の声が届く。

元綱の声であった。

彼は縁側の柱に半身を預けながら、何処かばつが悪そうにはにかんでいた。

「四郎殿か」

慌てて赤くなった目の下を袖で擦りながら、どうしてここにいるのかと問いかける。

「玖姫に伊勢物語の写しを返しに伺ったのですが……その、弓鳴りの音が気になりました」

「そうか、邪魔したな」

経友は口早にそう告げると、再び的へと視線を移し、弓を構えた。むくむくと胸の内にもたげてくる暗い感情を、何処かに追い払うために集中したかったのだ。

しかし、彼の存在を意識の外へと追いやろうとしても、そんなことはお構いなしとばかりに声をかけてくる。

「鍛錬ですか？」

「そうだよ。悪いかな？」

「いえ。ただ、今朝方も我らと共に鍛錬をしていたではありませんか。一昼夜続けては流石に身体が持ちませぬ。そう根を詰めずとも……」

眉をしかめて、経友の短慮を諫める元綱。

彼の言っていることは至極正論だ。確かに身体を壊して明日の鍛錬に、後の本番に支障が出ては元も子もない。

しかし、経友は彼の指摘に是と頷くことができなかった。

元綱の口をついて出た　この一点が気に入らなくてたまらなかったのだ。

だから経友は、

「俺の身体だ。勝手にさせてくれ」

的に描かれた丸字を凝視したまま、苛立たしげに吐き捨てる。

用事が無いなら声をかけるな。そう気持ちを込めた一言であった。自分でも情け無い姿だと自覚しているが、面と向かって悪し様に罵り始めるよりは幾分ましであろうと思ひ直す。

これだけ“にべ”もない態度を取り続けていれば、何処か遠くへ行ってくれるだろう。

少なくとも本番の五日まで　経友は彼の顔を見たくなかった。

だというのに、元綱は短くため息をつくと、

「この弓、借りますね」

「え、おいっ」

経友から距離を取るところか、足元に放置してあった予備の弓を手に取り、弓の手入れをし始める。

これには経友も面食らってしまった。

好意を無碍にされてまで、他人にお節介を焼くことが不思議で堪らなかったのだ。

「その顔。千若様は、いつも他人に貴方がどう接しているのかご存じないといった風ですな」

「……………? ……………?」

理解の追いつかない経友の表情を見て、くすりと笑った元綱は、そのまま弓の弦へと視線を落として、

「っと、荒々しく使いすぎでございましょう。これでは、弓の狙いが崩れてしまう」

咎めるように声を大きくする。

他人の弓に許可なく触れるだけでも無礼であるのに、弓の取り扱いにまで注意を受け、経友の頭にかつと血が上った。

手入れをしていた元綱に掴みかかり、猛然と食って掛かる。

「か、返せよッ」

「いいえ、返しませぬ。貴方が身体を壊してしまえば、姉上が悲しむでしょうから」

「う……………」

胸倉を掴まれながら放たれた元綱の言葉に、経友の怒りが見る間に萎んでいった。

幼馴染の少女のことを例に挙げられるのは非常にまずい。

経友はぐうの音も言えぬほどに黙りこんでしまいながら、松寿の顔を思い浮かべる。

目に浮かぶのは、形の良い眉を歪めて矢継ぎ早の小言を放つてくる幼馴染の姿であった。

成る程、確かに松寿がこのことを知ったら、一日では聞かぬほどの長い説教をしかねない。

その心労たるやいかほどのものであるうか、と経友の顔色は見る間に青ざめていった。

「くそっ……………分かったよ」

一旦頭が冷め始めると、意地を張っていた自分がどうしようもなく滑稽に思えてくるから不思議なものだ。

経友は諦めたように舌打ちすると、その場にどっかと座り込み、自身もまた弓の手入れをし始めた。

改めて見てみると、弦に染み込ませてあった漆の色が剥けてきて

いる。

恐らく狙いが定まらなかったのも弦が弱ってきていたためだろう。それどころか、あのまま無心に引き続けていたら、遠からず弓が破損していたに違いない。

「あちゃあ、何で気づかなかったんだ……」
「すまなそうに、愛器に向かって合掌する。」

その様子を見ていた元綱から、押し殺したような笑い声があがったが、聞こえなかった振りをした。

「ようやく以前の千若様に戻られましたな。やはり、その方が「らしゅう」でございます」

「うるせえなあ」

二人の間に軽口が飛び交い始める。

他愛の無いよもやま話を続けながら、二人は弦の張り替えをし始めた。

心地よい風が結実した梅の実を揺らし、二人の頬を撫でていく。

手入れの途中で元綱の口から出てきた言葉は、経友を仰天させるに足るものであった。

「千若様。私は貴方を尊敬しているのです」

一瞬、目の前の男が何を言ったのか理解できなかった。

経友よりも才にあふれた男が、経友をさして尊敬していると言う。そんなことがありえるというのか。

経友には、その言葉が真実であるとは到底思えなかった。

だから、彼の言葉を世辞と受け取り、地べたに弓を押し付けながら、否定した。

「ん、そんな風には見えないけどな」
「が、彼にとつては世辞でなかったらしい。」

彼は経友の態度に心外だとばかりに憤慨しながら、声を大きくし

た。

「私がおべつかをこねているように見えますか？ 私は貴方が西国で一番の武人である 乃至はこれからなるであろうと思っております。小手先の技量ではなく、そう……魂の部分において、貴方は既に尊いものを持っている。だって、そうではありませんか。山口に集った若人は山あれど、一昼夜弓馬の道に励んでいる者など他におりませぬ」

強い口調で言葉を並べる元綱に気圧され、経友は思わず目を白黒させた。

彼の瞳は真剣そのものである。確かに嘘偽りを並べ立てているわけではないようであった。

経友は何だか照れ臭くなるのと同時に、いやそれ以上に自分が情けなくなってしまう。

何故なら、彼の言うひたむきに武の道を走る経友の姿はまやかしいのであるからだ。

経友は、元綱への嫉妬から鍛錬の頻度を増やしていただけに過ぎない。

元綱の言うような高尚な魂など持ち合わせていないのだ。

だから、嬉しいなどという感情が湧きあがってこず、ただ申し訳なさのみが先に立った。

「別に……俺はそんなんじゃない。要領が悪いから、他に能が無いから励んでいるだけだ」

口を尖らせて、尚も否定する。

しかし、元綱は頑として意見を曲げようとはしなかった。

「努力は人を裏切りませんよ」

彼はにこやかに言つてのける。

彼の笑顔は人好きのする真つ直ぐで清々しい笑顔であったのだが、経友にはそれがたまらなく傲慢なものに思えて仕方が無かった。

『努力は人を裏切らない』。

確かに、大事を為すのに修練は不可欠だろう。

だが、元綱の言う『それ』は才ある者にのみ許された暴言ではな
かるうか。

いくら努力をしたところで乗り越えられない壁はあるのだ。

(俺と四郎の差が『それ』を証明しているじゃないか)

心の中で独りごちる。

「結局のところ、人の心持ち次第なのですよ。できぬと思うからで
きないのです。壁を勝手に作ってしまったのです。千若様の武
に壁はない。だからこそ、このように励み続けることができるので
す。」

そんな経友の心中なぞには気づかずに、元綱は雄弁に自論を語り
続けた。

勝手に経友の姿かたちを描き出していく彼の瞳には少しも曇ると
ころが無い。

背筋はピンと天に伸び、はきはきとした声には希望と未来が満ち
溢れていた。

(もうやめよう。結局のところ、こうも邪推してしまうのは俺自身
の問題だ)

彼のまばゆい姿に眼を細め、ゆっくりとかぶりを振る。

(こいつは、恐らくこれからもずっと自分の天道を疑うことなく進
んでいくんだらうなあ)

ふうとため息をつく。

羨ましい。自分もできることならば、かくありたかった。

経友は憧れにも似た感情を胸に、眼前に座り込んでいる年下の顔
をまじまじと見つめた。

そんな経友の仕草が気になったのか、元綱は不思議そうに首をか
しげる。

「私の顔に何かついておりますか？」

「いや、別に」

どうせ言っても分からないだろうと、苦笑いする。

経友は諦めたように表情を緩め、作業を続けることにした。

弦の張替えを無事終える。

素引きを行い具合を見てみると、力強い音と共に弓が跳ねてくれた。どうやら調子は戻ったようだ。

額に滲み出していた汗を袖で拭う。

気づけば、先ほどまで胸の内に渦巻いていた嫉妬の感情は何処へと消え失せてしまっていた。

経友は満足げに頷くと、元綱に向き直って礼を言う。

「すまない、助かったよ」

「いえ、私は特に何も……。貴方の悩みがいかなるものか察することはできませんのだが、千若様ならいずれご自身で解決なさったことでしょう」

はにかみながら返してくる元綱。

そのまま思い出したように声をあげると、途端に表情を曇らせた。「そうだ、悩みが解決したのならば玖姫にもお顔を見せてあげてください。彼女も千若様のことを気にしております。何でも、最近顔を合わせていないとか」

「玖が？」

「ええ、彼女も今は大変な時期ですし。ほら、その……。彼女はまた山口に慣れていないので」

元綱の言葉に経友も表情を険しくする。

経友の妹である玖姫は、昨年からここ山口に移ってきたのだが、新しい環境に馴染むことができずに、周囲から浮いた存在となってしまうていた。

元より、彼女はあまり他人と話したがらない性分だ。何せ家族でさえも祖父母か経友くらいとしかまともに話せる相手がないのだ。彼女の内気はまさに筋金入りであった。

そんな彼女が見知らぬ他人が集う山口に上手く順応できるはずが

無い。

彼女の症状は、山口に来てからさらに悪化しているようであった。そんな最中に、松寿や元綱には大変良くしてもらっている。

松寿には、彼女が他の姫たちに疎まれないように配慮してもらっているし、元綱は玖にとって数少ない遊び相手の一人だ。

最近、自分のことで手一杯になりがちな経友にとって、彼の代わりをこなしてくれる毛利姉弟は、まさに足を向けて眠れない存在であると言えた。

「ああ、そう言えば……礼を言う。この間虐められていた玖を助けてやったんだって?」

「あんなものは助けた内に入りませぬ。ただ、彼女たちに苦言を呈しただけです。ああいうのは、許せませぬ」

「あいつは人付き合いが苦手だからなあ」

露骨に眉をしかめて苦々しげに呟く元綱に対して、仕方ないといった調子で経友が返す。

すると、元綱が不満げに異を唱えてきた。

「いえ、彼女は周りよりほんの少し聡いだけなのです。だから、他人の気持ちも殊更に透けて見えてしまい、心を通わそうと言う気になれないのでしょう。私にも少し、気持ちが分かります」

「気持ちが?」

「はい、私の場合はすぐに吹っ切れてしまいました」

そう言うと彼は過去に思いを馳せるように視線を遠くへと流した。

熱の籠った口調で、絞り出すようにして続いた言葉は、

「私は玖姫にも壁を乗り越えてもらいたいのです」

馴染みの少女に対する切な期待であった。

「そうか」

かけるべき言葉が分からず、経友は短く相槌を打つ。

明晰な者には明晰であるがゆえの悩みがあるのかもしれないが、経友には彼が抱いていた悩みを推し量ることができない。

そもそもの頭の出来が違いすぎるからだ。

だから、経友は妹のことをこれだけ察じてくれているという点に感謝の念を抱きつつ、深く頭を下げた。

「分かった、玖の所に顔を出してみるよ」

昔日（二）

二、

経友たちに給されている宅地は、元々大内家に仕える重臣の一人が利用していたものであったらしい。

屋敷内の庭園には、四季折々の木々が並び立つ中に大きな池や築山が造られている。

安芸の実家とは比べるべくも無いほど豪華な設備だ。恐らくは見る者が見れば、趣深いと感じるものなのだろう。

だが、生憎と経友は風雅の分野にすこぶる疎い。

だから、経友にとって、これらの設備は肩がこるものでしかなかった。

主屋の四方には離れである対屋が付属している。

玖はその中でも北西に隣接する対屋に寝泊りしていた。

北側には水回りが集中しているし、家人たちの住む長屋があるため、身の回りの世話がしやすい。

そういった利便性の関係から、本来北側の対屋は家主の正室にあてがわれるのだが、山口に上ってきている一族の人間は、経友と玖の二人しかいないため、彼女がこの部屋に住むことになったのも、ある意味必然であった。

（とは言え、便が良すぎるのも考え物だな。顔を合わせようと思わなければ、会う機会も無くなってしまう）

そろそろ部屋替えも視野に入れるべきなのかもしれない。

今後のことを考えながら、長廊下を通って玖の部屋へと向かう。

四月の下旬には珍しい雲の無い夜空を背景に、北の対屋は無人かと錯覚してしまう程の静寂に包まれていた。

「玖、いるか？」

部屋の主へと声をかけてみても、中から反応は返って来ない。

（留守か？ いや、もう日も遅いし、そんなことは無いと思うが…

…)

胡乱げな眼差しで、ひよいと中を覗き見る。

すると、唐紙で作られた衝立障子の向こう側に、紙燭のぼんやりとした灯りが揺れていた。

どうやら、玖がいることは確かなようだ。

寝ているのか、それとも居留守を使っているのか。

判別のつかない経友は、

「玖、入るぞ」

部屋の主に一応断りを入れて、中へと上がらせてもらうことにした。

玖は畳に寝転がりながら、書を読んでいた。

長い茶髪をばさりと床に広げながら、不貞腐れたように桜色の唇を切り結んでいる。

経友が入ってきたというのに、彼女はこちらを向こうともしない。

「……何しに来たの？」

つつけんどんな挨拶に経友は、

「目、悪くするぞ」

と、紙燭の油を継ぎ足しながら、経友は玖の態度をたしなめる。

「関係ない。兄様なんか知らない」

対する玖は、頑なな態度を崩そうとしない。

頬を膨らませ、ぷいと顔を背けていた。

「お前なあ。人が心配してやってんだから」

「うそ、兄様はいつも松寿姫様のことばかり。先々週だって……

折角の祝事だったのに」

と、玖に言われて思い出す。

「ん、十三参りのことか？」

十三参りとは、十三歳を迎えた子供が虚空菩薩を本尊としている寺に参詣し、その加護を授かるうという行事である。

要は七五三のようなものだと理解しておけば差し支えないと思う。何にせよ、玖は先々週に十三歳の祝い事を終えたばかりであった。

山口の近辺で、虚空菩薩を本尊としている寺は馬関（現在の下関）にしかない。

馬関は山口から船を足に使っても二日はかかる場所にある。

当然幼い玖を一人で行かせることはできないから、この時は経友も彼女に同行した。

そう、同行したのだ。

経友は、同居している唯一の肉親としての本分は全うしたと思っていたから、彼女が何を不満に思っているのか分からなかった。

「あの時だって、ちゃんと祝ってやったじゃないか」

彼女の真意を測りかね、心外そうに眉をしかめる。

玖は経友の言葉を聞いた瞬間、雷に打たれたように跳ね上がり、こちらをきつと睨みつけてきた。

「あんなの全然嬉しくないッ。だって途中から兄様、ずっと松寿姫様と話してばかりだった！ 玖のお祝いなのにッ」

「な、何だよ」

彼女の瞳はうるうるすると涙で湿り気を帯び、小さな身体は小刻みに震えていた。

経友は彼女の剣幕に戸惑いを隠せない。

十三参りの時には、毛利姉弟も同行していた。四郎も玖と同じく十三歳になっていたからだ。

それは賑やかな方が玖も楽しめるだろうという経友なりの配慮であった。

誓って言えるが、断じて玖のことをないがしろにしているつもりはなかったのだ。

それだけに彼女が全く楽しめていなかったという事実は、経友にとって思いも寄らぬことであった。

「……山口になんて来なければ良かった。父様や母様は玖を厄介払いしたかっただけなんだ。兄様だって、邪魔に思ってる」

経友が途方に暮れて二の句が告げられずにいると、彼女は堰を切ったようにあふれ出る涙で畳を濡らしながら、声を上げて泣き始め

た。

わんわん泣く彼女を見ても、経友には何故彼女がここまで激情に駆られているのか分からない。

兄を取られたやきもちか……。それもあるかもしれない。玖にとって自分は数少ない“話せる”肉親の一人だから。

だが、すぐにそれだけではないと思ひ直す。

彼女の発した『厄介払い』という言葉には、単なるやきもち以上の何かが込められているように思えたのだ。

原因が分からぬ以上、どうあやしたら良いのか見当もつかない。

経友はうるたえながら彼女を何とかあやそうとするが、元々言葉が巧みでないものだから、

「そんなことねえよ」

と、否定することしかできない。

いくら知恵を振り絞って言葉を重ねてみたところで、

「うそだ」

彼女の癩癩は治まる気配が無い。

「松寿姫様みたいに扱って欲しい……ッ！」

畳に突っ伏しながら、玖は思いの丈を赤裸々に叫んだ。

「玖が松寿姫様みたいじゃないから、皆要らないと思っっているんだ。玖も松寿姫様になりたいよおっ！」

松寿になりたい

自己を全否定する妹の言葉を一身に受け、経友ははたと思ひ出した。

玖が山口に来てからも周囲に溶け込むことができずに虐められがちであったことを。

それと同時に経友の内に強い感情が湧き上がる。

自分のことで手一杯であったとはいえ、配慮が足りずに妹の心を傷つけてしまったという申し訳なさがまず半分。そして、もう半分は玖に対する共感……。

玖が抱く苦悩の本質は、経友の苛んでいるものと酷く似ていたの

だ。

(そうか、玫もままならない自分に嫌気が差していたんだな)

ここまでくれば、一般的な人間よりも大分察しの悪い経友だって、彼女の嫉妬が単に『仲の良い肉親を他人に取られた』程度のもではないことくらい容易に理解できる。

恐らく玫は、松寿の生き方そのものを羨んでいるのだ。

両家の関係が深いこともあって、松寿は玫にとって最も近い同性の他人と言える。

考えてみると、内気な所も良く似ているし、玫も松寿を意識することが多かったのだろう。

だと言うのに、二人の立ち位置には大きな隔たりがあった。

松寿は決して恵まれた環境にあるわけではない。幼くして両親と死別するなど、つらいことを幾つも経験している。

それなのに弱音など吐かず、健気に生きているのだ。

では、対する玫はどうだろうか。

生来の人見知りが災いして、彼女は周りから疎まれた存在になっている。

そうした現状を良しとしていないことは、彼女の泣き顔を見れば明らかだ。

まだ幼い少女が渡世の巧拙を論じるなど傍から見れば馬鹿げた話であるのかもしれないが、それでも彼女は彼女なりに不甲斐なさを痛感していたのだろうと思う。

自分と言う存在がひどくつまらないものに思えてしまうことが、とてもつらいことであることは、経友も良く理解していた。

故に、経友は他人事ではいられない。肉親である事を差し引いてもだ。

同じ悩みを持つ者として、彼女を何とか救ってやりたかった。

だから、経友は考える。

自分と鏡映しのこの少女が、嫉妬に苛まれぬようになるためにはどうしたら良いのかを。

ただ、構ってやるだけで晴れる悩みでは無いだろう。

彼女が少しでも自分に自信を持てるよう……何か変わるきっかけが必要だった。

「うっん、玖は……お前は、松寿のどういったところが羨ましいと思っているんだ？」

経友は落ち着いた声色で彼女に問いかけた。

先ほどとは打って変わった態度で語りかけてくるものだから、玖もきよとんとして目を丸くする。

「それは……松寿様は綺麗だし。すごく強い方だし……玖とは違う所いっぱい持っていて……」

玖の呟きを一言一句聞き漏らすまいと耳を傾け続ける経友。

「成る程なあ」

一通り聞き終えた経友は考え込むように深く頷いた。

性根の部分はそう優劣のつけられる部分ではないと思うし、心げけについてはこれから変えていく部分だ。

(とすると、姿かたちの問題かな……着物ならば、何とか俺でも工面できるかもしれない)

経友は、憤まじやかながらも品の良い着物を身につけている松寿の姿を思い浮かべ、ふと思いついた。

「そうか、賭弓の褒美は確か京ごしらえの単衣だったな……」

馳せ馬の際に陳列された褒美の数々を思い出す。

大内義興が掲示した褒美には、白銀財宝、天下に名高き武具の他、色彩豊かな単衣が混ざっていた。

あのような立派な単衣を身に纏えば、誰もが玖に一目置くことだろう。

上手く行けば自信を持つきっかけになるかもしれない。

納得のいく答えを得た経友は、胸を張って玖に言った。

「分かった。俺が賭弓で弓上手に選ばれて、お前にとっておきの単衣を贈ってやるう」

「え」

「あんな立派な着物は松寿だつて着たことが無い。安芸一番の美人さんになれるぜ」

「ほんとツ？」

玖は一瞬目を輝かせるも、すぐに何かに気づいたように目を悲しげに伏せる。

「でも……」

玖に遅れて、彼女が案ずることに気づいた経友は、胸を拳で叩いて意気込んで見せた。

「大丈夫。勝つて見せるさ」

頭の良い彼女のことだ。

経友が元綱に対して感じていることも、薄々は気づいているだろう。

今回の賭弓だつて、勝てるかどうかなぞ保証できない。むしろ、元綱の伸びを考えるならば、負ける公算の方が大きいと言える。

（とは言え、変われつて後押しする人間が変われないんじゃ格好がつかないものな）

兄としても、まずは自分が変わって見せなくてはならない。

肩にぐんとおしかかってくる重責を肌で感じながら、

「ああ、約束する」

経友は指切りをしようと小指を差し出した。

瞬く間に日は過ぎていき、端午の節句が訪れる。

山口の街は、今日という日を待ちわびたように活気に満ち溢れていた。

暮盤目に軒を連ねる屋敷のあちらこちらからは、餅を蒸す香りが漂っており、門前には菖蒲さいよひの葉が立てかけられている。

大路に飾られた薬玉くすたまは煌びやかに陽の光を受けて輝いており、それが人の心を自然と高揚させていた。

元来、端午の節句とは病魔を退けるために健康を祈願する行事である。

しかし、健康を願うことは体の頑健さを奨励することにも通じるため、奈良朝より続くこの行事が、武人たちにとって特別な日に変化するのに、さほど時間はかからなかった。

「き、緊張してるわけなかるうが、うつけがッ」

当主館の馬場には、本日武芸を披露することになる若武者たちが集まっていた。

各々の顔からは緊張がありありと見て取れる。

それもそのはず、今日行われる賭弓は各国の守護大名や幕府要人にも広く宣伝されていた。

当然彼らも見物に来るわけで、情けない姿は見せられない。

自分の武芸がそのまま御家の名誉に関わるのだから、身にのしかかる重圧も並々ならぬものがあつた。

山県重房などが、大柄な体軀をがちに固めて空元気を振り回しているのも無理のない話であつたのだ。

「千若様」

経友が弓の確認を行っていると、元綱が親しげに話しかけてきた。その表情からは緊張や不安といった類の感情は全く窺えない。

以前の経友ならば、やはり元綱は器が違つと嫉妬していたことだろう。

だが、今の経友には嫉妬している余裕などなかった。

「四郎殿、今日は負けられないからな」

強い口調で迷いなく宣言すると、元綱は小さく口を開けた後、嬉しそうに微笑んだ。

「良かった。やはり、差し出がましい心配は不要でありましたな」と、明るい調子で語りかけてくる。

もう、二人の間にあつたわだかまりは、何処かへ消えうせてしまつたようだ。

互いの調子を確認しあつと共に、何気ない雑談をし始める。

「玖は大分参っていたよ。教えてくれてありがたく思っている」

「ん、玖姫は立ち直ることができたのでしょうか」

「立ち直らせるさ。そのためにも単衣は頂いていく」

心配そうにこちらを窺う元綱に対して、経友は力強く返事する。

それに対し、元綱は一瞬何のことだかわからないといった表情をした。

が、すぐに事態を把握して何度も縦に頷く。

「単衣を……？ あ、そうか。成る程。それは良い考えだと思いません。是非ともそうしてあげてください。私もできる限りは協力いたしましょう」

彼の言葉に経友は眉をびくりと持ち上げる。

「手を抜くというのか？」

元綱が手を抜くというのなら、経友は諫めるつもりであった。

何故なら、今回の一件は玖のためのものであるのと同時に、自分が変わるためのものでもあるのだ。

手を抜かれて勝った所で、そのような勝利に意味はない。

経友は元綱の真意を推し量るべく、じつと彼を睨みつけた。

「そんな無粋なことをせずとも、褒美は幾つもございます。私が単衣を選ばなければ良いだけではありませんか。私とて負けるつもりは毛頭ございませんよ」

どうやら、経友の懸念は杞憂であったようだ。

元綱は経友の考えを見透かしたかのように、片目を瞑って笑いかけた。

その様子に経友はほっと安堵の吐息をつく。

これならば余計なことを考えずに、競技に集中することができる。経友がそう考えたその時、

当主館の方から賑やかな管弦の音が聞こえてきた。

若武者たちが一斉に館へと視線を走らせ、平伏する。

経友と元綱も他に倣って、頭を深く下げた。

「御屋形様のおなり」

先払いの声の後、長廊下に姿を現したのは大内家の当主であった。大内義興。

西国、いや日ノ本屈指の勢力を率いる事実上の天下人である。都を牛耳る細川京兆家とて、彼に真つ向から立ち向かえば無事ではすまないであろう。

煌びやかな装束に身を包み、雅な烏帽子のかぶり方をしていながらも、彼の一拳一投足にはおよそ常人にはかもし出せぬ凄みを感じられた。

その面相はまさに精悍そのもので隙がない。

まるで王者の徳と戦人としての覇気が同居しているような面構えに、誰もが彼の顔を直視できずにいる。

「今日は良き日じゃ。皆励め」

「一所懸命にてッ！」

義興の一言に、若武者たちが声を張り上げる。

天下人の激励を身に受け、若武者たちの瞳は燃えるように揺らめいていた。

義興はくすりと笑い、その場を後にする。

彼に続いて、各地の大名や高官が次々に顔を見せ、その中に、

「ああ、四郎ッ。会いたかったぞ」

「母様ッ」

元綱の母親　相合の方が含まれていたため、元綱は驚きの声を上げた。

はっと飛び起きるように面を上げると、元綱は母の元へ駆け寄っていく。

（そうか、安芸の人間も当然来るのだよな）

経友も自然と家族の姿を探し求めるが、見当たらない。

三男坊だから当然ともいえるが、それでもほんの少しの寂しさを覚えた。

「御身、息災のようで何よりにございます」

「ああ、四郎や。またも見違えたのう。わらわは本当に嬉しい」

と、廊下の上から息子の頭を優しく撫でる。

元綱は心底嬉しそうに、母の温もりを感じていた。

「主の活躍。わらわは楽しみにしておるぞ」

「お任せくださいッ。母様のため、四郎は身命を賭して勝利を掴み取って見せましようぞッ」

「ふむ」

元綱の言葉を満足そうに聞きながら、相合の方はにっこりと微笑んだ。

「ならば、わらわはあの単衣が欲しいのう」

「え、あ、その……」

元綱の表情にさっと翳が差す。

経友の方に視線を送り、どうしたら良いものか困り果てているようであった。

「あれさえあれば、わらわは更に輝くことができる。御屋形様が亡うなつてからというもの、わらわは本妻の息子に無碍にされ続けておる」

言いながら、相合の方は袖で顔を覆った。

「母様……」

「頼むぞ、四郎。わらわのために励んでおくれ」

元綱の頭に自らの額をこつりとやった後、相合の方は元綱の返事も聞かずに行列の波に混ざってしまう。

後に残された元綱の顔は険しく、先ほどまでとはまるで別人のように青ざめていた。

「……千若様。申し訳ありません。玖姫の御一件、協力することができなくなりました」

昔日(三)

「……千若様。申し訳ありません。玖姫の御一件、協力することができなくなりました」

その言葉を最後に、黙りこくる元綱。

気まづくなつた二人は各々の準備に戻ることにした。

視線を落とす元綱と別れ、経友は賭弓の会場へと移動する。

会場は馬場からそう遠く離れていない場所に設けられていた。

会場に面する形で設けられた建物は、落ち着いた色の瓦が葺かれ、南北に長く伸びている。

部屋には演武を物見できるよう襖や障子といった類のものは備え付けられておらず、床は屋敷内の他のものと比べても一段高い。ただ、古木を利用した柱が何本も建っているのみである。

屋内の何処に座つても会場を一望できるようになつているのは、物見しやすいようにと工夫が重ねられた結果であろう。

このような建物を都では弓場殿ゆはとのと呼んでいるそうだ。

このようないざり際には、いつもここが観客席になつていた。

観客席の上にはすでに宴席が設けられており、殿上に待機する大勢の観客たちの顔は、皆ほのかに赤い。すでに酒を呑んでいるのかも知れない。

彼らは賭弓の開催を心待ちにしながら、西国の情勢や日々の雑談に花を咲かせていた。

経友は、つい観客の中に身内がないか探してしまつが、すぐに諦めてため息をつく。

(まあ、いるわけないか)

気を取り直し、そのまま視線を演場へと移した。

観客席の眼前には射手の立ち台が設けられており、そのすぐ傍には漆の塗られた弓置きが備えられている。

射手の位置から、的がかけられる台までの距離はおおよそ三十間

(約70メートル)といったところだ。

戦においても弓巧者が敵将を狙い撃てるぎりぎりの距離であり、それだけに腕の見せ甲斐がある。

大内家で開かれる射的の行事は概ねこのくらいの距離が踏襲されていた。

と、大内の家人が的を持って会場に入ってくる。

両手に持った革張りの的を見て、

「ち、小さい……」

ただでさえ緊張を隠せずにいた演者たちの表情が、にわかには陰しさを増していった。

人の胸より小さい程度であろうか。

朱色で描かれた丸字は、常日頃用いていたものよりも、明らかに一回り小さくこしらえられていた。

個人差もあるうが、人の急所を狙い打てる距離と言うのは、大体にして十間(約20メートル)前後が目安となる。

つまり、遠的においては「当たれば上々」なのであり、さらに「狙い打つ」と言う動作まで強いられるなどあまりに常識外れの要求だと言えるのだ。

「おい……聞いていないぞ」

「ぐぬ……」

突然の事態に周囲が動揺する中、

(何かの手違いか、いや……)

客席を見やると、客席のさらに一段高い位置で義興が微笑んでいる。

貴人と談笑する彼の表情は、してやったりといわんばかりに愉悅に歪んでいた。

予定外の事態に激昂するどころか、表情すら変えることがない。

それを見て、経友は即座に理解する。

(これくらいは射抜いて見せろということか)

面白い、と自身の頬をぴしゃりと叩く。

この予定外の介入を、天下人からの挑戦と受け取った経友は、闘志をあらわに握り拳を固めた。

そんな経友の気負いに対し、

「おいおい、必要以上に構えていては、勝てるもんも勝てなくなるぞ」

見知った声が、待ったをかける。

驚いて声の主へ振り返ると、そこには白髪混じりとは思えない活気に満ちた笑顔に、六尺を超える巨体。

声の主は経友の祖父、吉川経基であった。

「基爺っ、来てたのか？」

「あん、何だ。俺が来ちやいかんのか？」

「あ、いや。その」

恥ずかしくなつて俯く。

予想外の出来事に、嬉しさのあまり声の上擦つてしまふ。

兄たちと違って、経友は父から大切な扱いを受けているわけではない。もとより国人の三男坊など、一族の中でも下人に近い扱いを受けるのが通例で、責任のある役割を与えられることなど、ほぼ無いと言つて良い。

おのずと家庭内での自分の立場を理解していた経友だからこそ、身内が自分の活躍を見に来てくれたと言うことに感動を覚えていた。だから、経友は鼻息荒くして、

「基爺、見とけよ。勝つて見せるからな」

「へえ、一丁前な口を叩くもんだな」

意気込みを見せると、基爺はにやりと口の端を持ち上げながら、経友の頭をわしわしと撫で回してきた。

太陽の香りのする豪腕を頭の上に乗せられ、経友は口元が独りでに弛んでいく。

そんな爺と孫のやりとりが続く中、

「駿河守様ーっ、駿河守様ーっ」

基爺を呼ぶ少々か細い青年の声が遠くより聞こえてくる。

聞き慣れぬ声に、経友が耳をひくつかせていると、

「おう、俺はここだーっ。うちの愚孫もここにおったわ」

「ああっ、駿河守様まことにかたじけない。ありがとうございます、ありがとうございます」

基爺の返事を聞きつけ二人の前に姿を現したのは、声の通りに線の細い青年であった。

歳の頃は二十歳前後であろうか。

妙にへこへここと頭を下げながら、常に困ったような笑みを絶やさない。

何とも情けない、貫禄のない様子であったが、顔のつくりは丹精そのものであった。

「千坊。こちらが、大内家の安芸多々良家当主、興豊おきとよ殿だ」

「ああ、どうもどうも。ご紹介に預かりました興豊です。千若様のお噂はかねがね聞き及んでおりました。此度はどうかよろしくお願いたします」

青年の自己紹介に、経友は目を見開いて、口を半開きにする。

今、基爺は彼を指して多々良家当主といった。多々良とは大内の本姓であり、遠い昔に日ノ本へと流れ着いた異国王の一族を指す。

つまり、目の前の青年は天下人の同紋衆だということになるわけだが、それにしても彼の物腰はあまりにも腰が低過ぎた。

興豊は経友の反応が気になるのか、困ったように頬を指で掻いている。

その、全く「らしくない」風体に、経友が基爺の言をにわかには信じられずにいると、

「お前、今えらく失礼なことを考えていただろう」

凶星を突かれた経友は、

「う、あはは……」

「全く、自分の念人（支援者のこと）の顔すらも知らぬとは」

笑ってごまかす経友を見て、基爺はおおげさなため息をつく。

「念人？」

「お前、賭弓に参加すると言うのに、自分の支援者のことすら知らなかったのか。顔合わせもせず一体何をやるうとしていたんだ？」その言葉にはっとさせられて、経友は申し訳なさに縮こまる。

賭弓は、所有する宝物を賭けて行う競技である。

当然、賭けに参加するには参加に見合うだけの宝物を用意しなければならぬのだが、大抵の武人は宝物を用意するだけの財力を持ち合わせていない。

よって、念人　つまり、支援者に富の支払いを肩代わりしてもらうことによつて参加することになるのだ。

昨年まで、経友は若衆の中でも西国一番の弓上手として選ばれていただけに、その支援を大内義興が引き受けていた。

ゆえにいちいち念人を探す必要がなかったし、相手が当主であるがためにいちいち会う必要もなく、経友は気楽なものであったのだ。しかし、今年一番の弓上手は元綱である。

言うまでもなく、義興は元綱の念人になつてしまつてはいるはずだから、本来ならば経友は念人探しを行う必要があつた。

それをせずにいられたのは、

「全く……そんなこつたらうと思つたぜ。興豊殿は、おまえが失念しているだろつからと、あらかじめ願ひ出てくれていたのだぞ」

「えッ」

「いえ、元から私は千若様の弓を見るのが楽しみでしたので」

謙虚に手のひらをばたばたと振る興豊を見ながら、事態を察した経友は顔面を蒼白にした。

「か、かたじけない……」

「いえ、お気にせずとも。それよりも打ち合わせを行わなくては……千若様が弓を撃つた後には、私は笛を吹かねばなりません。曲目は……」

すまなそうにしょぼくれる経友を見て、興豊が何てことないといった風に人の良さそうな笑みを浮かべる。

「う、うん」

てきばきと段取りについて一つ一つ確認を求めてくる興豊。
経友は彼の言葉の一つ一つを真摯に受け取り、相槌を打った。

「的中」

見極め役を勤める家人の声に、会場が一齐にどよめいた。

一射目を終えた経友の残心を、興豊が奏でる笛の音が優雅に彩る。
的の中心から寸分たりとも外れることはなく突き刺さる矢を見ながら、軽く息を吐く。

いくらか小さいとは言え、元から過剰なまでに鍛錬を積んできた経友だ。

慣れぬ的に戸惑う演者を尻目に、概ね順調と言って良い成績で勝ち上がっていくことができた。

まず、一射目。

動揺に吞まれてしまった幾人かが脱落した。

罰酒を受け、彼らはさすがごと控え席に戻っていく。

続く、二射目。

全く同じ動作を何度も繰り返し強いられたためか、はたまた経験不足からくるものか。

緊張感に耐えかねて、手元の狂った幾人かが脱落した。

さらに、三射目。四射目。五射目。六射目。

初回の緊張を克服してしまえば、繰り返すことはそう難しいことではない。

残った弓巧者たちが、集中力を保ちながら何とか食らいついていた。

勝負が大きく動き始めたのは、七射目からである。

六射目までは見事な射を見せていた演者たちも、ここまできると集中力が途切れ始めてくる。

「あッ」

手元が狂って、矢を離す機会を間違えてしまう者。

必要以上に力んでしまい、矢を狙った場所へ飛ばすことができなかった者たちが、口惜しそうに地団太を踏んだ。

そのような中、

「山県源太郎殿、的中」

「吉川千若丸殿、的中」

「毛利四郎殿、的中」

経友を含む、三人の演者が小気味良い音を響かせながら的の中心に矢を突き立てて見せた。

ふん、と鼻息荒く意気込む重房。

涼しい顔の元綱。

彼らは弓競べのたびにいつも顔をあわせることになる面々であり、それと同時に同郷の昔馴染みであり、遊び仲間でもあった。

(だから、手強さも良く知っている)

元綱が脱落しないのは当然としても、経友と同じかそれ以上に要領の悪い重房までもが、慣れぬ的相手にここまで善戦してきているのだ。

恐らく人知れぬ努力を重ねてきたのだろう。

(負けられない)

自分のため、そして妹のため。

手のひらにできた肉刺まめをじっと見つめた後、経友はぐっと拳を力強く握り固めた。

そして、八射目。

「クソッ！」

重房の顔が苦悶に歪む。

彼の無骨な指から放たれた矢は、的の中央に描かれた小さな丸時から外れて、的の縁に突き刺さってしまう。

……これで重房の脱落が決定した。

大柄な体が口惜しさに打ち震え、無念さを乗せた拳がごつんと大地に叩きつけられる。

傍に控えていた武田家の者も、実につまらなそうな顔をしている。苦虫を噛み潰したような表情には、落胆と失望がありありと浮かんで見えた。

「山県源太郎殿、罰酒を」

「……」

見届け人に急かされて、重房は用意された杯をぐいっと飲み干した。

口を拭って経友たちを睨みつけるも、すぐに視線を落とす。

経友は、宝物の一つを手にとって席に戻る重房を見届けた後、

「次、吉川千若丸殿」

「うん」

家人の呼び声に応じて立ち台に乗った。

すうつと深呼吸を行い、眼を細めて的を見る。

重房のように失敗するかもしれない。よしんば上手くいったところで、元綱に果たして勝てるのだろうか……

襲い掛かってくる様々な雑念を取り払い、矢を番える。

長い静寂が訪れる。

ただ、当たれと静かに念じ　そして、経友は矢を放した。

放たれた矢は螺旋を描き、

「的中」

会場が一層の熱気に包まれた。

緊張を解いて、深く息を吐く。

（大丈夫）

まだ余力はあるようだ。手のひらを閉じたり開いたりして、疲労の度合いを確かめる。

妹の泣き顔が少し遠のいた気がした。

「次、毛利四郎殿」

「……はい」

元綱が涼しげな顔で立ち台に上る。

緊張感など微塵も感じさせない優雅な身のこなしに、見物してい

た若い姫たちから熱の籠ったため息が漏れ出た。

一瞬の静寂。

「すっ」

短い呼吸の後に放たれた矢は、見事的の中心を捉えて見せた。

わあああつ。

弓巧者たちの接戦に観衆が沸く。

経友と元綱 果たして覇者となるのはどちらなのか。

残された二人の演者に、観客の注目が一斉に向けられた。

期待と羨望、そして憧憬の念が一身に降りかかってくる。

それに対し、元綱は眉をびくりとも動かさない。平静そのものといった具合だ。

対する、経友は気が気でない。

(この土壇場に来て、四郎の弓が鋭さを増した……)

天井知らずの才能を目の当たりにして、経友の心にぞくりと戦慄が走る。

元綱の八射目 彼のはなった矢が的に突き刺さった瞬間、経友は思わず目を奪われてしまった。

それは、今まで見た中でも最も美しい射であったからだ。

勝負の最中に試行錯誤を繰り返す、より良い型を目指していく。

積み重ねたことを必死に捻り出すだけの経友には、逆立ちしてもできない芸当であった。

(……だからと言って、諦められるか)

強張る身体を無理やり伸ばし、次に備える。

そして、九射目が開始された。

「吉川千若丸殿、的中」

「毛利四郎殿、的中」

二人の健闘に、場の熱狂は最高潮にまで達した。

大抵の弓競べは、どんな弓上手が参加していたとしても九発も行えば雌雄が決するため、十発目まで雪崩れ込むことは稀である。

だから、経友と元綱の勝負は、傍から見れば近年稀に見る好勝負

と言えた。

(射る側からすればたまったものじゃないっ……)

噴き出す汗を手で拭いながら、元綱を見やる。

彼は汗一つかいていなかった。

ぶつぶつと小さく独り言を漏らしながら、ああでもないこうでもない射方について検討を重ねている。

それに比べて、経友は一射ごとが真剣勝負である。

結果の上では互角と言えど、内面で繰り広げられる戦では完全に元綱が凌駕していた。

「くそっ……」

経友の心に敗北の二文字が重くのしかかってくる。

(まだ負けたわけじゃない……気持ちで負けてしまっただけだッ！)

頭では理解していても、萎える心はどうしようもない。

挫けそうになる心を経友は必死に叱咤し続ける。

そんな経友の耳に、

「……千ちゃんっ、しっかり！」

馴染み深い少女の声が届いた。

「……松寿？」

慌てて、彼女の姿を観衆の中に探し求める。

松寿は、基爺や玖とともに固唾を呑んで勝負の行く末を見守っていた。

隣にいる基爺は、酒杯を片手ににやにやと笑みを浮かべており、

玖は念仏でも唱えるかのように必死に目を瞑っている。

今まで声をあげなかったのは、肉親である元綱を配慮してのためであったのか。

どちらを応援したらよいものか……松寿の顔は戸惑いに満ちていた。

「こら、松寿ちゃん。男の勝負に水を差しちゃあいけない」

「で、でも……」

基爺の言葉に、松寿は恥ずかしげに縮こまった。

彼女の姿を一目見て、萎んでいった闘志が再び息を吹き返す。

(四郎がいるのに声をかけてくれたってことは……俺があまりにも情けない面しているせいだろうな)

これ以上格好悪いところは見せられない。

「次、吉川千若丸殿」

「おうッ！」

経友は気力を振り絞って家人の呼び声に応えた。

そして始まる十射目。

会場が歓喜の声に満たされた。

「吉川千若丸殿、的中」

「毛利四郎殿、的中」

まさかの兩人、的中……雌雄決することなく、両者引き分けと相成った。

「むむ……どちらも中心を射抜いているのか？」

「どちらも的の中央を貫いております」

まさかの事態に行事の進行を担っていた重臣たちまで顔を見せ、見届け人と協議を始める。

それでも出だされる結論は甲乙付けがたしといったものであった。

「や、やりましたな、千若様。これにて再び西国一番の弓上手に返り咲けたのですぞ」

興豊が興奮冷めやらぬ口調で、諸手をあげて喜んでいる。

しかし、経友は、

「いや、引き分けでは……」

素直に喜べずにいた。

元綱が母のために単衣を望んでいる以上、玖の願いをかなえてやるためには確実に打ち負かす必要がある。

何よりも、このままでは元綱に勝つという自身の目標を達成できずに終ることになるのだ。

元綱とて、それは同じであったようだ。

今まで少しも崩さなかつた表情を歪め、あからさまに不満の表情を浮かべている。

「しかし、千若様……折角拾つた勝利なのですぞ。それも頑なにしていますは」

経友をなだめようとする興豊の言葉が最後まで続けられることはなかつた。

「……つまらん、優劣がつくまで続けよ」

先ほどまで歡喜に沸いていた觀衆が、さあつと冷や水を浴びせかけられたかのように静まり返っていく。

言葉の主は、大内義興であつた。

「お、御屋形様、それでは今後の予定が……」

不満そうに鼻を鳴らす当主をどう諫めようかとつろたえる重臣たち。

だが、彼の言葉は演者の二人にとって渡りに船であつた。

「お受け致す」

「無論です」

力強く頷いて、勝負の続行を求める。

二人の瞳に宿っているものは、勝利への飽くなき欲求であつた。

「……吉川千若丸殿、的中」

的を貫いた矢が二十本目を超えた辺りで、見物客の中に接戦を喜ぶ者は誰もいなくなつた。

例外と言えば、義興と基爺くらいであろうか。

相も変わらず、笑い声をあげて談笑を続ける義興であつたが、接待している公卿の笑顔は凍りついたように引きつっている。

基爺も場の雰囲気などお構いなしに酒を呑み、矢が的中するたびに無邪気に拍手している。

だが、周囲が彼に追従しようとしないため、一人の拍手が静まり

返った会場に響き渡るといった具合であった。

この前代未聞の大事態に、誰もが食いつくように魅入っている。

「……的中」

元綱の放った矢が、経友と同様に中心を射抜いた。

二十一発目。二十二発目、二十三発目……。

緊張のあまりに擦れる見届け人の声が、重ねられていく。

「つ……次、吉川千若丸殿」

呼び声に応え、幾度となく繰り返された所作と寸分違わぬ型でもって矢を番える。

そして、再び精神を集中し、

(ツ?)

経友は絶望のあまり叫び声を上げてしまいそうになった。

右手に奇妙な違和感がある。

感覚を失っているのだ。

疲労によるものか故障によるものか分からないが、いずれにせよ……わずかな感覚が成否を分けるこの局面において、致命的過ぎるほどの痛手であると言えた。

『一昼夜続けては流石に身体が持ちませぬ』

(ここにきて鍛錬のやりすぎが祟るのかよ……ッ)

心の動揺が瞬く間に全身を駆け巡っていく。

指が震え、思うように力が入らない。

分かる。このままでは外れてしまう。

「千若丸殿」

催促の声に気持ちが逸る一方で、

「あっ」

経友の放った矢は、中心からわずかに外れてしまう。

悲嘆の籠った声が各所から上がった。

だが、それらは経友の比ではない。

……結局、元綱を超えることはできなかった。

……妹と交わした約束を果たすことはできなかった。

経友は泣き崩れた妹の顔をまともに見ることができず、ただひたすらに俯いて齒を噛み締める。

『 嘘つき 』

玖の心の声が聞こえてくるような気がした。

昔日（四）

三、

「千若様……何度頭を下げられようとも、こればかりはどうにもできななのです」

元綱の返事はにべもない。

石に鍼を刺すような行為であると分かっていたが、それでも経友は頭を下げ続けた。

歯を食いしばりながら、黙って地面に額をすりつけ、必死に頼み込む。

「頼む……譲ってくれ」

色好い返事は返ってこない。

事情を知らない赤の他人がこの光景を垣間見たならば、経友のことを武士の面汚しだと声高に罵っただろう。武人が誇りも忘れて懇願するなど、何事かと。それほどにありえない光景であった。

だが、経友は懇願を繰り返す。

今の経友にとって、体面や誇りなどは全く問題にならないのだ。ぐるぐると回り続ける失意の念に苛まれる中、脳裏にあるのは、ただ一つ。

妹の泣き顔だけであった。

『兄様の……嘘つきッ』

妹に放たれた一言が、いつまで経っても頭の中を反響し続ける。

ただでさえ、連敗という大きな挫折に見舞われていた所に、約束破りの烙印まで押されてしまったのだ。

生まれてから十四年間、ひたすらに誠実に生きてきたはずの経友にとって、それは耐えがたいほどの苦痛であった。

（せめて嘘つきにはなりたくない）

敗北は覆しようがないとしても、何とか妹の約束は叶えてやりたい。

毛利邸にまで足を運んで、無我夢中で土下座を重ねる今の経友を突き動かしているのは、妹への配慮と……それ以上の自己防衛意識であった。

「千若様……」

元綱の顔は悲嘆に暮れていた。

彼とて吉川兄妹と知らぬ仲ではない。大抵のことならば、進んで協力してくれたであろうし、何もできないことを齒がゆく思っているはずである。

しかし、今回ばかりは事情が違った。

母である相合の方からの願い。それは元綱にとって、何よりも優先すべき例外中の例外であったのだ。

「母様は私の全てなのです……」

深々と頭を下げる元綱の背中、何処か口惜しげに見えた。

(どうしたらいいんだよ……)

毛利邸の正門を出た経友は、途方に暮れてへたりとその場に座り込んだ。

木柵に体を預けながら、どうしたものかと空を仰ぎ見る。

相合の方と元綱。

二人の絆の強さは、経友もよく理解している。

先代の毛利当主が酒に溺れた結果、正妻との仲をこじらせたことは、安芸の国人の中で知らぬ者はいないほど有名な話であった。

正妻と仲が悪くなれば、妾に情が向かう。これは必然である。

愛情と言う天秤が傾いた影響は、家中の様々な場所に歪みを生じさせた。

まず第一に子供の扱い。

正室の子供である松寿たちは、一時期相当煙たがられていたようだ。

顔を赤く腫らした彼女の姿を見たことがあるから、暴力を振るわれたこともあったのだろう。

一方で、妾の子である元綱に対しては、随分と調子の良いことも言っていたらしい。

元綱はあの通り才気に溢れた若者だ。「次期当主に……」などといった言葉が出ていてもおかしくはない。

何はともあれ、この先代当主によるえこひいきが非常にまずかった。

松寿と元綱はあの通りの人柄であるから、直接争い合うといったことはなかったのだが、松寿たちの祖父にあたる福原広俊が、まず怒り狂った。

正室の子を守るために重臣たちを糾合し、一大派閥を作り上げる。そして、これに対抗するために相合の方も反対勢力を集結させる。毛利家中は、二つの派閥に大きく分裂してしまったのだ。

家人たちがいがみ合う中に置かれた子供たちの心境はいかばかりのものであったのか。

家中に明確な序列のある吉川家で生まれ育った経友にとって、その壮絶さはとても想像できるものではなかった。

(でも、生臭い政治闘争の中でも二心なく接してくれる人間と言うのは必ずいる。元綱にとってはそれが……)

実の母である相合の方。そして元綱の武芸指南役である渡辺勝であった。

彼らは何よりも大切にすべき宝物のような存在であったのだ。

(そんな母からの願いを断れるわけがないよな……)

断れるわけがない。経友が同じ立場であったとしても、同じ選択をするはずだ。

彼の心情が手に取るように分かるだけに、

「絶望的だ」

ため息の回数が増えていく一方であった。

事態を打開するにはどうしたら良いのか、とんと見当がつかない。

かと言って、このまま家に帰っても妹に合わせる顔がない。

仰ぎ見た空の色は、何時雨が降ってもおかしくないような厚い雲に覆われていた。

「千ちゃん」

幼馴染の呼ぶ声に、経友は生気のない瞳を走らせる。

松寿は経友の様子に大分戸惑っているようであった。

手には笠が握られている。雨の予兆を知らせようと出て来てくれたのかもしれない。

「どうしたの……？ 大会。すつごくかつこよかったよ。何でそんな顔をしているの？」

「格好良い訳あるもんか。負け犬な上に約束破りだ」

吐き捨てるように言い放つ経友を、

「負け犬なんて言っちゃダメ。千ちゃんは多くの武人の上に立っているんだよ」

眉を顰めて諫める松寿であったが、すぐに怪訝そうな表情に切り替える。

経友の発言の中から、理解のできない単語を拾い取ったのだ。

松寿は、小首をかしげてこう言った。

「約束って何？」

後日、涙で目元を赤く腫らした玖の元に、毛利家から行李こしり（衣服を仕舞う箱）が届けられた。

「玖ちゃん。これ、毛利からの贈り物だよ」

松寿が期待を満面に広げた笑みを投げかける。

はじめは気圧されるように一歩引いてしまった玖であったが、やがて躊躇いがちに行きを開け、

「え、これって……」

眠たげな猫目が見開かれた。

若草色に光り輝く色鮮やかな単衣が収められている。

それは、紛うことなく賭弓で陳列されていた単衣であった。

「松寿……これは」

同席していた経友も、これには仰天して松寿に問いかけようとするが、

「しっ」

彼女から投げかけられた沈黙の合図に、思わず口をつぐむ。

「これはね。千ちゃんが一生懸命四郎君に頼んでくれたんだってさ。良かったね」

「え、兄様が」

玫の白い頬が、見る間に赤く染まっていく。

その様子を見た松寿はにっこりと笑った後、見るからに羨ましそうな表情を浮かべた。

「ああ、良いなあ……私もこんな素敵な着物欲しいなあ」

「……あつ、しよ、松寿姫様にはあげないっ」

「むっ、羨ましいなあ」

単衣を抱え込んでいそいそと行李に仕舞う玫と、羨ましがる松寿のやり取りを、経友は狐につままれたような表情で眺めていた。

「千ちゃん、ちよつと」

「松寿、あれは一体……」

松寿の手招きに応じて、忍び声で耳打ちする。

「私だつて玫ちゃんに何かしてあげたいもの。だから郡山の兄様に文で相談してみたんだ。そうしたら、相合のお母様に相談してくれたの」

「そんな無茶なッ！」

経友は絶句した。

松寿自身がどう思っているように、彼女にとって相合の方が敵対派閥の主であることに違いはない。

そんな女性相手に、ただ友人に単衣を送りたいから譲ってくれなどと頼めるわけがあるだろうか。

応えは否だ。相合の方とて、そんな願いを叶えてやる道理はない。関係派閥の調整。その見返り……。

考えの足りない経友にだって、この無茶を通すのに膨大な障害があったことくらいは想像できる。

松寿たちと相合の方の関係を知っていたからこそ、彼女がどれだけの努力を払ってくれたのか、経友は手に取るように理解することができた。

しかし、松寿はそんなことなど朝飯前だという風に、「いつつ私、千ちゃんに頼ってばかりだもん。こんな時くらい手伝わせて、ね？」

両手を合わせて、嬉しそうに微笑みかけてくる。

松寿の発する真つ直ぐな親愛の情に、経友は思わず顔を赤くしてそっぽを向いてしまう。

本音は正直、涙が出そうになるくらい嬉しかった。

「あの、松寿……その」

「うん、お礼は良いから。それより見て」

松寿が促す視線の先には、嬉しそうに単衣を見つめる玖の姿。

彼女はとても幸せそうであった。

「良かったね」

「ああ……」

久しぶりに見た玖の表情に、経友も笑顔を綻ばせる。

何とか、約束を守ることができたという安堵の念。

そして、これを機に玖が変わるのではないかと言う期待感。

経友の心に、久方ぶりの平穏が訪れた。

玖が笑い、松寿が微笑み、経友がはにかむ。

「そうだ。兄様、松寿姫様。久しぶりにすごろくしよう」

「うん、やろつ。玖ちゃん」

「げえ、そういう頭を使うのは苦手なんだが……まあ、たまにはいいか」

「じゃあ、すぐ持ってくるっ」

表情を明るくはじけさせ、軽い足取りで席を立つ彼女を見て、経友と松寿は顔を見合わせて笑った。

幸せな時間は長くは続かなかった。

「どういうことですか。姉上ッ！」

血相を変えて怒鳴り込んできた元綱の第一声に、玖が驚いてすくろくの盤を床に落とす。

松寿にしても、彼の青天が霹靂を飛ばすような勢いに、口をぱくぱくさせて言葉も出ない様子であった。

「え……どうしたの、四郎君。何でそんなに怒ってるの……？」

「とぼけないで頂きたいッ。母様から、単衣を取り上げたのはどういっ了見かと申し上げているのですッ」

「え……え……？」

わけがわからないといった風に、目を白黒とさせる松寿。

元綱は齒をぎりりと噛み締めながら、彼女に文を見せ付けた。

「『御家の為だと己に言い聞かせても、涙を拭う袖すら見つからぬ……母様から私に送られてきた消息です。私は確かに母様に単衣をお贈りしたと言っのにッ』」

「うそ……そんなわけない。だって、私も相合のお母様に確認したし、兄様だって」

「でまかせを言うなッ！」

元綱の絶叫が屋敷内を揺るがした。

荒々しい呼吸で、元綱は松寿を睨みつける。

そこには普段の涼しげな彼の面影は、微塵も感じられない。

正気を失った獣の姿が、そこにはあった。

「……母様はいつだって虐げられている。妾だから……正妻ではないからッ」

「し、虐げてなんか」

松寿が必死に否定しようとするも、元綱は聞く耳を持たない。瞳に宿る疑念。

その奥には、確信に満ちた何かが宿っているように感じられた。

「分かつてる。全部私が悪いんだ。妾の子だから……家中に不和を呼び込んだから！」

「四郎君は悪くないよッ」

たまらずに松寿が声を張り上げる。

経友と玖は事態が飲み込めずに、一言も口を挟むことができずにいた。

金切り声の後に訪れる静寂、そして元綱は、

「……またそうやって嘘を吐く」

底冷えのする声で、そう言った。

「母様が此度のことは全て坂に聞けと、そう仰った。坂は全てを話してくれましたよ」

怒りに声を震わせながら、元綱は言葉が続けていく。

「此度の件は……兄上の策略だと聞きました。私の手柄をうやむやにして家督から遠ざけんとする」

「何、それ……」

色を失う松寿。

経友とて、それは同様であった。

いくら、元綱の才能が飛びぬけているとは言え、その手柄まで揉み消そうなどと考えるはずがない。そんなことをすれば、家中に要らぬ不和を作り出してしまふからだ。

松寿の兄は、平凡ではあるが善良だ。

松寿はもとより、彼がそのような策略を弄そうとするとは到底思えなかった。

「そんなでまかせを」

「じゃあ、母様がでまかせを言ってるって言うのか　ッ！」

激昂する元綱に対し、松寿は口を挟む余地すら与えてもらえない。火がついたように怒り狂う弟を扱いかね、経友に助け舟を求めた。

「せ、千ちゃん……」

「四郎。これは何かの手違いだ。とにかく、まずは落ち着こう、な？」

経友は彼をなるべく刺激しないように、やんわりと語りかけた。

が、元綱は失望したような眼差しをこちらに向け、

「ここに至って、日和見かよ……」

無念そうに首を振った。

「坂はあんたのことだって言及していた。そもそも、此度の一件を持ちかけたのは、千若丸だ」と

「な、何言ってるんだ」

「だったら、何で姉上に頼んだ！ 私があれだけ嫌だと断っていたと言っのにッ！」

経友が真っ青になる。

他意はなかった。ただ、絶望的な心情を松寿に愚痴った。それだけだったのだ。

こんなに大事になってしまつとは露ほども思わなかったのだ。

「あんたのことは数少ない友達だと思っていた。一本気の通った素晴らしい武人だと尊敬だつてしていたのに……」

歯をむき出しにして、元綱が経友を睨みつけてくる。

明確なる敵意。

それは戦場に出たことのない経友にとって、初めて遭遇する感情であつた。

「裏切り者」

「四郎、お前ッ」

かっど頭に血が上がった経友が、元綱に飛びかかる。

握り拳を固めて経友の顔を殴りつけ、押さえつけ、更に殴りつける。

元綱も黙つてはいない。

血の滲む唇を噛み締めながら、経友に対して殴り返してくる。

「ちょ、ちょっと……やめて、やめてよおっ！」

松寿の悲痛な叫び声を聞いても、二人の取っ組み合いは止まるところがなかった。

この事件はすぐに吉川・毛利家中で取り沙汰されることになり、真相の究明が行われた。

一応の真相は『連絡の不行き届き』とされている。

早急に連絡を担った下人が処罰され、双方に落ち度なしということとで、四人は両家の当主の元で和解の誓約を交わすことになった。

そこに政治的な判断が介在していたことは間違いない。

結局のところ、誰が悪かったのか。

毛利家の当主が一策講じたのかもしれないし、相合の方が偽ったのかもしれない。

経友に真犯人を知る術はなかった。

いずれにせよ、この一件を機に四人の関係が急速に冷え込んでいったことは確かである。

元綱は近寄りがたい雰囲気を身に纏うようになり、彼と口を交わすことは滅多になくなった。

玖は、山口から安芸へと帰っていった。本人が強く望んだのだと言う。

松寿だけは相変わらずであったが、それでも寂しげな表情を見せることが多くなった気がする。

幼い頃のすれ違い。

もし、あの時に経友が賭弓で勝っていれば

もし、あの時松寿に相談しなければ

こうして今、元綱と対立することもなかったのかも知れない。

たれば話の意味などないが、それでも経友は考えずにはいられなかった。

「あれ、起きていたのか」

「随分前からな。少し考え事をしていたんだ」

豪快な武人然とした声がして、障子があたりと引き開けられる。経友の前に姿を現したのは、大男であった。

無骨な指に、伸びるに任せた口ひげ。

ぎよろりと大きな鷹の目が、床に伏した経友を見下ろしていた。

大男は、一瞬ぼかんと口を開けた後、

「ああ、考え事？ 似合わないねえ、手前さんはうちの助六と同じ手合いだろうに」

耳をほじくり、気色悪そうに顔を歪めた。

彼の名前は、くにしありすけ国司有相。

毛利家の宿老の一人であり、渡辺勝と並ぶ武人である。

今は若い息子に家の全てを任せて、悠悠自適の生活を送っているそうだ。

「うるさいなあ」

経友は見るからにうざったそうな顔を見ると、眉間に皺を寄せた。有相とは知らぬ仲ではない。

彼は松寿の御守り役であり、ことあるごとに彼女を連れ出そうとする経友に対し、その度に拳骨を見舞わせる役割も担っていた。

(要は口うるさい親父が増えたようなもんなんだ)

と、口を尖らせ、頭をぼりぼりと掻く。

布団をはねあげて、上体を起こす経友に有相は、

「傷が開くぜ。寝ておきなよ」

と声をかけてくる。それに対して経友は、

「もう、あらかた治ったさ」

腕をぐるぐると回して応えて見せた。

「ああ、若いつて嫌だねえ。こつ……ぶつとばしたくなるわ」

「おっさん、何しに来たんだよ」

見るからに羨ましそうな表情を浮かべる有相を、経友は呆れ顔で問い詰める。

「うちの姫様ひめさまから薬の差し入れだよ」

投げられた膏藥を受け取りながら、

「松寿は？」

と、問い詰める。

松寿を無事救い出したあの日から、既に三日が過ぎていた。

「既に陣触れが出ているからなあ。諸勢力の調略や懐柔、兵の集結と息をつかれる暇もねえよ」

「そうか」

「ああ、だからって無駄に動こうとか思うんじゃないぞ。お前さん、ほとんど死にかけみたいなものだったんだ。戦は毛利のもん任せで、ゆつくりと眠っているよ、な？」

「そもいかない。四郎とのことは……俺も、ちゃんとけりをつけなきゃならない」

言つて、経友は力を込めて立ち上がる。

数日間寝込んだお陰で、身体の痛みは大分取れたようだ。
軽く身体を動かし、鈍っていないか確かめる。

その様を見ていた有相が、
「ああ、嫌だ嫌だ。若いつて嫌だねえ。こつ……蹴りとばしたくなるわ」

見るからに嫌そうな顔をする。

「おっさん、ほんと変わらないな……」

「変わらないから、おっさんなんだよ。若いゆえの傲慢って奴だぜ、手前さんの言葉は」

悲しそくに肩を落とす有相。

経友は聞かなかつたことにして、傍にたたんであつた装束を身に纏つた。

「兄者……」

部屋を出た経友の耳に、妹の声が聞こえてくる。

「お前、小倉山から来てたのか」

「……ごめん、四郎を止められなかった」

驚く経友と視線を合わせないよう俯いたまま、玖は悲しそうに応えた。

張りのある肌には、無数の赤い痣が浮かんでおり、彼女の利き腕には添え木が当てられている。

満身創痍の身体を見れば、彼女が激しい戦いを繰り広げてきたことは容易に読み取れる。

「ごめん……」

何度も謝罪の言葉を繰り返してくる。

繰り返される言葉に含まれている感情は、深い後悔。

先程まで、経友が思い出していたあの一件に起因するものであることは疑いようがない。

恐らく……玖もあの一件については自分なりに思うところがあったのだ。

「はあ」

経友はため息をついて、妹の頭をぽんと叩いた。

「そんな顔すんな」

「でも……」

まだ言い足りない妹の頬を、指で引つ張ってやる。

「兄者、痛い……」

「そんな面をしてるからだ」

頬をさする妹を横目で見ながら、経友は鼻息を鳴らす。

「俺は負けず嫌いだな」

「……？」

「賭弓からこの方、負けっぱなしじゃたまらない。この『喧嘩』は誰にも譲るつもりはないぞ。玖、お前にもだ」

「……うん」

玖は一瞬驚いたように口を開けた後、すぐに頷いた。

経友は、聞き分けの良くなった妹の頭をもう一度撫で、その場を後にした。

向かう先は松寿の許。

軍陣の張られた戦場であった。

松寿の采配（一）

「ひい、ふう、みいよお……ほへえ、良くもあんなに集められたもんだなあ」

経友の隣にいる青年が飄々とした声をあげる。

その声色に驚りはなく、まるで危機感が感じられない。

青年は刃渡り四尺（約120センチメートル）を越える大身槍を肩に担ぎ上げながら、穂先にくくりつけた鈴の音をちりんと鳴らした。

現在、松寿の軍勢は、右手の郡山、左手の江の川に挟まれた平地にて元綱軍と向かい合っている。

こちらの数は六百弱。対する相手が四百以上。彼我の戦力差はさほど大きくない。

まさに予断の許さぬ状況だと言えた。

「坂率いる毛利一門衆に、渡辺党。一所衆（足軽のこと）も多いなあ。それにあの馬印は……うお、麻原衆か。没落庶家が夢を見ててえ感じかねえ。どう思っよ、千若？」

だと言っのに、当事者の一人であるはずの青年は楽しくて仕方がないといった表情をしている。

鈴の音交じりの明るい声が一向に鳴り止まないものだから、

「おい、うるせえぞ。助六」

と、経友は青年を睨みつけた。

彼は国司有相の嫡男、助六元相もとすけと言う。

早くから父の代わりに家政を取り仕切っていたために、山口で共に学ぶ機会は無かったのだが、立派な幼馴染の一人である。

「ちえ。なんだよ、折角の戦だつてのに仏頂面なんかしやがってなあ」

口を尖らせる助六に取り合おうとせずに経友は、

「……それより、ありや何だ？ 槍にしちややけに長い」

相合勢の中に混じっている異質な集団を指し示した。

視線の先には渡辺党の旗指物。それを取り囲むように、背の高い槍が天を突いている。

その様はまるで杉林のようであった。

「んあ、ありやあ長槍だな」

「長槍……？」

「そう、確か三間（5、6メートル程度）くらいはあったはずだ。

何でも京都五山の門跡連が考案した最新の軍法なんだとさ」

いまいち理解が追いつかないといった風に、助六は怪訝そうな表情を浮かべる。

その理由は経友にも良く理解できた。

「あんな長い得物を振り回せるのか？」

経友の呟きに、助六が「だよねえ」と同意を示してくる。

一般的に武器は、その長さが長ければ長いほど良いという。

刀で槍に勝つのは難しく、槍で弓に勝つのは難しい。

しかし、それも武器の持つ長さを十全に活かすことができた上で話である。

例えば、槍持ちが刀相手に息のかかる距離まで近づかれれば、流石に苦戦を強いられる。

弓とて、矢を番える暇のない距離まで詰められれば危うい。

そう言った不慮の危機を凌ぐために人は武芸を磨くのだが、かの長槍と言つ得物は少しばかり……長すぎるように、経友には思えた。武芸を磨くにしても、槍の長さが三間もあつては満足に振るうこともできないだろう。

それどころか、隣り合った兵とぶつかり合ってしまう恐れすらある。

正直利点が分からない。

経友は頭に浮かぶ疑問符を処理しきれずに、ただ首をかしげるばかりであった。

「まあ、それでも毛利最強の渡辺党。勝殿の兵だからな。あれは強いんだろっさ」

反面、助六が疑問をとりあえずは捨て置いて、嬉しそうに何度も頷いた。

「お前、何で敵を嬉しそうに語るんだよ」

「ん、尊敬しているからに決まってるだろ？ 当たり前だろっさ」

「お前、何で松寿の側についたんだ……」

助六は呆れ顔の問いかけにきよとんとした後、

「そら、勝殿が四郎様についたからに決まってる。味方にいたら戦えないだろ？」

したり顔でそう言った。

「鶴翼を以って、敵に当たります」

陣中に松寿の凜とした声が響き渡った。

「その御心やいかに」

重臣の問いかけに、松寿が頷く。

身に纏った白い姫具足ががちやりと重い音を立てた。

ふわりとした長い髪は、動きやすいようにと後ろで一つにまとめられている。

「連日の調略により、周辺勢力は静観を保ってくれております。そのため敵味方双方に、援軍が来ることはまずありません」

「すると、このまま真正面から力比べができるか？」

他の一人が吟味するように考え込む。

鶴翼とはまるで鳥が翼を広げたような布陣を布くことから名づけられた陣形であり、多勢が少勢を包囲殲滅する戦に適している。

包囲殲滅 それつまり、敵を生かして返すつもりはないと言っているに等しかった。

「ここで雌雄を決します」

そう言い放つ彼女の瞳には、覚悟の炎が宿っていた。

「兵力差で我々は勝っております。ゆえに敵は集中突破を狙って魚鱗を布くことでしょう」

「なるほど、それで包囲のできる鶴翼と……確かに理屈の上では合っておりますな」

とある武将がもつともらしく頷いた。

彼の発言に評定に集った他の重臣が色めき立つ。

(初陣だからって、こけにしすぎだろう)

末席にいる経友も内心毒づく。

あえて「理屈の上」と前置きした、棘のある発言……。

彼の発言が松寿の判断能力を疑ってかかっているものであることは明白であった。

ただ、彼の懐疑的な態度も分からなくてはならない。

何せ、今相対しているのは若くして頭角を現した天才、相合四郎元綱である。

既に戦の経験を積んでおり、華々しい戦果を挙げている彼に対し、未だ実力の明らかになっていない松寿を比べてみると、どうしても見劣りしてしまうのは確かであったのだ。

まだ表には出ていないが、恐らく疑念を投げかけた彼のような将は他にもいるのだろう。

松寿側に与しているのは、政治的な事情。派閥の関係でしかない。心服していない将の扱いをどうするのか。経友の脳裏に一抹の不安がよぎった。

「その通り、戦場では何が起きるか分かりません……だからこそ、諸將の奮闘を切に願っております」

だが、松寿は自身に対して向けられた数多の懐疑的な感情を跳ね除ける。

その上でさらに憤ることもせずに頭を下げて見せた。

一家の当主に頭を下げられて、悪い気のある人間はいないだろう。あたりに蔓延していた剣呑な雰囲気も、彼女の対応が功を奏して

和らいでいった。

「右翼には式部様率いる一門衆を配します。国司衆は合力してください。左翼は爺やが志道衆を率いて相對してください。与力は兎玉衆。そして、本陣備えは……」

次々と陣触れが出される中で、最後に出された命令に驚きの声が上がった。

当主を守る最も大事な役割を担う本陣備えを任されたのは、井上党。

先程、松寿に対して懐疑的な発言を行った男が率いる軍勢であった。

「ちと宜しいか、女当主殿？」

『女』という言葉をも、殊更強調するようにして、井上党の大將は口を開いた。

猪のような猛々しい面構えの中に、不満の感情がありありと見て取れる。

「何でしょう、元兼様」

「こう言つてはなんだが、毛利の御一門衆よりも我々の方が堅強であろう。何故我々を後ろに回すのだ？」

元兼と呼ばれた男の発言に、陣中がざわめく。

中にはあからさまな敵意を向ける家臣までいる始末だ。

辺りに一触即発の空気が漂う。

しかし、彼に対して文句を言うものは誰もいない。

明らかに不敬であると言つのに、一同口を閉ざして憤怒の感情を押し込めようとしていた。

何故、毛利家臣が彼の不敬に口を挟めないのか……。

それもそのはず、この元兼という男はただの家臣ではない。

実は毛利という家は幾つかの国人領主が寄り合いを為す大所帯である。

最も大きな一族は、毛利家。これには一門衆である福原家や坂家、志道家が連なっている。

更に毛利家を支えるように、渡辺、井上といったいくつかの国人勢力が合流している。

彼らの力は強大で、非常に堅強だ。こと単純な軍事力においては毛利家を凌いでいるといっても言い過ぎではない。

そのため毛利家との関係も、単なる家臣には収まらず、盟友といった立場を獲得しているのだ。

そして彼、元兼はまさに盟友・井上家を率いる当主であった。

(不躰な発言も矜持ゆえ。そして力があるからこそ、無理も通せる) うんざりとした顔で、経友が頭を乱暴に掻き毟る。

幼い時分の記憶の中で、涙を流す松寿の姿がちらついて見えた。

彼女を猿掛城から追い出したのも、井上の一族であったのだ。

「後ろ備えであるからこそ、井上党なのです」

松寿がこくりと頷き、口を開いた。

「相合勢には、屈強と名高い渡辺党があります。あの突破力を真正面から受け止められるのは、毛利家中で最も強力な井上党のみ……元兼様、どうか毛利家をお救いください」

そう言うと、彼女は再び頭を深く下げた。

「ははは、当主殿も中々分かつているようではないか。……まあ、任せておけ。わしが渡辺の首を打ち落として見せようぞ」

愉快そうに腹を揺する元兼。

その様子を見て経友は、

(ちよつと媚を売りすぎじゃないか……?)

と、不満げに低く唸った。

確かに士気がなければ戦もできない。

ゆえに戦の前に諸將の士気を上げるのは総大将の役目なのだが、

経友には松寿の懇願が少し卑屈が過ぎるように思えた。

素直に頭を下げるということは、一見して良策のように思えるが、

実は主従逆転を引き起こす恐れのある諸刃の剣である。

使い所を間違えれば、逆に家中の統制を欠いてしまう恐れすらあるのだ。

少々、上から物を見すぎだろう。

誰にも聞こえぬようにぼつりと呟いた言葉が、聞こえたかは定かでないが、

「何か文句でもあるのか。吉川の」

元兼は不快げな表情を浮かべる経友に対し、獣じみた威嚇とともに噛みついてきた。

「誉れ高き吉川の紋も背負えぬ貴様が、このわしに意見かよ」

元兼の口撃に、ぐうの音も出ずに押し黙る経友。

確かに軍議の場に顔を出しているとは言え、経友は軍勢を率いる身分ではない。

実家の立場を考えれば、戦闘中に名乗りを上げること叶わないだろう。

この場において、どちらの存在が勝敗に影響を及ぼすか。

そんなことは考えずとも明白であった。

「千ちゃん」

その時、二人の間に口を挟むようにして、松寿から声をかけられる。

「松寿……？」

「千ちゃんにはお願いがあるの」

そう言うと、彼女は「これが最も大事なのだ」とばかりに、経友の目を真っ直ぐに見つめてきた。

「私の傍で……何があっても私を守ってね。絶対だよ」

経友は拍子抜けしたように肩を落とすと、

「当たり前だ。何の為にここに残ってると思ってるんだ」

苦笑いして、握り拳を作って見せた。

所変わって相合勢の陣中

元綱は、諸将と最終的な打ち合わせを行っていた。

「衝軛しゅやく三列を以つて、松寿勢と相對する」

「三列……にございますか？」

聞き慣れない単語に、坂広秀が考え込むように口元に手を当てる。衝軛とは縦に長く陣を布いたものを指す。

その様は蛇にも喩えられ、別名を長蛇ちやうだと言った。

幾重にも層が厚くなるために魚鱗などに次いで突破力がある。が、いかんせん後列に遊びが生まれるのが欠点と言えた。

広秀が眉間に皺を寄せる。

無理もない。

基本的に一人よりも二人の方が強い。それは子供でも分かる理屈だ。

だからこそ、数で上回る敵を相手に、わざわざ遊びの生まれる陣を布く理由が分からない。彼の表情からは、そうした疑問がありありと透けて見えた。

元綱はくすりと笑みをこぼしながら、更に続けていく。

「然様。各備の間隔は、一備程度通れる位にあれば良い。左列に広秀を置き、右列を私が務める。中央は勝が担え」

「……四郎が中央ではないのか？」

今度は渡辺勝が、驚いて口を挟んでくる。

「私を守る必要はない。各備が独立してことに当たれ。ただし、勝の率いる渡辺党は前に出るなよ？ 左右と付かず離れず、同じ程度の位置を保て。そして、敵の陣形が崩れた時が、お前の出番だ」

「遊軍はいかがしますか」

広秀が苦言を呈するが、元綱はそれにかぶりを振って切り返す。

「生まれても構わぬ。そも、一々相手の土俵に立って戦う必要はないのだ。敵が算を乱して崩れるまでは、どっかと構えておれば良い」

「成る程……状況が動くまで、まずは耐えよと言つこととでございますか」

ここに至つて元綱の言わんとすることが理解できたのか、広秀は深く頷いた。

そう、元綱はこの戦が単なる正面衝突には終わらないと予測していた。

松寿の頭は悪くない。

恐らく、何らかの策を持ってこの戦に臨んでくるだろう。

そして、野戦において用いることのできる最も有効な策は、

「伏兵だ。伏兵に備える」

遊軍はいざと言う時のために配置しておく予備軍でもある。

通常時は疲弊した前衛の交代要員として備えておき、不意の新手が来た場合の転ばぬ先の杖として機能するのだ。

「総力を用いて敵の援軍にやられては、目も当てられぬ。良いな、敵の援軍が来ないとも限らんだ。我々が用意しているようにな…

…」

元綱はくつくつと声を殺して笑った後、表情を引き締めた。

「これが我が行く末を定める最初の戦になろう。必ず勝つ……そして、私は戦国の表舞台に上りあがるのだ」

両陣営から発せられるときの声が、安芸の空に上っていく。

戦の口火が切って落とされた。

松寿の采配（二）

二、

「前へ、前へ！ 前へッ！」

将兵たちの掛け声が、曇り空の湿った空気を振るわせていく。

陣太鼓が高々と打ち鳴らされた。

勇ましい拍子が彼らの耳朵を震わせていき、前衛の足が一斉に前へと進められる。

「矢盾置けえッ」

左右前方へと迫り出していった兵士たちが、侍大将の掛け声を合図に矢盾を地面に突き立て始める。

程なくして、松寿勢の陣形が出来上がる。

相手を包囲せんとする陣形、鶴翼の陣である。

これに対し、相合勢は衝軛の陣で待ち構えた。

「進めえッ」

縦列に長く陣を布き、左右中央三列に分かれて松寿勢の最前列と向き合う。

こちらも大地に矢盾を突き刺し、盾の隙間から松寿勢を静かに窺った。

「……何だ、あの陣は……見たことねえぞ」

馬上の経友が敵の動きに目を丸くした。

経友は本陣備えに混ざっている。恐らくは、後列中央の自分よりも、前衛の兵士たちの方が驚いていることであろう。

何せ、魚鱗を布いて正面突破を試みてるだろうと予想していた敵軍が、見たこともない陣形を構築してきたのだ。

衝軛ということはこちらの攻撃を待ち構えるのか？

それにしただって、何故三列なのか？

人は未知のものを非常に恐れる。

当てが外れた将たちの間に緊張が走った。

「そつか、こう来るか……これじゃ、迂闊に分断も包囲もできないね」

松寿は本陣中央に陣取っていた。

敵味方双方の動きを皿のようにして見つめ、ぼそりと呟く。

彼女の言つとおり、この見慣れぬ陣形は松寿勢の動きを見事に押さえ込んでいた。

元より兵差が少ないために、相手が広がってしまえば包囲することは難しい。

各備えの厚みを増していることも、大きな意味を持っていた。

こちらが無理に包囲をそのまま続行しようとすれば、縦列陣の突破力を頼みに突撃を仕掛けてくることだろう。

(さらにあの『隙間』が厄介だ……)

三列の間は然程離れていない。

距離にしておよそ二、三十間といったところであろうか。

付かず離れず見張りあい、互いが互いを支えあい、分断されぬように保っている。

もしこちらが無理に軍をねじ込もうとすれば、たちまち挟撃の矢^{やぶ}を受けてしまうことだろう。

「中備えを、前衛に合流させて向かい合ってくださいッ。多少の隙間は構いません！」

松寿の命を伝令が各備えに伝えていく。

前衛の厚みを増すことで、敵の突破を食い止める算段だ。

伝令が戦場を駆け回り、中衛が前衛へと駆け寄っていく。

鶴翼はその姿を変えていき、相合勢と同じ衝輓陣を構築していた。

「互いが縦列に近い陣を強いられるとなると……これは我慢比べになるな」

「元から四郎君は、簡単に倒れる子じゃないよ」

こちらを見ずに、松寿が応える。

恐らく、頭の中では目まぐるしい勢いで試行錯誤が行われている

のだろう。

瞬き一つしない彼女の瞳は、何処か暗く、淀んでいるように見えた。

「射てえッッ」

矢合わせが始まった。

両陣営から一斉に射切り矢が宙に飛び上がり、一拍置いた後に降りかかる。

まるで雨霰だ、と誰かが呟いた。

一つ一つが人を死に至らしめる力を持つ矢の嵐。

それらが、前衛の盾に、陣笠に、肩当に当たっては硬い音を響かせていく。

「ひうっ……」

噛み殺したような悲鳴が上がる。

悲鳴の主は防具の少ない雑兵たちであった。

射切り矢は鎧武者を貫き通すのではなく、肉体を切り裂く用途で作られている。故に彼らのような小物にとっては、最も警戒すべき脅威の一つと言えるのだ。

「ぐうっ」

雑兵の一人が矢に腕を切り裂かれた。

倒れた兵を、慌てて隣の者が笠を付き合わせて回収する。

盾の下に身を隠し、彼らは脅威が過ぎ去るのをただひたすらに待ち続けた。

「次の矢あッ」

再び放たれる矢の嵐。

幾度となく交わされる矢合わせの中で、両陣営は確実に傷ついていく。

だが、致命傷ではない。

備えの厚さが、両者の被害を軽微なものにしていた。

「馳せ組、始めいッ」

陣のほころびを引き出そうと、中衛から騎馬武者が左右十騎ほど駆け出していく。

矢盾の合間を縫うように敵を射ち、埒の明かない現状を崩そうと言っ心算だ。

土煙を巻き上げて、彼らは敵の両側面へと回りこんでいく。

騎馬武者の一人が、弓をしならせた。

雑兵の放つ矢よりも重々しい『それ』が、一直線に盾持ちの首筋に向かっていく。

とすっ、と肉の裂ける音がする。

声も上げずに崩れ落ちていく兵士。

鮮血が辺りに飛び散った。

「んっ」

馬上の武者が拳を固めて、命中を喜んだ。

鈴を括りつけた大身槍を背中に背負い込み、次の獲物を探している。

「国司だ、国司が混ざっておるぞ！ 迎え撃てッ」

警戒を孕んだ叫び声上がる。

程なくして騎馬武者を迎え撃つべく、敵も騎馬武者を繰り出してきた。

両者の間で始まる壮絶な打ち合い。

全身に着込んだ具足を最大限に活用し、互いが弓を射ち、刀を振るい、敵を討たんと奮戦する。

「ちえ、中央に動きは無し、か。しばらくは肩慣らしだな」

鈴をちりりとかき鳴らし、槍に持ち替えた若武者 助六が馬上で大きく槍を旋回させた。

「おお、雨ではなくて矢が降ってきた。今日は本当に良い日だな」

飄々とした声をあげ、助六は馬を駆けさせ迎撃の矢を避ける。

「国司を討ち取れえッ」

「へへ、来た、来た、来たあっ」

幾人の騎馬武者が得物を片手に追いかけてくる様を流し見て、助六は嬉しそうに双眸を細めた。

くんと戦の匂いを感じ取り、馬を翻して敵と相對する。

まずは長巻（柄の長い大太刀）を持った武者。

これに狙いを定め、馬を並べて打ち落とす。

意識を失い落馬していく敵の姿を、心底嬉しそうに見届ける。

「あ、やべ。ぞくつときた。とにかく、まずは一つ目の手柄っ」

更に数多の弓をかくぐり、次に狙うは太刀持ちの騎馬武者。

「どうだ、二つ目っ　と、あれ？」

「そうは行くかよ、助六め！　ここで貴様の素っ首打ち落としてやるッッ」

助六の初撃を受け流した壮年の武者が、返す刀で斬りつけようとし　そのまま、力を失い落馬した。

旋回させた槍の余勢を利用して、石突の連撃を敵の脳天に打ちつけたのだ。

まさに目にも留まらぬ早業であった。

「よし、二つ目は雑魚じゃなかったから、大手柄だな。やったあ！　無邪気に笑みを浮かべる助六。

戦の空気に当てられず、ただ敵の命を刈り取っていく様はさながら鬼神のようであった。

戦況は助六等の活躍もあって、松寿勢優位に進められた。

騎馬武者が突き崩した陣の綻びに、空から矢雨が降りかかる。

徐々に、徐々に左右翼が相合勢を押ししていく。

将兵の表情に浮かび上がる勝利の確信

趨勢が一変したのは、そんな時であった。

戦が始まり、数刻後。

戦場に松寿勢とも相合勢ともつかぬ法螺貝の音色が響き渡った。

「な、何だ。この音はッ」

井上元兼が驚きの声を上げる。

法螺貝の音は……松寿勢の背後から聞こえてきた。

「伝令、背後に敵の援軍現れたり！ その旗印は『三つ引両に九曜紋』でございまするッ」

「な……三つ引両に九曜紋……だと……？」

その報告を聞き、誰よりも驚いたのは経友であった。

顔を蒼白にし、唇をわなわなと震わせる。

「み、見間違いではないのか……？」

「それがしも確かに拝見しましてございます。あれは確かに……」

吉川』の軍勢ッ」

伝令の言葉を皮切りに、火が付いたように元兼の罵声が放たれる。

太刀を引き抜き、野獣のような怒りを経友の身に打ち付ける。

峰と具足がぶつかり合う音が、陣中の動揺をさらに深めた。

「貴様、裏切ったのか！」

「そ、そんなわけがあるかッ！」

首筋に刀を突きつけられながら、経友は必死に否定する。

吉川が相合勢に与力する

まさかの事態に経友の脳は思考停止にまで追い込まれた。

(な、何で……)

真つ白になった頭で、改めて必死に理由を探し求める。

吉川と毛利家の関係は良好そのものであつたはずだ。

兄は毛利の嫁を取っているし、自分と松寿の関係もある。まさに

盟友以上の存在であるはずであつた。

更に玖が言っていたではないか。

『吉川は毛利の援軍要請を断つた』と……。

不義理を為すわけには行かないからこそその『静観』をあえて崩した理由とは何か。

何らかの利を見出したか。または元綱の外交手腕か。それとも

あ。

経友の脳裏で一つの結論が導き出された。

「尼子経久かッ！」

歯をぎりぎりとし、歯を鳴らし、全霊の怒りを込めた瞳で宙を睨みつける。

吉川ほどの家を、心変わりさせることのできる圧力を与えられる存在。

それは尼子の他に考えられなかった。

よくよく考えてみれば、吉川は尼子と繋がりを持つとと考えていたわけで、尼子があるところに付くことは当然と言える。

そして、此度の家督争いで尼子が応援しているのが相合勢……いつぞやの夜が思い起こされる。

あの時、何故猿掛に尼子の兵がいたのか。そして、武田の家臣である重房が待ち構えていたのか。

そう……松寿の拉致から、ここに至るまでのすべての策謀に、尼子は一枚噛んでいたのだ。

「くそつ、くそつ、くそつ！ 悪い、悪い、悪い！」

耐え難い口惜しさに身を打ち震わせる。

まさか松寿の運命を決するこの大一番で、自分の身内が敵に回るとは考えてもいなかった。

籠手で固めた拳で何度も額を殴りつけながら、松寿への謝罪を繰り返した。

「落ち着いてッ。千ちゃん、落ち着いてッ！ まだ負けてないんだよ！」

松寿の叱責が飛ぶ。

彼女はそのまま何時になく切迫した声で、
「両翼を以って、背後の敵を包囲します！ 伝令はその旨を前衛に伝えてください」

「そ、それでは本陣が手薄になります！」

「構いませんッ」

伝令の悲鳴をかき消すように、折れぬ闘志を更に燃え上がらせる。
「井上様……少しの間だけ、本陣備えが突出します。状況が改善するまで、しばし耐えてください」

「くそが、わしとしたことが下手を打ったか。この埋め合わせは必ずして下されよ、女当主殿ッ！」

元兼が太刀を掲げて、兵を鼓舞する。

「者ども励め。安芸で最も強き我々の力。身の程知らずに見せ付けてやろうぞー！」

「おっツ！」

当主の鼓舞に呼応するように、井上党の猛者たちが獲物を掲げ、勇ましい声をあげる。

「千ちゃん……」

「ッ、分かってるツツ！」

松寿に言われずとも分かっていた。

「吉川の。ここに至って、小便漏らして裏切りなぞするんじゃないぞー！」

「吉川の、吉川のと……一々うるせえッ！」

どんな冷たい冬の風が彼女に向かって吹き付けてこようとも。

どんな過酷な運命が待っていようとも。

松寿自身が諦めない限り、自分は松寿を守らなければならないのだ。

『松寿の春』としての役割を全うするため、経友は弓を掲げて雄たけびをあげた。

「敵が誰だろうが、俺が何だろうが関係ない。松寿を傷つける奴は、俺がゆるさねえからな！」

重々しい足音と共に、天を穿つ杉林がやってくる。

渡辺党が突撃を開始した。

松寿の采配(三)

三、

長大な槍が一斉に振り下ろされる。

風を切り裂く音がして、次いで矢盾の割れる音がした。

長槍備えの圧倒的な突進力の一部の隊が蹴散らされる。

悲鳴を上げて押し潰される者、次撃の槍袈で串刺しにされる者。

井上党は叫喚と怒号の渦に巻き込まれていった。

「ええい、畜生め。見慣れぬ軍法を用いてきおつてからに。あんな長物、すぐには動けぬ！ さつさと回り込んで、蹴散らしてしまええっ」

元兼が憤怒の表情をあらわにし、唾を飛ばしながら指示を下すが、中々反撃に移る機会が引き出せない。

長槍備えは最初の突撃を終えると、腰を低くして槍を腰だめに持ち、穂先をこちらへと向けてきた。

どうやら、敵を待ち構える体勢に入ったようだ。

無数の穂先がまるで針山のように密集しており、安易な突撃を許さない。

凄まじい圧力だ。これにはさしもの井上党の猛者たちも気圧されて、自ずと二の足を踏んでしまう。

が、その隙を見逃す渡辺党ではない。

「弓隊、構え……斉射あッ」

後備えが矢を放ってくる。

長槍隊の頭上を飛び越え、数え切れぬほどの矢雨が井上党に襲い掛かった。

「ぎゃっ」

渡辺党の流れるような連携によって、雑兵たちが次々に倒れていく。

弓を放っては槍を突き、槍を突いては弓を放つ。

骨の髄まで訓練された兵士たちは、さながら動く堅城のような働きを見せていた。

「この程度、退けてみせいつ」
具足を頼みに、元兼が兵を叱咤する。

井上党の中でも全身を具足で身を固めた重武装の兵を前面に押し出し、前へ前へと進んでいく。

まさに力押しといえる。が、井上党にしかできない芸当であった。前へ、前へ通し進む。

その間も、徐々に兵たちは倒れていつており、被害は決して浅くはない。

だが、それでも井上党の闘志は揺るぎを見せず、果敢に押し返していった。

「今ぞ。わしも出る。馬廻りは準備をせいつ」

そして、反撃が開始される。

安芸有数の実力者という矜持を胸に秘め、飾り立てられた具足を鳴らして、反撃を開始した。

乱戦。

味方が敵を斬り倒し、敵が味方を突き殺す。

むせ返るような死臭の中で、経友は松寿を守るべく前に立つ。

またがる愛馬が、低く嘶いた。

「分かつてる、豊国」

豊国のたてがみをそつと撫で、弓を番えてぎりりと引き絞る。

これだけの乱戦の中、数多の凶刃から松寿を守りきることは至難の技だろう。

今までの救出劇とは訳の違う、圧倒的な殺気が経友の身体を押し伏せようとしていた。

「来たッ」

兵たちの壁をすり抜けて、右前方から敵兵が飛び出してきた。

長槍を捨て、太刀を引き抜きこちらに迫り来る。

「ッ」

経友は臆せず、引き絞った矢を放つ。

一瞬光が煌いた後、渡辺党の兵士は前のめりに倒れていった。が、ほっとする暇も無い。

更に二人が飛び出て来たため、経友はこれを、

「すっ……」

疾風のような速度で更に矢を二連放ち、倒していく。

矢は全て、敵の急所に深く突き刺さっていた。

「あああああッ！」

渡辺党の雄たけびが間近まで迫っている。

経友は眼を鋭くして、前方の砂塵をねめつけた。

視界に映るは数多もの敵兵の姿。

乱戦に持ち込むことで井上党がその多くを阻んではいたが、それでも彼らは確実にこちらへ向かってきていた。

その勢いが止まる気配は一向に見られない。

直に討ち漏らした兵士たちがこちらの喉元にまで飛び込んでくるだろう。

まるで野犬だ。獲物に群がる野犬の群れを思わせた。

これを全て撃退しようとなると、とてもではないが手が足りない。

経友は苛立たしげに毒づく、

「ええい、焦れたい！」

経友は矢筒から数本の矢を取り出し、口に咥えた。

飛び出してきた敵兵の全てを視界に納め、まず一本目を番える。

ぎりりと引き絞り、そして射抜く。

命中。

更に、口元から一本を取り、射抜く。

こうして、射ては番え、射ては番えを繰り返し、経友は井上党が仕留め損ねた敵兵の全てと渡り合っていく。

「し、信じられん……」

呆気に取られた本陣備えの側近の呟きを耳に捉えながら、経友は口惜しげに齒噛みした。

(これじゃまずい)

こんな曲芸が何時までも続けられるわけではない。

こちらの身体は一つに過ぎず、敵の身体は無数にあるのだ。

勢いと数を頼みに突撃を繰り返す敵を相手に、その全てを食い止め続けるなど土台無理な話というものなのだ。

この拮抗はいずれ破綻を来たす 受け入れたくない事実ではあったが、明白であった。

「くっ」

そして始まる敵の侵入。

「お、おのれっ」

松寿の傍に控える側近たちが、覚悟を決めて敵と斬り結ぶ。

「落ち着いて。総力を持って迎え撃ちます！」

松寿自身も小太刀を引き抜き、切っ先を前方に向ける。

彼女は初陣だと言うのに少しも臆することは無く、気丈に大将としての役割を全うしている。

とは言え、それで彼女の戦闘能力が上がると言うわけでは勿論無く、敵に組み敷かれてしまえば、為す術もなく討ち取られてしまうだろうことは、経友にもよく分かっていた。

(くそ、このままじゃ……)

足元で聞こえる剣戟の音。

懐に飛び込んだ敵兵を仕留めるには、弓では少々具合が悪い。

弓は遠方の敵を仕留めるために作られている。

決して、目の前を縦横無尽に動き回る敵を射抜くためには作られていないのだ。

苦みばしった顔で経友も一瞬躊躇い、

(狐ヶ崎を抜くか いや)

すぐに考えを改めた。

ここで刀を抜いてしまえば、確かに足元の敵に斬りかけることができるかも知れないが、刀一つで幾人もの敵と相対できるわけではない。

弓であるからこそ、今まで複数人を相手に渡り合えたのだ。ならば、刀に切り替えた瞬間、新手への対抗策を失ってしまうことになる。

それではまずい。

殺到してくる敵に対し、成す術もなく飲み込まれてしまうことだろう。

（あちらを取ればこちらが立たず、こちらを取ればあちらが立たない……）

まさに絶体絶命と言えた。

常人なら絶望に打ちひしがれても仕方ない状況下で、経友はわずかな光明を探し求め、必死に考えをめぐらせる。

（『今度』は失敗できないんだ……！！）
今回は今までの難関とは訳が違った。

ここで経友が失敗しては、幼馴染の、松寿の命が危ういのだ。

諦めるわけには行かない。

足りない頭を全力で回して、記憶の全てを引っ張り出そうと試みる。

こんな時に、どうしたら？

こんな状況を覆せる人間はいるのか？

絵物語に出てくるような英傑たちなら、経友の友人たちなら、兄なら、父なら、そして……

『お前は器用じゃない。だから、弓でそれを目指せ』

基爺の太陽の笑顔がありありとまぶたに浮かんで見えた。

経友の瞳に光明が宿っていく。

（そうだよ、こんな状況を覆せる人間がいるじゃないか！）

彼は応仁の乱の真っ只中で、数多の兵と単騎で渡り合った英雄であつた。

こんな状況を覆すことのできる人間が存在する。

その事實は、経友の心を隅から隅まで晴れ渡らせた。

無論、英雄である基爺の自分を自分もできると思うなど、

思いあがりも甚だしいのかも知れない。

だがしかし、それでもやらねばならない。

できるかできないかなどは二の次だ。

近きも遠きも弓で射抜く。

経友は口の端を持ち上げて、全身に力をたぎらせた。

「つまらんことは考えない。何せ俺は不器用なものなッ！」

これを契機に経友の動きが変わった。

静かに矢先を移ろわせ、視界に入る全ての敵を射抜いていく。

足元を駆ける雑兵の急所を寸分違わず射抜いた直後に、遠方を駆ける将の額に矢を突き立てる。

まるで、矢の届く範囲で起こり得る全ての事象が手に取るように理解できた。

(あれは、まだ届かない。こちらは、うん。いける)

射る前から矢の軌道が見えているように感じられ、まるで外す気が起きない。

一人。

二人。

三人。 四人。 五人。 六人。 七人。 八人。 九人。 十人。

「千……ちゃん？」

「心配するな、松寿。敵はそこまでやってこない」

驚く松寿に、経友が笑いかける。

「ば、化け物だ……」

「誰か、誰かあいつを止めるッッ」

敵味方が呆気にとられる中、経友の弓の冴えはますます冴え渡っていく。

耐えかねた敵から矢雨のけん制が放たれても、経友はそれを、

(あれを避けたら、松寿に当たるな。これは豊国に……こちらは捨

て置いても良いか)

冷静に全てを見極め、

「な、なっ……?」

矢の一本を掴み取り、更に一本を籠手で散らし、必要のない矢を全て受け流した。

頬から流れる血を拭おうともせず、経友は掴み取った矢を再び
番え、

「ひぐッ」

敵兵を射殺した。

(何となく分かる。これが基爺や、野洲殿が見ていた『世界』なんだ)

達人にのみ感じ取れる空間。

(ほんの少し、心を一段深く沈めただけでこんな『世界』が広がっているなんて……思っても見なかった)

野洲との鍛錬が功を奏したのか。

絶体絶命の状況が経友の力を引き出したのか。

それとも、元綱への対抗心か。

松寿を守らんとする想いからか。

一体、自分の身に何が起こったのか。経友には良く分からなかったが、今はただこの天恵に感謝した。

経友の認識する円形の『世界』の中で、敵味方の感情が蠢いている。

先程からの経友の奮戦に呆気に取られている者。

心の底から恐怖を覚えている者。

訳が分からずに怒り狂っている者など。

様々な気配を読み取りながら……その中でも一際大きな存在感を放っているものが、こちらへと一直線に向かってきているのを感じ取った。

(あれは)

「ッ?」

寸暇を置かず眼前に迫ってくる飛来物を、経友は籠手で受け払った。

弓ではない。

重々しい手ごたえと共に地面に突き刺さった『それ』は太刀であった。

「古今無双の働きをしている英傑がいるかと思えば、千若丸殿か。

合点がいった！」

勇ましい声と共に、前方の人だかりが蹴散らされる。

敵味方の誰もが恐怖して道を開けてしまう程の存在感。

対面しただけで命が消し飛んでしまうほどの闘志を肌を感じながら、経友は眼前に迫ってくる敵大将 渡辺勝と相對した。

妖殺し、渡辺綱つなの子孫にして、安芸で一、二を争う豪傑。

彼はその巨体を重々しい具足で身を包み、触れば八つ裂きにされそうな威圧感を身に纏い、

「やはり、血筋というものか。英傑の血を受け継ぎしものは、やはり鳳になるのだなあ」

やたら嬉しそうに口を歪め、二振りの野太刀を抜き放った。

馬でも両断にできそうな質量が、血糊を滴らせ煌いている。

あんなものをまともに受ければ、瞬時に真つ二つにされてしまうだろう。

経友は豊国に指示し、いつでも飛びかかれるように力を蓄積させた。

これは好都合であった。

何せ敵将自らが陣中に乗り込んで来たのだ。

ここで仕留めれば、この戦の趨勢は逆転する。

勝てる。

身の内から湧きあがってくる感情が、武者震いに変わっていく。

経友は興奮を抑えきれずに上擦った声で、

「血筋なんかじゃねえよ」

「ほう、ならば何とする」

問答した後、興味深げにこちらを窺う勝に対し、こう返した。

「良くわかんねえッ！」

「そうかッ」

一瞬二人は笑いあう。

そして、次の瞬間には眼前の敵を討ち取らんと、後ろ足を爆ぜさせた。

松寿の采配(四)

二つの竜巻が、互いを食い合うように激突を繰り返す。

袈裟懸けに振り下ろされる大太刀を、経友は柳の枝が揺れるように上体だけで受け流す。

「ぬん」

勝による、その場の全てを根こそぎ抉り取るかのような一撃が。

「すうっ……」

経友による、雷のような神速の射撃が、何度も何度も両者の間で交わされる。

ぶるる、と両者の戦いを彩る名馬たちが、勇ましげにたてがみを振るわせた。

「豊国ッ」

経友の意思を漏らすことなく汲み取り、蒼い疾風が敵の攻撃を避けきって見せる。

豊国の後ろ足が大地を蹴り、経友の身体がぐんと持ち上がった。

全ての重さが消え失せたように感じる。

その足運びは羽根が生えたように軽快であり、まるで春の嵐を思わせた。

「避ける、雲雀紫電」

勝の声に応えるように、漆黒の巨体が大地を揺るがせる。

巨体を背負う渡辺の馬は、重量感溢れる身のこなしで、経友の弓を避けていった。

名馬の格は、全く互角。

後は乗り手の力比べであった。

「武士が御家に逆らうとはなッ。忠君の道ものぶを忘れたか！」

「忘れてない。尽くす相手が異なるだけだッ！」

横薙ぎの一撃に前髪を切り飛ばされつつ、経友は叫ぶ。

「吉川が、吉川を捨てて、それでお前は何なのだ！」

螺旋を描き、空気を切り裂く弓撃が、勝の鉢金を掠めて火花を散らす。

「ただの千若。松寿の……『春』だッ！」

神速の二連射を以って、敵の愛馬を狙う。

急所を狙った致死の鏃を、勝は大太刀を振るって全て斬り払った。

「……そうか、『春』か！ では、『春』よ。貴様が春なら、わしとて春。四郎を明るい道に引き上げるため……貴様はここで、必ず屠るッ」

「どうしたことだ、これは……」

元綱が苛立たしげに爪を噛む。

備えておいた伏兵を用いて、松寿勢を前後から挟撃することに成功した。

突出した敵本陣に、こちらの最高戦力をぶつけて乱戦に持ち込んだ。

全ては計算どおり……であるはずなのに、

「何故、崩れない」

算を乱した軍勢は脆いものだ。

満足に陣を組むこともできなくなり、後は逃げ惑うだけになる。

少なくともその場に留まり、敵の突撃を受け続けることなど不可能なはずなのだ。

「そう、こちらは突破力を勘案し、わざわざ縦列に厚くしているのだ。それを背後に敵を抱えたままで、受けられるはずが……？」

何か重大な思い違いをしている。

基本的に、理論と言うものは絶対だ。そうでないと考えている者は、ただ理解が足りていないだけなのだ。

どんな事象にも原因は存在する。

二人で一人にあたって勝てぬ原因が、味方の貧弱さゆえであり、

敵の強大さゆえであり。

「考える。敵は何故『突破を受け止めることができる』のか……」
考え得る一つめの推測。

それは敵兵力の測り違い。

……ありえない。敵兵力の測り違いは、往々にして恐怖に由来するものだ。例えば、鳥の羽音を軍勢と勘違いして臆病風に吹かれた古の武将のように。

その点、元綱には敵に対する慢心も恐怖もありはしなかった。ならばと、二つめを考える。

古今無双の武将が軍の侵攻を止めている可能性はないだろうか。いや、これもありえないだろう。例えば、唐国の張飛は一騎で万の軍勢を相手にしたが、過去と現在では事情が違い過ぎる。

一人で数十人を相手取れる将など、源平の世でもあるまいし、い
るわけがない。
となると、三つめは……。

「前提……が。前提が破綻していると言うのか？」

例えば、伏兵と言う前提が存在していなかったとしたら？

「いや、そんなわけがない」と首を横に振る。

確かに、法螺貝の音と共に松寿勢は背後の敵を殲滅するために陣形を変えた。

その際に物見にも走らせ、確認までさせたのだ。

結論として『新手の軍勢は確かにいた』。

そもそも、松寿の拉致と言う突発的な事件を起こして以来、元綱は慎重に継ぐ慎重を以って、計略の構築に勤しんだのだ。

尼子との連絡に、周辺勢力との交渉。

更に大方の諸勢力に静観を求めた。これは松寿も行っているはずであり、両勢力の間で意思の疎通ができていたという事実が、穴戸や高橋、そして武田等を代表とする諸勢力による突然の侵略を防ぐであろう。

その上で、領土的な野心を持たず、尚且つ尼子の意向を通すこと

のできる家　つまり、吉川家に狙いを絞り、援軍の要請を行ったのだ。

全ては順調であつたはずなのに……

「待てよ、例えば……『挟撃』と言う前提が崩れていると言う可能性はないのか……？」

伏兵は確かにいたとして。

それが『挟撃』の完成と同義であるとは必ずしも言えないのではないだろうか。

「『伏兵』がいて、『挟撃』に至らない理由……そんなものが……あ　？」

瞬間、元綱の顔から大量の汗が噴き出していった。

その両眼は動揺に揺らぎ、焦点と色を失っていく。

元綱の聡明な頭脳が導き出した、『挟撃に至らぬ理由』とは、まさに戦況を一変させる最悪のものであつたのだ。

「ぐぬっ……」

「ッ」

勝の肩当が矢の衝撃に吹き飛んで行き、経友の射籠手が大きく切り裂かれる。

刹那の時間が永遠にも感じられる死闘が続けられる中、

「今一度だッ」

「おう！」

硬い金属音が響き渡り、二人の表情に驚きの色が混ざる。

経友は太刀を抜いていない。

勝の大太刀を受け止めたのは経友ではなかったのだ。

「おい、こら千若！　勝殿は俺の獲物で、お前のじゃねえ。殺すぞ、この野郎っ」

これ見よがしに怒声が張られ、凄まじい槍の一撃が勝の首筋を掠

めていく。

両者の拮抗を乱す者。それは、

「す、助六ッ？」

「国司のせがれ、助六殿が何故ここに……っ」

鈴槍の若武者であった。

助六は、ここが戦場であると言っことを忘れさせる危機感のない声に、穂先の鈴をちりりと鳴らし、

「勝殿、お久しう！ さあさあ、俺と死合いましょうぞ！」

「は？」

出会い頭のその言葉に、経友は呆気に取られて声を漏らした。

「っ、お久しうじゃねえよ、助六。何でお前がここにいるんだ。背後の敵兵はどうしたんだッ！」

助六は伏兵を迎え撃つべく後方に移動していたはずだ。

それが何故、前衛に戻って来ているのか。

もし、この深刻な時期に自分の持ち場を離れてこちらに来たのだとしたら、笑い事では済まされない。

経友は語気荒くして、強敵との邂逅に身をうずうずとさせていた助六を問い詰めた。

「は？ 敵なんて初めからいやしないよ」

そんな経友の剣幕などお構いなしに、怪訝そうな表情を浮かべる助六。

気づけば、三騎を取り巻く乱戦の様子は、松寿勢優位に進められていた。

「これは……」

勝が呆然として呟いた。

経友も同じく信じられないといった表情で、辺りに視線を走らせる。

場を埋め尽くしているのは松寿勢。

勝が率いる渡辺党は、徐々に徐々に後ろへと押し返されていた。

(井上党の働きなのか。いや、それにしては……)

無論、井上党の奮戦も理由の一端ではあるのだろうが、それだけでは無い。

確実に味方の数が増えていた。

よくよく見てみれば、志道勢や毛利一門衆、そして国司衆など、背後の敵を迎え撃ちにいったはずの味方たちが、次々に前線へと復帰してきている。

何故彼らが？ 背後に現れた吉川の軍勢は一体どうしたのか？

『いるはずのない援軍』が渡辺党を追い立てている。

理解の埒外にある光景に、経友はただ彼らの突撃を見送ることしかできなかつた。

「凄いよ、千ちゃん」

その時、感極まつた松寿の声が経友の耳に届く。

左右を前進する兵たちに挟まれながら、松寿は興奮冷めやらぬ様子で、その場に立っていた。

「松寿……？」

「私、眼の一つや二つ、手や足の一本は覚悟していた。それだけの戦だと思ったから……でも、千ちゃんは本当に私を守ってくれた。

やっぱり千ちゃんは、『春』なんだ……！」

小太刀を前に振りかざし、松寿は涙で潤んだ瞳に更なる闘志を宿らせた。

ほんのり染まった唇が、意思ある言葉を紡ぎだしていく。

「次は私の番だよ。良く見てて」

「毛利の勇敢なる兵たちよッ。ここに至って我が策成れり！ 釣られた敵を全て討ち取り、安芸の平穩取り戻せッ！」

少女特有の可憐な声が、沸き立つた戦場に不思議と響き渡った。渡辺党の援軍に前線へと寄せていた元綱の耳にもこれは届き、痛恨の表情を浮かべる。

「くそ、くそ、くそッ……！」

松寿の声を聞き、元綱は戦場に何が起きているかを全て悟ることができた。

「つまり、『伏兵』自体が……敵の『伏兵』でもあったのだ……！」

松寿は、相合勢が吉川を巻き込むであろうことを予測した。その上で、恐らく彼女は吉川の当主に、こう提案したのだ。

『相合勢の与力として動いてください。その上で、我々の軍勢と接触後、“静観”を決め込んでいただきたい』

軍勢を動かした時点で、吉川の面目は保たれている。

彼らの動きは既に尼子にも報告が行っているであろうし、両者の関係はより良いものになるだろう。

その面目を確保した上で、日和見の提案を行ったのだ。

恐らく、吉川の当主はこう考えたはずだ。

策が看破されている以上、松寿が何らかの対抗策を講じないとも限らない。例えば大内への援軍要請などがそれに当たるだろう。

対抗策が講じられてしまえば、両者の力関係は拮抗し、いたずらに安芸の立場を悪くする羽目になる。

……それは吉川にとってもあまり面白い話ではない。

松寿はこの泣き所を突いたのだ。

『軍を動かした上で日和見を。その後、我々が負けそうならば相合勢に加勢すれば宜しい。我々が勝ちそうならば、そのまま戦を続ける振りだけしていれば宜しい。いずれにせよ、吉川に損はなく、両家の間にわだかまりは残りません』

吉川の現当主は、慎重派として知られる。

どう転んでも損がない策があったのなら、躊躇い無くそれを選ぶだろう。

「こうして、挟撃の成功に沸き立つ我が軍を懐まで釣り出した……」

肉を切らせて骨を断つ。

往古の兵法、苦肉の計が脳裏に浮かんだ。

更に言うならば、何故本陣備えに井上党を配したのか。

そこにも松寿のあざとい策謀が見え隠れしていた。

井上家は独立心の強い国人領主である。ゆえに、捨て置いては下克上を許す恐れもあった。

だが、この戦で少なからぬ被害を受けた井上党は、復興までに多くの時間を費やす羽目になるだろう。

松寿は、『自分にとって要らないものを囷に用いて』敵を釣り出して見せたのだ。

「借屍還魂、調虎離山、抛磚引玉、関門捉賊、上屋抽梯、樹上開花

……そして苦肉計。全て、兵法ではないか！」

松寿の策は、全て兵法に則ったものであった。

それに気づけなかったと言う屈辱。

天才と呼ばれた男が、初めて味わう『敗北』の空気。

元綱が絶望に打ちひしがれている間にも、松寿勢は新たな陣を構築していく。

追撃の手は緩めずに、形取られる姿は鋭利な矢印。

幾重にも積み重なった兵たちが、鏃と化して相合勢を食い破っていった。

鋒矢の陣。

それは軍全体が一筋の矢となり敵を打ち抜く、史上もつとも攻撃に特化した陣形であった。

「三十六計七つお披露目。その仕上がりは……『伏せ鋒矢』ツツ！」

安芸の柊、春近し（一）

「爺やッ！」

「はっ」

少女の声に、並び立つ老齡の重臣が応える。

思慮深い瞳の色を、烈火に染め上げながら毛利の老臣
が、ずいと一足前に出た。 志道翁

「機を与える。一族の恥は一族が以って雪いで見せよ」

「かしこまつてござる。兵を前に上げるぞ、上野ッ！」

息子の名を呼び、手勢に対して命を下す。

「我らが名譽のために、裏切り者を討ち滅ぼせ！」

「えい、えい、おう！」

死兵となつた志道衆は、雪崩のような勢いで坂の備えに食いかか
つていく。

及び腰になつた敵兵に反撃する余力は最早ない。

巨体の獣が、まるでその身をかじり取られるように、彼らは相合
勢本体から切り離されていった。

名のある将が次々と討ち取られていく。

その四散していく様は、さながら蜘蛛の子を散らすようであつた。

「式部ッ」

「ここに」

次いで松寿が命を下すは、祖父の福原式部。

「敵が腹を露わにした。勢の崩れた軍勢を、数を頼みに押し潰せ」

「承知」

衰えを感じさせない嬉々とした声で、式部が笑う。

「この歳になつて、かような戦に出会えるとは。もしや姫様は八幡
大明神の生まれ変わりか」

式部率いる一門衆が、逃げ惑う敵兵を呑み込んでいく。

逃げる者には背中から斬りつけ、その場に立ち竦む者には複数人

が襲い掛かる。

戦場はさながら地獄絵図と化した。

大風がすすきを薙ぎ倒すように、生者が死人に変わっていく。ばったばったと倒れていき、ついに姿を現すは、相合の大將・四郎元綱。

「四郎君……」

割れた人波を道筋に、松寿と元綱の視線が交錯する。

憎悪と嫉妬に塗れた瞳の色に、松寿は薄化粧をした表情を苦痛に強張らせる。

「やらなきやいけないんだ」

松寿の唇から、かすかな声が漏れる。

小鳥が咽ぶような忍び声は、他の誰にも聞かれることなく、ただ経友の耳元にだけ届けられた。

「安芸のこれからを考えたら、もう内紛は許されない。絶対に……四郎君を、こ、こ……ころ……」

二律背反する理性と良心。

己の良心をひたすらに抑え込み、ただ肉親を滅ぼさんとする修羅の決意を搾り出そうとしている。

「……見てられない」

経友の口から、独りでに言葉が漏れ出でた。

苦悶している彼女の姿を見るに耐えかね、

「それ以上は言わなくて良い。俺がやる」

言って、松寿に手を差し伸べる。

「千ちゃん」

「その小刀を貸してくれ。解ほれた糸を切ってくる」

「ぐっ、こやつら……四郎、四郎！」

「おっと、逃がしやしないぜ。勝殿ッ」

全てをなげうつて、四郎を救わんと身を翻す勝に向けて、助六の鈴槍が振り下ろされる。

「邪魔だ、若造。そこをどけえッ！」

「んなもん、駄目に決まってるだろうが」

助六の猛攻をすんでの所で見切り、勝は叫んだ。

大太刀と槍がぶつかり合う。

戦の要であつた渡辺党も、いまや井上党と国司衆によつて本隊と分断されている。

先刻までの鬼神のようなおもかげは、もう何処にも見られない。

松寿勢の牙は、確実に元綱の喉元へと食い込んでいた。

形勢逆転に続く、神速の突撃。

（悔しいが、ものが違う）

少女に秘められた凄まじい才に、勝は強く齒噛みした。

毛利家の松寿姫。

彼女は、ただ流されるだけの内気な少女ではなかつた。

この戦国に名を打ち立てることのできる、強大な伏竜であつただ。

彼女のか細い手から発せられる号令は、軍配は、戦働きは、恐らく安芸の将の誰と比べても見劣りしない。

いや、それどころか大内や尼子さえも、あるいは。

西国を統べる覇者たちと肩を並べるなど、誇大に過ぎるのかもしれないが、それでもいつかはそうなってしまう……

そんな予感を感じさせる大器であつた。

「だが、それでもわしは四郎を支えると決めたのだ……」

真鋼のような忠義の心が、改めて赤く燃え上がる。

勝の元綱に向ける親愛の情は、親のそれとも良く似ていた。

「このような所で負けてたまるかッ……！」

裂はくの気合。

豪腕が繰り出す大太刀の一撃は、助六の胸元を掠め、紺色の具足を斬り飛ばした。

助六の胸に浅くない刀傷が浮き上がる。

吹き出た血の臭いに、助六は鼻をひくつかせ、

「がっかりだ、勝殿」

心底つまらなそうな顔をした。

「忠義にしては、温すぎる。その感情は『武人』の持つものじゃない」

鈴槍を逆手に持ち、若い瞳をぎらつかせる。

「矢雨の降る戦場に、人の親はお呼びじゃない。……ここでその首打ち落とさせてもらうぜ」

馬の腹を蹴り、修羅を宿した助六が迫り来る。

ちりん、ちりと鈴を鳴らし、黄泉路への手向けとばかりに奥義の名を呟いた。

「無憂華あそかはな」

痛みはなかった。

瞬時に意識が刈り取られ、勝の身体が地面へと倒れていく。

「し　ろ　」

長年に渡って元綱を支えた、まさに親代わりとも言つべき存在が呟く今際の言葉は、当たり前と言つべきか、愛すべき主の名前であった。

「勝　」

信頼を寄せる片腕が討ち取られていく様を目の当たりにしながら、元綱は絶句した。

「殿、お逃げくださいッ」

「あ　あ……」

言葉が言葉にならずに口から出る。

涙が独りでに流れ落ちる。

元綱に訪れる輝かしい未来を、その横で讃えてくれるはずであっ

た男

彼が無残にも命を散らしていった事実を、元綱は受け入れられずにいた。

「駄目だ、勝……私たちはここで終る人間ではないだろう」
今にも彼が不屈の精神で立ち上がってくれる……。

そうであつて欲しいと何度も願うが、勝の巨体はぴくりとも動かない。

元綱の悲痛な願望が叶えられることはなかった。

「うそだ……うそだ……」

悲痛に顔を歪ませて、何度も何度もかぶりを振った。

『四郎、逃げるぞ。まだ機はやってくる』

破綻した心を平静に持ち直さんと、幻聴が聞こえてくる。

だが、戦場はそのような夢に浸る暇すら、彼に与えてはくれなかった。

「相合殿、お覚悟をッ」

先程とは立場が逆転し、今度は元綱に対して殺到する松寿勢の兵たち。

迫り来る死の濃密な気配が、元綱を現実へと引き戻した。

「ああああああああああああああああああッッ！」

元綱は絶叫した。

自身の首を取らんと刃を向ける兵たちを斬り倒し、手元の愛馬を引き寄せる。

「ここで私まで討ち取られるのは駄目だ。絶対に駄目だ……何のために立ち上がったか分からんではないか……！」

全ての感情を吐き出して、元綱は即座に頭を切り替えた。

自身の命運はまだ尽きていない。

生きていればいくらでもやり直せる。

これからも努力を重ねていけば、必ず未来を掴み取れる……。

そう言い聞かせながら、元綱は重臣たちに号令を発しようとして、
「退くぞ、者ども。馬に乗」

その表情が怒りに塗り替えられた。

「待てよ、四郎」

若草色の戦装束に身を固め、無双の名馬を従える若武者が、元綱の前に躍り出る。

この男がいなければ。

この男が邪魔をしなければ。

眼前の若武者は、憎んでも憎みきれない 昔馴染であった。

「千……若……経友、貴様……」

「松寿の代理だ。決着をつけよう」

経友はそう言うと、毛利の家紋が刻まれた小刀を頭上にかざした。

「郡山殿の守り刀だ……」

「元春公の……毛利家の家宝だと……ッ？」

重臣たちが、口々に慌てる。

経友がかざしたそれは、毛利家中興の祖 南北朝の英雄、毛利

元春の刀であったのだ。

……いつの間にか、曇り空は晴れていた。

さんと降る日光を身に受けて、『元春の小刀』は目映いほどの光を放つ。

「元春……？ 知らん名前だが、良い名だな。『元就の春』とはお

あつらえ向きじゃないか」

経友は一瞬怪訝そうな表情を浮かべた後、

「その名前、頂戴しよう。俺は今から『元春』だ」

高らかに宣言する。

この経友の……いや、元春の名乗りを元綱はどうしても許すことができなかった。

「貴様が……私の先祖の名を、その名前を……名乗るんじゃないッッ！」

激昂した元綱が馬に飛び乗り、刀を抜き放つ。

数年越しの再戦が、今始まるうとしていた。

「千若あああッッ」

「すう」

二面を兵に挟まれた、長く細い人壁の道を二人の騎馬武者が駆けていく。

「貴様さえいなければあッ！」

横薙ぎの一撃を、元春は上体をそらしてやり過ぐす。

「賭弓以来の真剣勝負だ。全てをぶつけて、かかって来い」

「うるさいッ、うるさいッ、うるさいッ　お前が、上から私を見るなッ！」

元春の神弓が、元綱の肩当を弾き飛ばす。

二頭の名馬が何度もぶつかり合い、その度に決死の打ち合いが繰り返された。

「元就だと……？　元春だと……？　ふざけるなよ、そこは貴様らがいる『場所』じゃない！」

「居て良い『場所』かどうかは自分で決める。そんなものはお前に言われる筋合いもない」

虚実を交えた元綱の超人じみた連撃を、元春は顔色も変えずに愛馬の歩速を変えて避けきってみせる。

その身を反らせば、刃が鼻先を掠め、籠手を上げては受け流す。

完全に空間を把握した元春にとって、元綱の攻撃をあしらうことは最早造作もなかった。

「何故だ……何故届かん」

「運が良かっただけさ」

長年羨んでいた存在が、見る影もない。

二人の間に生まれた差は、努力の質では断じてない。

ただ巡り合わせた天運に差があったのだ。

様々な出会いに、大きな挫折。

そして松寿への思いが元春を強くした。

「終わりにしよう、四郎」

決着の覚悟を以って、元綱を見つめる。

仲の良かった馴染みの顔は、今や憎悪に彩られていた。

何時の間にやら周囲に兵の壁はなくなっている。

戦の喧騒も遠ざかり、山間の平野が静かに広がっていた。

「すう」

元春は一旦駆け足を速めて元綱の前に出ると、短い呼気と共に身を翻した。

両者向かい合う形になり、共にぶつかりあわんと駆け始める。

「おのれええええッツ！」

名馬の脚が大地を踏み抜き、その身に春風を纏わせる。

千若元春の感じ取る『世界』の中で、予測される敵の攻撃が虚像となつて点々と描かれた。

このまま駆け合えば、一步、二歩、三歩目で元綱の刃が振り下ろされ、この身を両断することになるだろう。

まず、一步。

そして、もう一步……。

「豊国！」

必勝の確信が脳裏を走り、元春は跳んだ。

愛馬の脚が大地を離れ、宙を舞う。

「あ」

驚いた元綱の顔を、背中から窺い、

「椿落」

すれ違いざまに矢が放たれる。

祖父から伝えられた技の名前を誰ともなしに投げかけて、元春は勝利の到来を宣言した。

安芸の柊、春近し（二）

「はあっ……はあっ……ぐ……うっ……」
落馬した際に折った足を引きずりながら、元綱は必死に敵から逃げていた。

よろよると山道を登っていくその様は、先刻までの覇気を纏った若者とは似ても似つかぬ姿であった。

背中に受けた矢傷から、赤い血の色が装束一面に広がっている。今、身体を突き動かしているのは、ただ生への渴望のみ。死にたくない。

とにかく、生きたい。

それだけを考えて、元綱は必死にあがき続けた。

えい、えい、おう。えい、えい、おう

山の麓から勝どきの声が聞こえてくる。

戦は松寿勢の勝利に終わったのだ。

生まれて初めて経験する純粹なる敗北。

「うっ……うっ……」

元綱は泣いていた。

溢れ出てくる涙と鼻水を拭おうともせず、ただ慟哭する。

松寿の追っ手はやってこない。

深追いされなかったのは慈悲によるものか、それとも単なる侮りか。

すべてを省みず、ただ生き残ることのみを一心に考え続ける元綱には判じようがないことであった。

「勝う……ッ」

討ち取られた腹心のことを想う。

本家に弓を引くという修羅の道を歩む元綱に、文句も言わずに付

き従つてくれた武人。

結局、自分は彼の期待に応えてやることができなかつた。

天下の表舞台上が上がつて見せると豪語しておきながら、彼の忠義に何も報いてやれない自分が何とも惨めで……

それなのにこの苦しみから何とか抜け出したくて、未だ彼に助けを求めているこの性根が情けなくてたまらなかつた。

「勝、ごめんよ……」

必死に天へ懇願する。

もし、彼が生きていたのならば、どん底に落ちた元綱を見てどう思つのだらう。

情けないと叱るだらうか。

……いや、恐らくは手を差し伸べてくれるだらう。

そう言う男であつた。

「母様……」

最愛の母のことを思う。

息子が敗れた以上、派閥の長たる母親もただでは済むまい。

良くて追放……最悪の場合は処刑もあり得よう。

「申し訳ありません、母様……」

一体、何処で道を違えたのか。

姉のせいか？

それとも、吉川の三男坊が元凶か？

先刻までなら、彼らの顔かたちを思い起こしただけで激情に駆られたはずなのに、今となつては最早敵を恨む気力も湧いてこなかつた。

まるで、あの雷撃のような矢撃に魂を吹き飛ばされたかのような恨みの矛先が外へと向かわなければ、それは自然と内側へ向けられる。

元綱は、自身の傲慢と浅慮を省みて、強く、強く後悔した。

「妾の子として生まれ……分不相応に力を持ち、母に要らぬ野心を抱かせて、それを諫める心すら持てず、憎しみに任せて乱を起こし

た

「何処かで歯止めをかけてさえいたならば、と考えずにはいられない。」

結局のところ、元綱は自分で進む道を選んでいるわけではないな

った。
父の言葉に乗せられて、母の期待に持ち上げられ、周りの家臣に
囃し立てられる。

そう、ただ流されていただけなのだ。

「尼子に逆らってまで縁談を断った姉上の方が……よっぽど心が強
かつたんだ」

松寿という大器を見極められずにいたことを強く恥じる。

慢心と憎しみに曇った眼には、彼女は『我侂な愚か者』としか映
らなかった。

その誤解が彼女とのいさかいを招いたのだ。

拳句の果てには凡愚と侮った好敵手にまで完膚なきまでに叩きの
めされ、全てを失う羽目になり

と、そこまで考え、元綱は「……ああ、何だ」と納得した。

「やっぱり私のせいじゃないか……」

笑うことしかできなかった。

「……玖姫、君の言うとおりだったよ。とどのつまりは自分次第な
んだな」

それはこの場にはいない幼馴染に向けて放ったつもりの言葉であつ
たが、

「四郎……」

果たして答えは返って来た。

「玖姫……?」

後ろを振り返る。

悲しげに潤んだ猫目に、癖のついた短髪。

彼女は必死に山を駆け上がってきたのか、随分と息を切らせてい
た。

いつぞやの夜のような戦装束ではなく、動きやすい小袖と短めの袴を身に纏っている。

その姿は幼い頃に目にした彼女の姿と比べると、大分やんちゃに思えたが、それでも十分可憐であった。

「そうか、私はここで君に殺されるのだな」

彼女の左手に納められている小太刀に目を向け、元綱は静かに呟いた。

「それも良いのかも知れないな」

そつと目を閉じる。

狂おしいまでの生への渴求は、何時の間にもやがて霧散していた。

「謝らなくちゃと……思っていたんだ」

「何故？」

死を待つ元綱に、玖の涙声が届けられる。

「あたしが皆の絆をかき乱したから……あたしの、せいなんだもの」

「それは違うよ、玖姫」

悲しみに震える玖の言葉を、元綱は優しく否定する。

毛利家の抱えていた不和は、玖一人がいなくても何とかなるほど生易しいものではなかった。

あの時、彼女が我俣を言わずとも、いずれは何処かで瓦解したはずなのだ。

「……ここで終わりにしよう」

そう言つて玖を促し、最期の時を待つ。

だが、彼女の刃は、いつまでも元綱の胸元に届かなかつた。

「優しいのだね」

そう言つて笑つと、元綱は涙をはらはらと落とす玖に背を向ける。

「今更姉上たちと共に歩もうとは思わない。私はこのまま何処かへ消えるよ」

「四郎」

「さようなら、玖姫。姉上たちに、ごめんとだけ伝えておいてくれ」

一方、出雲の月山城

「そうか、姫が勝ったのか」

「はい」

松寿勢勝利の報告を聞き、月山城の主・尼子経久は嬉しそうに頬を緩ませた。

「……あれだけ目をかけてやったのに、この体たらく。相合への支援に一体どれだけの手間と銭をかけたと思っっているのだ……！」

重臣の亀井安綱が、顔を赤黒くして吐き捨てる。

毛利家への調略を一手に引き受けていた彼にとって、今回の相合勢敗退はまさに今までの努力が全て無駄になったようなものであったのだろう。

武田を初めとする諸勢力への要請に、安芸へ送った兵たちの損害、頭痛の種は山ほどにあった。

それゆえ、なおも愚痴愚痴と続けようとする安綱であったが、

「まあ、あの娘がそう望めば、そうなるのであるうなあ」

さも当然といった経久の言葉に、彼の怒りはかき消される。

「そこまでの器ですか」

「さあおう」

訝しげに問いかける安綱をはぐらかすように、経久は笑った。

対する安綱の困惑は更に深まっていく。

ほとんど顔を会わせたことのない少女に対して、何故このような評価ができるのか。

そう言わんばかりの表情であった。

彼はまるで、自分の調略が失敗するものだと言われているように感じたのか、

「笑い事ではありませんぬ」

呈した苦言が、余計に経久の笑いを誘った。

「分らん奴じゃ」

手にした扇子をぴしゃりと閉じて、安綱の額をこつんと小突く。

「いずれにせよ、こたびの内乱で、安芸の国人一揆は揺らぎを見せるじゃろう。我々はその隙にゆるりと石見を切り取ればよいだけよ」

「しかし、毛利の恨みは深うござる。これでは、今後の障害になりましよう」

「阿呆」

呆れ気味にため息をついて、

「そのための武田であろう？ 腐っても虎に違いはないのだから、存分に暴れてもらえよ」

「はっ……」

静かになつた安綱から視線を移し、澄んだ青空を仰ぎ見た。

「しかし、あの若造がのう」

まるで春風のような若者。

「確か千若経友と言つたかな」

彼が此度の騒動を収めた立役者の一人であることは間違いがないだろう。

物怖じしない一本気には、経久も何処か好感を覚えた。

「まだ祖父には遠く及ばぬが、いずれは鷹に……なるとも知れぬな」
経久はそう言うと、眩しそくに眼を細めた。

いずれ自分に相並ぶかも知れぬ若者たちを思いながら、彼らの『完成』を心より願う。

「若造どもよ、乱世の舞台にはよ上がってこい。ほんにこの世は良
い所じゃぞ」

「千ちゃん、ここにいたんだ」

「ん」

寝ながら松寿に声をかける。

さんと降り注いでくる柔らかい日差しの中で、元春はうとうとと舟を漕いでいた。

「……帰るとこもねえしなあ」

呆けた頭で考える。

結果はどうであれ、実家の方針に楯突いた以上、今の元春には帰る家がなかった。

吉川家にも建前というものがある。

尼子方につくと宣言した以上、実家も松寿に与した身内を受け入れるわけにはいかないであろうし、元春自身もこれ以上不利益をもたらそうという気にはなれなかった。

いわば浪人と変わらぬ身の上だ。

生活のことを考えれば、すぐにでも今後のことを決める必要があった。

そこで、とりあえずは、と考えを巡らせる。

「食い扶持ができるまで、しばらく厄介になるけど、良いか？」

「し、しばらくと言わずに何時までもっ！」

何気なく言った元春の言葉に、松寿は思いの外食いついた。

身を乗り出し彼女に驚いて、少しのけぞりながら、

「お、おう」

乾いた返事をする。

すると、松寿は取り乱した自分に気が付いたのか、こぼんと一度咳払いをした後、

「千ちゃんみたいな武将が無禄なんてありえないもの。何処に行っただって侍大将がつとまるよ。で、うちは今人材不足でしょ？ まさにうってつけじゃないっ」

もっともらしい理屈をすらすらと並び立てていく。

元春には、そんな彼女の仕草が妙におかしく感じられて、

「まあ、『春』だしな。助けの欲しい時は言ってくれよ」

「う、うん」

くすりと笑って、再び昼寝を楽しむべく目を瞑った。
穏やかな風が頬を撫でていく中、

「ありがとうね」

松寿が元春に笑いかける。

「ん？」

「四郎君のこと」

「ああ、ちよつと目を逸らしたんだ。気づいたら、もういなかった」
何でもないように返す。

「どう思われていても良いから……やっぱり家族には生きていてもらいたいもん」

「そっか」

寂しげに微笑む彼女のふわりとした長い髪が、風に揺られて浮き上がる。

元春は、彼女の黒髪を彩る白い花飾りに目を留めて、

「髪飾り、ちゃんとつけてるんだな」

「うん。だって、つけなきゃもつたいないじゃない」

恥ずかしそうに目を逸らす松寿に対し、

「それもそうだな」

と相槌を打った。

「あ、あのね。椿をくれた意味って、その……やっぱり……」

急にどきまぎとし始める松寿を見て、

「ああ、それな。悪い」

元春は思い出したように声を上げた。

「へ………？」

「椿って、あまり縁起良くないんだ。基爺が人の首みたいにぼとぼと落ちるって言ってさあ」

「むっ」

想像していた答えと違ったのか、松寿は何故か頬を膨らませ、不満げな表情を見せる。

「ん、どうした？」

「何でもないッ」

「変な奴だなあ」

ふいとそっぽを向く松寿の髪から、嗅ぎ慣れた香りが漂ってくる。春を待つ、柊の香りが元春の鼻をくすぐった。

安芸の柎、春近し（二）（後書き）

長い間お付き合い頂きありがとうございました。

途中、一ヶ月ほど更新期間を空けてしまい、本当に申し訳ありません。

途中詰まることもありましたが、今までモチベーションを保ち続けることができたのは、ひとえに読者の皆様のお陰です。

重ね重ね、お礼を申し上げます。

さて、区切りも付いたので、これで『安芸の柎、春近し』は一端の終了とさせていただきます。

しばらく、設定の練り直しや改稿作業（もしくは新作執筆）を行いたいと思いますので、是非ともご了承ください。

もっと読者を楽しませることができるよう、これからも修練を重ねていく予定です。

なにとぞこれからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8104p/>

安芸の柊、春近し【架空戦国記】

2011年5月25日18時55分発行